IBM Unica Marketing Platform
バージョン 8 リリース 6
2012 年 11 月 30 日

インストール・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 131 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Marketing Platform のバージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Unica Marketing Platform
Version 8 Release 6
November 30, 2012
Installation Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.5

© Copyright IBM Corporation 1999, 2012.

目次

第 1 章 インストールの準備 1

Marketing Platform 基本インストールのチェックリスト 1
IBM Unica のコンポーネントとそれらのインストール場所 2
前提条件. 3
システム要件 3
必要な知識 4
必要な権限 4
アップグレードまたはクラスターでインストールを行う場合 4

第 2 章 IBM Unica Marketing Platform データ・ソースの準備 5

ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成. 5
ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する. 6
ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成. 7
JDBC 接続の情報. 7
Marketing Platform データベース情報チェックリスト 9

第 3 章 IBM Unica Marketing Platform のインストール 11

IBM Unica Marketing インストーラーが機能する方法 11
インストーラー・ファイルに関する単一ディレクトリーの要件 12
JAVA_HOME 環境変数の確認 12
製品のインストール・ディレクトリーの選択 . . 13
インストール・タイプ. 13
インストール・モード. 13
不在モードを使用した複数回にわたるインストール 14
システム・テーブルの自動作成と手動作成 . . . 16
クラスター・デプロイメント用の EAR ファイルの作成 16
IBM サイト ID 17
IBM Unica Marketing インストーラーの終了コード 17
Marketing Platform コンポーネントをインストールする場所 19
ステップ: 必要な情報の入手. 20
ステップ: IBM Unica インストーラーの実行 . . . 21
ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる . . 22

第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ 25

WebLogic 上に Marketing Platform をデプロイする際のガイドライン 25
すべてのバージョンの WebSphere に Marketing Platform を配置する際のガイドライン 26
ステップ: Marketing Platform のインストールの検証 28

第 5 章 デプロイメント後の IBM Unica Marketing Platform の構成 31

デフォルト・パスワード設定を変更するには . . . 31

第 6 章 クラスターでの IBM Unica Marketing Platform のインストール . . 33

第 7 章 IBM Unica Marketing Platform のアップグレード 35

全 IBM Unica Marketing 製品に関するアップグレード前提条件 35
Oracle または DB2 のみ: 自動コミット要件 . . 36
タイム・ゾーン・サポートに関するスケジュールのアップグレード 36
IBM Unica フレーム・セットを再ブランド化した場合 36
Marketing Platform のアップグレードのシナリオ . . 37
自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法 38
手動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法 40
Affinium Manager 7.5.x からのアップグレードについて 46
自動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法 47
手動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法 49
最新の JCE ポリシー・ファイルを入手する方法 56
クラスター環境でのアップグレード 57

第 8 章 レポートのインストール 59

レポート・コンポーネントのインストール 59
ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの設定 (必要な場合) 59
ステップ: IBM Unica Marketing システムへのレポート・スキーマのインストール 60
ステップ: 構成する認証モードの判別. 61
ステップ: JDBC データ・ソースの作成 62
オプションのステップ: 電子メール・サーバー情報の入手 63
レポート・ビューまたはテーブルの設定. 63

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

構成チェックリスト: レポート・ビューまたはテーブル 63
ステップ: Reports SQL ジェネレーターのテンプレートのロード 63
ステップ: ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成 63
ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成 65
テーブルおよびマテリアライズ・ビューのみのためのステップ: データ同期の設定 69
IBM Cognos BI のインストールおよびテスト . . . 69
IBM Cognos BI、IBM Unica レポート、およびドメイン 69
IBM Cognos BI アプリケーション. 69
IBM Cognos BI インストール・オプションおよび Cognos ドキュメント 70
IBM Cognos BI Web アプリケーションおよび Web サーバー 71
IBM Cognos BI およびロケール 71
IBM Cognos BI インストールのテスト 71
Cognos システムへの IBM Unica Marketing 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール 72
インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統合 72
ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手 73
ステップ: IBM Cognos システムでのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール . 73
ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成 74
オプションのステップ: 電子メール通知の設定. . 75
ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成 76
ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート 76
ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合) 77
ステップ: レポートの内部リンクの有効化 . . . 78
ステップ: データ・ソース名の確認と公開 . . . 79
ステップ: Marketing Platform 内の Cognos レポート・プロパティーを構成する 79
ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト 80
IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成する 81
ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト . . 85
レポートの次のステップ 86
レポート・フォルダー権限を構成するには . . . 86

第 9 章 レポートのアップグレード . . . 89

レポート・コンポーネントのアップグレードの準備 90
ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの存在の確認 90
レポート・スキーマおよびレポート統合の設定が Marketing Platform でアップグレードされていることの確認 90
Cognos モデルおよびレポート・アーカイブのバックアップ 91
ステップ: 必要に応じて、IBM Cognos BI をアップグレードする 91
バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード 91
ステップ: レポート・スキーマおよびレポート・ビューまたはレポート・テーブルのアップグレード 91
ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手 95
ステップ: インストーラーの実行および IBM Unica 統合コンポーネントのアップグレード . . 95
ステップ: 7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール 96
ステップ: 古い「セル別のキャンペーン実績」レポートの更新 98
ステップ: 古い「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートの更新 101
バージョン 8.x からのレポートのアップグレード 105
ステップ: 8.x モデルのアップグレードおよび新規レポートのインストール 105

付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて 107

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティーの実行 109
追加マシンで Marketing Platform ユーティリティーを設定する方法 109
参照: Marketing Platform ユーティリティー . . . 110
configTool ユーティリティー 110
datafilteringScriptTool ユーティリティー. . . . 114
encryptPasswords ユーティリティー 116
partitionTool ユーティリティー 117
populateDb ユーティリティー 119
restoreAccess ユーティリティー 120
scheduler_console_client ユーティリティー . . . 122
Marketing Platform SQL スクリプトについて . . . 123
参照: Marketing Platform SQL スクリプト 124
すべてのデータの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql) 124
データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql) 124
システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql) 125
システム・テーブルの作成 126

付録 B. IBM Unica 製品のアンインストール 127

IBM Unica 製品をアンインストールするには. . . 127

IBM Unica 技術サポートへの連絡 . . . 129

特記事項. 131

商標 133

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項 133

第 1 章 インストールの準備

IBM® Unica® 製品のインストールは複数のステップから成るプロセスであり、IBM Unica で提供されないさまざまなソフトウェア/ハードウェア要素を扱います。 IBM Unica の資料には、IBM Unica 製品のインストールに必要な特定の構成と手順についてのガイドがいくつか示されていますが、IBM Unica で提供されないシステムを扱う詳しい方法については、それらの製品の資料を参照してください。

IBM Unica Marketing ソフトウェアのインストールを始める前に、ビジネス目標、それをサポートするための必要なハードウェア/ソフトウェア環境などを含むインストール計画を立ててください。

Marketing Platform 基本インストールのチェックリスト

この章を読むと、インストール・プロセスの概要を理解して、実際の環境、予定しているインストール順序、および知識レベルが前提条件を満たしていることを確認できます。

以下のリストは、Marketing Platform の基本インストールを実行するために必要なステップの大まかな概要です。これらのステップについての詳細情報は、このガイドの残りの部分で提供されます。

Marketing Platform データ・ソースの準備

1. 5 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成』

   Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマを作成して、情報を記録します。
2. 6 ページの『ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する』

   Marketing Platform システム・テーブル・データベース用のデータベース・ドライバーを Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに追加します。
3. 7 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成』

   Marketing Platform システム・テーブル・データベースへの JDBC 接続を作成します。接続の JNDI 名として UnicaPlatformDS を必ず使用してください。

Marketing Platform のインストール

1. 11 ページの『第 3 章 IBM Unica Marketing Platform のインストール』

   IBM Unica および Marketing Platform のインストーラーをダウンロードします。
2. 20 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』

© IBM Corporation 1999, 2012

必要なデータベースおよび Web アプリケーション・サーバーの情報を収集します。

3. 21 ページの『ステップ: IBM Unica インストーラーの実行』

   IBM Unica インストーラーは、同じディレクトリー内に検出されるすべての製品のインストーラーを起動します。

4. 22 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』

   インストーラーによる Marketing Platform システム・テーブルの自動作成が企業のポリシーで許可されない場合、または接続の失敗のため自動作成が行われなかった場合には、手動でテーブルを作成します。

Marketing Platform のデプロイ

1. 25 ページの『第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ』

   WebSphere® または WebLogic の固有のガイドラインに従います。

2. 28 ページの『ステップ: Marketing Platform のインストールの検証』

   IBM Unica Marketing にログインして基本機能を検査します。

Marketing Platform の構成

1. 31 ページの『第 5 章 デプロイメント後の IBM Unica Marketing Platform の構成』

   パスワード制約の設定または Java™ Message Service の構成 (スケジューラーのパフォーマンス最適化のため)、またはレポート機能のインストールを行います。

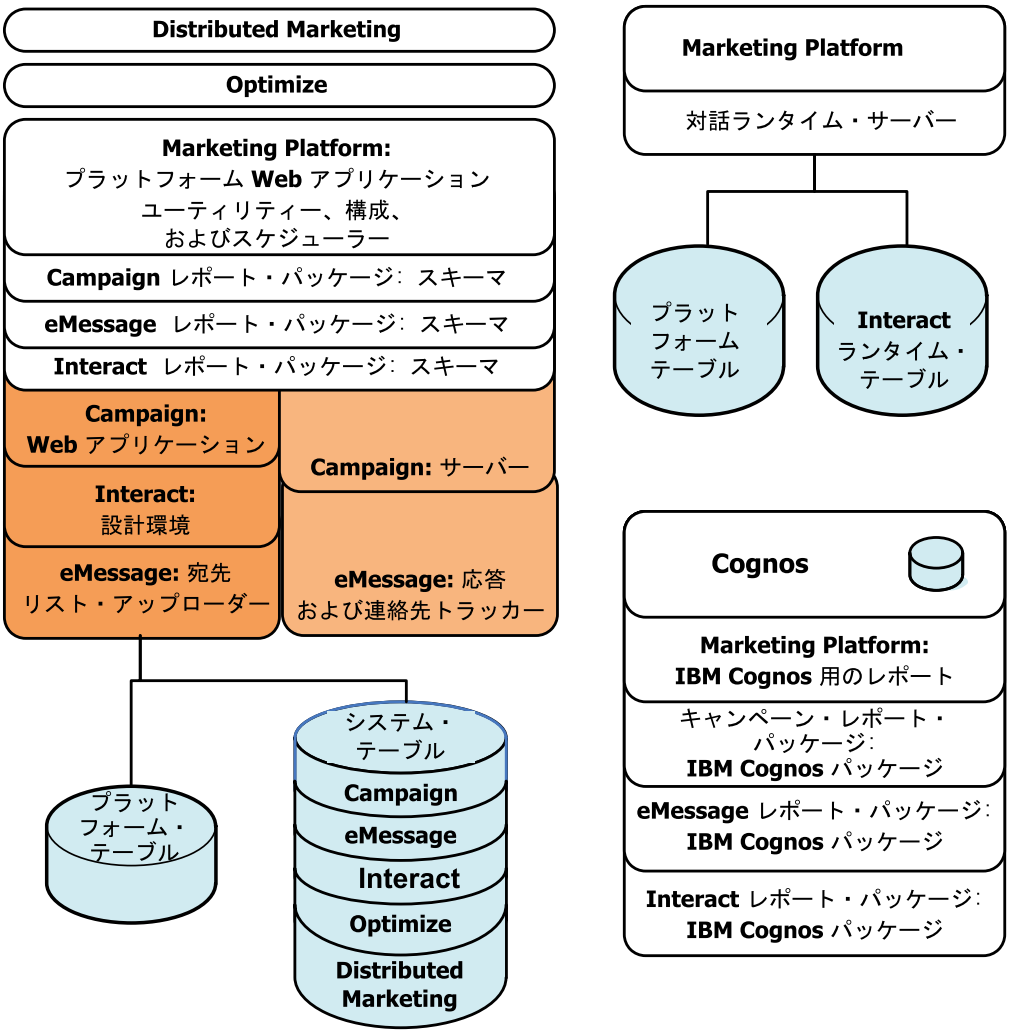
2. 59 ページの『第 8 章 レポートのインストール』

   いずれかの IBM Unica Enterprise 製品でレポート機能を使用する予定の場合、レポートに関する章を参照してください。

IBM Unica のコンポーネントとそれらのインストール場所

以下の図は、IBM Unica アプリケーションをインストールする場所について概要を示しています。

このセットアップは、正常に機能する基本インストールです。セキュリティー上およびパフォーマンス上の実際の要件を満たすために、より複雑で分散したインストールが必要になることがあります。



前提条件

IBM Unica Marketing 製品をインストールするための前提条件は、以下のとおりです。

システム要件

詳しいシステム要件については、*IBM Unica Marketing Enterprise 製品の推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件* のガイドを参照してください。

JVM の要件

スイート内の IBM Unica Marketing アプリケーションは、専用の Java 仮想マシン (JVM) 上にデプロイされる必要があります。 IBM Unica Marketing 製品は、Web アプリケーション・サーバーによって使われる JVM をカスタマイズします。 JVM 関連のエラーが発生する場合、IBM Unica Marketing 製品専用の Oracle WebLogic または WebSphere ドメインを作成する必要が生じることがあります。

ネットワーク・ドメインの要件

クロスサイト・スクリプティングのセキュリティー・リスクを制限するよう意図されたブラウザー制限事項に準拠するために、スイートとしてインストールされる IBM Unica Marketing 製品は、同じネットワーク・ドメイン上にインストールされる必要があります。

必要な知識

IBM Unica Marketing 製品をインストールするためには、製品のインストール先となる環境に関する詳細な知識を持っている必要があります (または、そのような知識を持つ担当者と共に作業する必要があります)。オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が必要です。

必要な権限

次のように、このガイドの手順を実行できるネットワーク権限があること、適切な権限を持つログインがあること、およびダウンロードした製品インストール・ファイルに適切な権限があることを確認します。

- Web アプリケーション・サーバー用の管理ログイン名とパスワードが必要です。
- 必要なすべてのデータベースに関する管理アクセス権限が必要です。
- 編集する必要のあるすべてのファイルに関する書き込み権限が必要です。
- ファイルを保存する必要のあるすべてのディレクトリー (例えばインストール・ディレクトリー、アップグレードの場合はバックアップ・ディレクトリー) に関する書き込み権限が必要です。
- Web アプリケーション・サーバーと IBM Unica Marketing コンポーネントの実行に使われるオペレーティング・システム・アカウントは、該当するディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取り/書き込みアクセス権限を持っている必要があります。
- インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限を持っている必要があります。

  UNIX の場合、IBM Unica 製品のインストールを実行するユーザー・アカウントは、そのデプロイ場所となる Web アプリケーション・サーバーをインストールしたユーザー・アカウントと同じグループのメンバーでなければなりません。Web アプリケーション・サーバーは製品のファイル・システムにアクセスする必要があるため、こうする必要があります。
- UNIX の場合、IBM Unica 製品のすべてのインストーラー・ファイルは完全な実行権限 (`rwxr-xr-x`) を持っている必要があります。

アップグレードまたはクラスターでインストールを行う場合

アップグレードを行う場合は、35 ページの『第 7 章 IBM Unica Marketing Platform のアップグレード』をお読みください。

Marketing Platform をクラスターにインストールする場合は、33 ページの『第 6 章 クラスターでの IBM Unica Marketing Platform のインストール』をお読みください。

第 2 章 IBM Unica Marketing Platform データ・ソースの準備

このセクションでは、Marketing Platform システム・テーブル用のデータベースと JDBC 接続をセットアップするのに必要な情報を示します。この後、インストール・プロセスで IBM Unica インストーラーを実行するときにこのデータベースについての詳細情報を入力する必要があるため、9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』を印刷して記入してください。

ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成

1. Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマを作成するには、データベース管理者と共に作業します。

   以下のベンダー固有のガイドラインに従ってください。

   - Marketing Platform システム・テーブルが Oracle にある場合、環境がオープンされる度に自動コミットが行われるように構成する必要があります。 Oracle 資料の説明を参照してください。
   - Marketing Platform システム・テーブルが DB2® に基づいている場合、データベース・ページ・サイズを少なくとも 16k に設定します (Unicode をサポートする必要がある場合は 32k)。 DB2 資料の説明を参照してください。
   - Marketing Platform システム・テーブルが SQL Server に基づいている場合、Marketing Platform は SQL Server 認証を必要とするため、SQL Server 認証だけを使用するか、または SQL Server と Windows の両方の認証を使用する必要があります。必要に応じて、データベース認証に SQL Server が含まれるようデータベース構成を変更してください。また、SQL Server で TCP/IP を必ず有効にしてください。

   マルチバイト文字 (中国語、韓国語、日本語など) を使用するロケールを使用可能にする予定の場合、それらをサポートするようデータベースが作成されていることを確認してください。

2. Marketing Platform システム・テーブルを作成してそれにデータを入れる目的で使用可能なアカウントを作成するよう、データベース管理者に依頼します。これらの操作はこの後、インストール・プロセスで行われますが、手動で行うことも、IBM Unica Marketing インストーラーによって自動的に実行することもできます。

   このアカウントは、少なくとも以下の権限を持っている必要があります。

   - CREATE TABLES
   - CREATE VIEWS (レポート用)
   - CREATE SEQUENCE (Oracle のみ)
   - CREATE INDICES
   - ALTER TABLE
   - INSERT

© IBM Corporation 1999, 2012

- UPDATE
- DELETE

3. データベース (またはスキーマ) およびデータベース・アカウントについての情報を入手し、 9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』を印刷して完成させます。この後、インストール・プロセスのステップでこの情報が必要になります。

ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する

Marketing Platform で必要な JDBC 接続用の正しい JAR ファイルを入手する必要があります。また、Marketing Platform のデプロイ場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、このファイルの場所を追加する必要があります。

1. 「*推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件*」資料の説明に従って、IBM Unica Marketing でサポートされる最新のベンダー提供タイプ 4 JDBC ドライバーを入手します。
   - Marketing Platform のデプロイ場所となるマシンにドライバーが存在しない場合は、それを入手して、Marketing Platform をデプロイする予定のマシン上で解凍します。スペースを含まないパスにドライバーを解凍してください。
   - データ・ソース・クライアントのインストール場所であるマシンからドライバーを入手する場合、IBM Unica でサポートされる最新バージョンであることを確認してください。

   サポートされるドライバーについては、*推奨されるソフトウェア環境と最小システム要件*を参照してください。
2. Marketing Platform のデプロイ場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーのクラスパスに、ファイル名を含むドライバーの絶対パスを次のように含めます。
   - サポートされるすべてのバージョンの WebLogic で、環境変数が構成されている *WebLogic_domain_directory*/bin ディレクトリー内の setDomainEnv スクリプトのクラスパスを設定します。正しいドライバーを Web アプリケーション・サーバーで確実に使用するためには、ドライバー項目を CLASSPATH 値リストの最初の項目 (既存のすべての値より前) にする必要があります。以下に例を示します。

     UNIX

     ```
     CLASSPATH="/home/oracle/product/10.2.0/jdbc/lib/ojdbc14.jar:
       ${PRE_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WEBLOGIC_CLASSPATH}
       ${CLASSPATHSEP}${POST_CLASSPATH}${CLASSPATHSEP}${WLP_POST_CLASSPATH}"
     export CLASSPATH
     ```

     Windows

     ```
     set CLASSPATH=c:¥oracle¥jdbc¥lib¥ojdbc14.jar;%PRE_CLASSPATH%;
     %WEBLOGIC_CLASSPATH%;%POST_CLASSPATH%;%WLP_POST_CLASSPATH%
     ```
   - サポートされるすべてのバージョンの WebSphere の場合、クラスパスは、次のステップで Marketing Platform の JDBC プロバイダーをセットアップするときに設定します。

3. Marketing Platform データベース情報チェックリストでこのデータベース・ドライバー・クラスパスを書き留めておきます。インストーラーの実行時にこれを入力する必要があります。
4. 変更内容を有効にするために、Web アプリケーション・サーバーを再始動します。

   始動時にコンソール・ログをモニターして、データベース・ドライバーのパスがクラスパスに含まれていることを確認してください。

ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成

Marketing Platform の Web アプリケーションは、JDBC 接続を使ってシステム・テーブル・データベースと通信できる必要があります。 Marketing Platformのデプロイ場所となる予定の Web アプリケーション・サーバーで、この JDBC 接続を作成する必要があります。

WebSphere では、このプロセスの際に、ご使用のデータベース・ドライバーのクラスパスを設定してください。

重要: JNDI 名として `UnicaPlatformDS` を使用する必要があります。これは必須であり、9 ページの『Marketing Platform データベース情報チェックリスト』に記載されています。

注: データベース・ログイン・ユーザーのデフォルト・スキーマとは異なるスキーマで Marketing Platform システム・テーブルが作成されている場合、システム・テーブルへのアクセスに使われる JDBC 接続で、その非デフォルト・スキーマ名を指定する必要があります。

JDBC 接続の情報

JDBC 接続を作成するとき、入力する必要のあるいくつかの値を判別するうえでこのセクションが役立ちます。データベースのデフォルト・ポート設定を使用しない場合、正しい値に変更してください。

この情報は、Web アプリケーション・サーバーで必要なすべての情報を正確に表しているわけではありません。このセクションで説明が明示されていない場合、デフォルト値を受け入れることができます。より広範囲のヘルプが必要な場合は、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

WebLogic

アプリケーション・サーバーが WebLogic である場合は、これらの値を使用します。

SQLServer

- ドライバー: Microsoft MS SQL Server Driver (タイプ 4) バージョン: 2008、2008R2
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver

- ドライバー URL: `jdbc:sqlserver://<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>;databaseName=<データベース名>`
- プロパティー: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: oracle.jdbc.OracleDriver
- ドライバー URL: `jdbc:oracle:thin:@<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>:<データベース・サービス名>`
- プロパティー: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

DB2

- ドライバー: その他
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: `jdbc:db2://<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>/<データベース名>`
- プロパティー: `user=<データベース・ユーザー名>` を追加

WebSphere

アプリケーション・サーバーが WebSphere である場合は、これらの値を使用します。

SQLServer

- ドライバー: 該当なし
- デフォルト・ポート: 1433
- ドライバー・クラス: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnectionPoolDataSource
- ドライバー URL: 該当なし

「**データベース・タイプ**」フィールドで「**ユーザー定義**」を選択します。

JDBC プロバイダーおよびデータ・ソースを作成した後、データ・ソースのカスタム・プロパティーに移動して、以下のようにプロパティーを追加/変更します。

- `serverName=<SQL サーバー名>`
- `portNumber =<SQL サーバー・ポート番号>`
- `databaseName=<データベース名>`
- `enable2Phase = false`

Oracle 11 および 11g

- ドライバー: Oracle JDBC Driver
- デフォルト・ポート: 1521
- ドライバー・クラス: oracle.jdbc.OracleDriver

- ドライバー URL: `jdbc:oracle:thin:@`*<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>:<データベース・サービス名>*

DB2

- ドライバー: DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー
- デフォルト・ポート: 50000
- ドライバー・クラス: com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- ドライバー URL: `jdbc:db2://`*<データベース・ホスト>:<データベース・ポート>/<データベース名>*

Marketing Platform データベース情報チェックリスト

タイプ	名前
データ・ソース・タイプ	
データ・ソース名	
データ・ソースのホスト名	
データ・ソースのポート	
データ・ソース・アカウント・ユーザー名	
データ・ソース・アカウント・パスワード	
JNDI 名	UnicaPlatformDS
JDBC ドライバー・クラス	
JDBC 接続 URL	
システム上の JDBC ドライバー・クラスパス	

第 3 章 IBM Unica Marketing Platform のインストール

IBM Unica から DVD を入手するか、ソフトウェアをダウンロードします。

重要: すべてのインストール・ファイルを同じディレクトリーに入れてください。これはインストールのための要件です。

Marketing Platform をインストールするには、以下のものが必要です。

- IBM Unica マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

UNIX タイプのシステムにおける権限の設定

UNIX タイプのシステムでは、インストール・ファイルに完全な実行権限 (`rwxr-xr-x`) があることを確認してください。

適切なインストーラー・ファイルを選ぶ

IBM Unica Marketing インストール・ファイルは、製品のバージョンおよび対象とするオペレーティング・システムに基づいて名前が付けられています。ただし、コンソール・モードで実行するための UNIX インストーラーは、オペレーティング・システム固有ではありません。 UNIX の場合は、インストール・モードが X Window システムかコンソールかによって、異なるインストーラーが使用されます。

実際のインストール環境に基づいてどのインストーラーを選ぶことができるか、以下に例を示します。

GUI モードまたはコンソール・モードのどちらかを使用して Windows にインストールする場合 — *Product_N.N.N.N*_win.exe は、バージョン N.N.N.N で、Windows オペレーティング・システムへのインストール用です。

Solaris で X-windows モードを使ってインストールする予定の場合 — *Product_N.N.N.N*_solaris.bin (バージョン N.N.N.N、Solaris オペレーティング・システムでのインストール用)。

コンソール・モードを使用して UNIX タイプのオペレーティング・システムにインストールする場合 — *Product_N.N.N.N*_.sh は、バージョン N.N.N.N で、サポートされるすべての UNIX タイプのオペレーティング・システムへのインストール用です。

IBM Unica Marketing インストーラーが機能する方法

IBM Unica Marketing インストーラーの基本機能を十分に理解していない場合は、このセクションをお読みください。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

インストーラー・ファイルに関する単一ディレクトリーの要件

IBM Unica エンタープライズ製品をインストールするときには、いくつかのインストーラーを組み合わせて使用します。

- マスター・インストーラー (ファイル名に `Unica_Installer` が含まれます)
- 製品固有のインストーラー (その製品の名前がすべてのファイル名に含まれます)

IBM Unica Marketing 製品をインストールするには、マスター・インストーラーとすべての製品インストーラーを同じディレクトリーに入れる必要があります。マスター・インストーラーを実行すると、ディレクトリー内にある製品インストール・ファイルが検出されます。その後、インストール対象となる製品を選択することができます。

1 つの製品インストーラーの複数バージョンがマスター・インストーラーと同じディレクトリーに存在する場合、マスター・インストーラーは常に製品の最新バージョンをインストール・ウィザードの「IBM Unica 製品」画面に表示します。

パッチのインストール

IBM Unica 製品の新規インストールを実行した直後にパッチをインストールするよう計画することもできます。その場合、基本バージョンおよびマスター・インストーラーが含まれるディレクトリーにパッチ・インストーラーを入れてください。インストーラーを実行するとき、基本バージョンとパッチの両方を選択できます。これにより、インストーラーは正しい順序で両方をインストールします。

JAVA_HOME 環境変数の確認

IBM Unica Marketing 製品をインストールするマシンで `JAVA_HOME` 環境変数が定義されている場合、それが Sun JRE バージョン 1.6 を指し示していることを確認してください。

この環境変数は IBM Unica Marketing 製品のインストールで必須ではありませんが、これが存在する場合は、Sun JRE バージョン 1.6 を指す必要があります。

`JAVA_HOME` 環境変数が存在し、間違った JRE を指し示している場合には、IBM Unica Marketing インストーラーを実行する前に `JAVA_HOME` 変数を設定解除する必要があります。これは、以下のように行えます。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、

  `set JAVA_HOME=` *と入力し、右辺を空のまま* `Return` *キーを押します。*
- UNIX タイプのシステム: 端末で、

  `export JAVA_HOME=` *と入力し、右辺を空のまま* `Return` *キーを押します。*

この環境変数が設定解除されると、IBM Unica Marketing インストーラーは、インストーラーと共にバンドルされた JRE を使用します。

インストールが完了した後に環境変数を再設定することができます。

製品のインストール・ディレクトリーの選択

ネットワーク・アクセス可能な任意のシステム上の任意のディレクトリーにインストールすることができます。インストール・ディレクトリーを指定するには、パスを入力するか、参照してその場所を選択することができます。

パスの前にピリオドを入力することにより、インストーラーを実行しているディレクトリーからの相対パスを指定できます。

指定したディレクトリーが存在しない場合は、インストーラーによってそれが作成されます。その際、インストールを実行しているユーザーに適切な権限があると想定されます。

IBM Unica インストール済み環境のデフォルトの最上位ディレクトリーは `IBM/Unica` という名前になります。製品インストーラーは、`Unica` ディレクトリーの下のサブディレクトリーにインストールします。

インストール・タイプ

IBM Unica Marketing インストーラーは、以下の種類のインストールを実行します。

- **新規インストール**: インストーラーの実行時に、IBM Unica Marketing 製品がまだ一度もインストールされていないディレクトリーを選択した場合、インストーラーは自動的に新規インストールを実行します。
- **アップグレード・インストール**: インストーラーの実行時に、*以前の* バージョンの IBM Unica Marketing 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは自動的にアップグレード・インストールを実行します。インストーラーによってデータベースが自動更新される製品の場合、アップグレード・インストールでは新しいテーブルが追加されますが、既存のテーブルのデータが上書きされることはありません。

  インストーラーによってデータベースが自動更新される製品の場合、データベース内にテーブルが既に存在するなら、インストーラーはそれを作成しないため、アップグレード中にエラーが発生することがあります。これらのエラーは、無視しても安全です。詳しくは、アップグレードに関する章を参照してください。
- **再インストール**: インストーラーの実行時に、*同じ* バージョンの IBM Unica Marketing 製品がインストールされているディレクトリーを選択した場合、インストーラーは既存のインストールを上書きします。既存の任意のデータを保持するには、再インストールする前に、インストール・ディレクトリーとシステム・テーブル・データベースをバックアップしておきます。

  通常、再インストールは推奨されません。

インストール・モード

IBM Unica Marketing インストーラーは、以下のモードで実行可能です。

- コンソール (コマンド・ライン) モード

  コンソール・モードでは、オプションは番号付きリストで表示されます。該当するオプションを選択するには、番号を指定します。番号を入力せずに Enter を押

した場合、インストーラーはデフォルト・オプションを使用します。デフォルト・オプションは、以下のいずれかの記号によって表されます。

--> この記号が表示されている場合にオプションを選択するには、対象のオプションの番号を入力してから Enter を押します。

[X] この記号は、リストにあるオプションの 1 つ、複数、またはすべてを選択できることを示しています。[X] 記号が隣にあるオプションの番号を入力して Enter を押すと、そのオプションがクリア、つまり選択解除されます。現在選択されていない (つまり [ ] が横に示されている) オプションの番号を入力して、Enter を押すと、そのオプションが選択されます。

複数のオプションを選択解除または選択するには、番号をコンマ区切りリストの形式で入力します。

- Windows GUI または UNIX X-windows モード
- ユーザー対話を必要としない不在モード (またはサイレント・モード)

複数回にわたって IBM Unica Marketing 製品をインストールする場合 (例えばクラスター環境をセットアップする場合) には、不在モードを使用できます。詳しくは、『不在モードを使用した複数回にわたるインストール』を参照してください。

不在モードを使用した複数回にわたるインストール

例えばクラスター環境をセットアップするときなど、複数回にわたって IBM Unica Marketing 製品をインストールする必要がある場合、ユーザー入力を必要としない不在モードで IBM Unica インストーラーを実行することができます。

応答ファイルについて

不在モード (サイレント・モードともいう) では、コンソールまたは GUI モードを使った場合にユーザーがインストール・プロンプトで入力する情報を提供するためのファイルまたはファイル・セットが必要です。これらのファイルを応答ファイルといいます。

以下のどちらのオプションを使用しても、応答ファイルを作成できます。

- サンプル応答ファイルをテンプレートとして使って、応答ファイルを直接作成できます。サンプル・ファイルは、`ResponseFiles` という名前の圧縮アーカイブに、製品インストーラーとともに組み込まれています。応答ファイルの名前は以下のとおりです。
  - IBM Unica インストーラー - `installer.properties`
  - 製品インストーラー - `installer_` の後ろに、製品名のイニシャル。例えば、Campaign インストーラーの応答ファイルは、`installer_uc.properties` という名前です。
  - 製品のレポート・パック・インストーラー - `installer_` の後ろに、製品名のイニシャルと `rp` の組み合わせ。例えば、Campaign のレポート・パック・インストーラーの応答ファイルは、`installer_urpc.properties` という名前です。

サンプル・ファイルを必要に応じて編集し、インストーラーと同じディレクトリーに配置します。

- 不在実行をセットアップする前に、Windows GUI モードまたは UNIX X Window システム・モード、あるいはコンソール・モードでインストーラーを実行して、応答ファイルを作成することを選択できます。

  IBM Unica マスター・インストーラーによって 1 つのファイルが作成され、さらに、インストール対象の IBM Unica 製品ごとに 1 つ以上のファイルが作成されます。

  応答ファイルの拡張子は `.properties` です。例えば、`installer_`*製品*`.properties`、また IBM Unica インストーラー自体のファイルの名前は `installer.properties` となります。インストーラーは、指定したディレクトリーの中にこれらのファイルを作成します。

  重要: セキュリティー上の理由で、インストーラーはデータベース・パスワードを応答ファイルに記録しません。不在モード用に応答ファイルを作成した場合、それぞれの応答ファイルを手動で編集してデータベース・パスワードを入力する必要があります。それぞれの応答ファイルを開いて PASSWORD を検索し、編集すべき場所を見つけます。

インストーラーが応答ファイルを検索する場所

不在モードで実行されるとき、インストーラーは次のようにして応答ファイルを探します。

- 最初に、インストーラーはインストール・ディレクトリーを検索します。
- 次に、インストーラーは、インストールを実行しているユーザーのホーム・ディレクトリーを検索します。

すべての応答ファイルは、同じディレクトリーの中に存在する必要があります。コマンド・ラインで引数を追加することにより、応答ファイルの読み取り場所となるパスを変更できます。以下に例を示します。

```
-DUNICA_REPLAY_READ_DIR="myDirPath" -f myDirPath/installer.properties
```

アンインストールする際の不在モードの影響

不在モードを使ってインストールされた製品をアンインストールする場合、不在モードでアンインストールが実行されます (ユーザー対話を求めるダイアログは提示されません)。

不在モードとアップグレード

アップグレードの際、応答ファイルが作成済みの場合に不在モードで実行すると、既に設定されたインストール・ディレクトリーがインストーラーによって使われます。応答ファイルが存在しない場合に不在モードを使ってアップグレードするためには、最初のインストールでインストーラーを手動で実行することによって応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで現在のインストール・ディレクトリーを必ず選択してください。

システム・テーブルの自動作成と手動作成

Marketing Platform インストーラーでは、データベース内にシステム・テーブルを自動的に作成するかどうかを選択できます。

インストーラーにシステム・テーブルを作成させることを選択した場合、以前のステップで作成した Marketing Platform データベースにインストーラーから接続できるようにするための情報を提供する必要があります。 Marketing Platform の場合、これは、(20 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』で説明されているように) 製品の登録用に IBM Unica マスター・インストーラーで提供する情報と同じです。

手動でシステム・テーブルを作成することを選択した場合、データベース・クライアントを使用して、Marketing Platform インストール済み環境に備わっている SQL スクリプトを実行する必要があります。手動でのテーブル作成について、詳しくは、 22 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』を参照してください。

クラスター・デプロイメント用の EAR ファイルの作成

IBM Unica はクラスター化をサポートしています。サポートされる Web アプリケーション・サーバーでは、1 つの管理コンソールからデプロイして、デプロイメントを管理することができます。これらの機能を利用するには、デプロイメント用の EAR ファイルを使う必要があります。

マスター・インストーラーは、インストール対象として指定された製品を含む 1 つ以上の EAR ファイルを作成することができます。その後、製品を含む 1 つ以上の EAR ファイルをデプロイします。

1 つのドメインに複数の EAR ファイルをデプロイする場合、それぞれの EAR ファイルの名前はそのドメイン内で固有でなければなりません。

最初のインストールの後、いつでも IBM インストーラーを使用して、インストール対象の製品の新しい EAR ファイルを作成することができます。 『インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成するには』を参照してください。

特定の製品について、以下の詳細情報に注意してください。

- eMessage、Optimize、および Interact 設計時間 (Design Time) には Web アプリケーション・サーバーにデプロイされる WAR ファイルが含まれないため、EAR ファイルにこれらを含めることはできません。 Interact ランタイムには WAR ファイルがあるため、EAR ファイルにこれを含めることができます。

インストーラーの実行後に EAR ファイルを作成するには

IBM Unica Marketing 製品をインストールした後で EAR ファイルを作成するには、以下の手順に従ってください。異なる組み合わせの製品を EAR ファイルに含める必要が生じた場合には、このようにすることができます。

WAR ファイルをすべて 1 つのディレクトリーに入れる必要があります。コマンド・ラインから、コンソール・モードでインストーラーを実行します。

1. 初めてコンソール・モードでインストーラーを実行している場合には、インストール対象の製品ごとに、インストーラーの `.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成してください。

各々の IBM Unica 製品インストーラーは、拡張子が .properties の応答ファイルを 1 つ以上作成します。これらのファイルは、インストーラーが入っているのと同じディレクトリーに配置されます。 installer_*製品*.properties ファイルと、installer.properties という IBM Unica インストーラー自体のファイルを含め、拡張子が .properties のファイルをすべて確実にバックアップしてください。

不在モードでインストーラーを実行する予定の場合は、元の .properties ファイルをバックアップしてください。不在モードによるインストーラー実行時にこれらのファイルの内容が消去されるためです。 EAR ファイルを作成するには、初期インストール時にインストーラーによって .properties ファイルに書き込まれる情報が必要です。

2. コマンド・ウィンドウを開いて、インストーラーが入っているディレクトリーに移動します。
3. 以下のオプションを使ってインストーラーの実行可能ファイルを実行します。

   ```
   -DUNICA_GOTO_CREATEEARFILE=TRUE
   ```

   UNIX タイプのシステムでは、.sh ファイルの代わりに .bin ファイルを実行してください。

   インストーラー・ウィザードが実行されます。
4. ウィザードの指示に従います。
5. 追加の EAR ファイルを作成する前に、コンソール・モードでの初めての実行前に作成したバックアップを使って (1 つ以上の) .properties ファイルを上書きします。

IBM サイト ID

IBM サイト ID を入力するようインストーラーによって求められる場合があります。お客様の IBM サイト ID は、IBM ウェルカム・レター、技術サポート・ウェルカム・レター、ライセンス証書レター、またはソフトウェア購入時にお届けするその他の通知に記載されています。

お客様による製品の使用状況をより良く把握し、カスタマー・サポートを改善する目的で、IBM はソフトウェアによって提供されるデータを使用することがあります。収集されるデータには、個人を特定する情報はまったく含まれません。

このような情報が収集されることをご希望されない場合は、Marketing Platform のインストール後に、管理特権を持つユーザーとして Marketing Platform にログオンします。「**設定**」>「**構成**」ページにナビゲートし、「**プラットフォーム**」カテゴリーの下の「**ページのタグ付けを無効にする**」プロパティーを **True** に設定してください。

IBM Unica Marketing インストーラーの終了コード

このセクションでは、IBM Unica Marketing インストーラーによって生成される標準的な終了コードについて説明します。

コードのリストでは最初に Windows のコードが示された後、Linux での同等のコードが括弧で示されます。

0 または 1 以外の値が示されている場合、以下のいずれかの理由でインストールが失敗したことを意味します。

コード	説明
0 (0)	成功: インストールは警告やエラーなく、正常に終了しました。
1 (1)	インストールは正常に終了しましたが、インストール・シーケンスの 1 つ以上のアクションにより、警告、または致命的ではないエラーが発生しました。
-1 (255)	ユーザーによってキャンセルされました。
1000 (232)	インストールに、無効なコマンド・ライン・オプションが含まれています。
1001 (233)	インストール・シーケンスの 1 つ以上のアクションにより、リカバリー不能エラーが発生しました。
2000 (208)	未処理エラー
2001 (209)	インストールの許可検査が失敗しました。期限切れのバージョンを示している可能性があります。
2002 (210)	インストールのルール検査が失敗しました。インストーラー自身に設定されているルールが失敗しました。
2003 (211)	サイレント・モードでの未解決の依存関係により、インストーラーが終了しました。
2004 (212)	インストール操作の実行中に十分なディスク・スペースが検出されなかったため、インストールが失敗しました。
2005 (213)	Windows 64 ビット・システムでのインストールの試行中にインストールが失敗しましたが、インストールには Windows 64 ビット・システムのサポートが含まれていませんでした。
2006 (214)	このインストーラーでサポートされない UI モードで起動されたため、インストールが失敗しました。
3000 (184)	ランチャー固有の未処理エラー。
3001 (185)	lax.main.class プロパティー固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3002 (186)	lax.main.method プロパティー固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3003 (187)	インストールでは、lax.main.method プロパティーで指定されたメソッドにアクセスできませんでした。
3004 (188)	lax.main.method プロパティーによって生じた例外エラーが原因で、インストールが失敗しました。
3005 (189)	lax.application.name プロパティーに値が割り当てられていなかったため、インストールが失敗しました。
3006 (190)	インストールでは、lax.nl.java.launcher.main.class プロパティーに割り当てられている値にアクセスできませんでした。
3007 (191)	lax.nl.java.launcher.main.class プロパティー固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。
3008 (192)	lax.nl.java.launcher.main.method プロパティー固有のエラーが原因で、インストールが失敗しました。

コード	説明
3009 (193)	インストールでは、lax.nl.launcher.java.main.method プロパティーで指定されたメソッドにアクセスできませんでした。
4000 (160)	Java 実行可能ファイルを、java.home システム・プロパティーで指定されたディレクトリーで検出できませんでした。
4001 (161)	インストーラー jar のパスが間違っているため、リランチャーが正しく起動されませんでした。
5000 (136)	インスタンスが正しくアンインストールされなかったため、またはレジストリーが破損していたため、既存のインスタンスの変更が失敗しました。

Marketing Platform コンポーネントをインストールする場所

Marketing Platform アプリケーションには、IBM Unica 共通ナビゲーション、レポート、ユーザー管理、セキュリティー、スケジューリング、および構成管理の各機能が含まれています。以下のガイドラインに従ってください。

- それぞれの IBM Unica Marketing 環境で、Marketing Platform を一度インストールしてデプロイする必要があります。
- 追加のマシン上で Marketing Platform ユーティリティーを使用するには、ユーティリティーと Web アプリケーションの両方をインストールする必要があります。ユーティリティーは Web アプリケーション内の jar ファイルを使用するため、このようにする必要があります。ただし、この目的で Marketing Platform をインストールするとき、Marketing Platform を再びデプロイする必要はなく、追加の Marketing Platform システム・テーブルを作成する必要もありません。

以下の表は、Marketing Platform のインストール時に選択できるコンポーネントについて説明しています。

コンポーネント	説明
Marketing Platform ユーティリティー	これらのコマンド・ライン・ツールを使用すると、コマンド・ラインから Marketing Platform システム・テーブル・データベースを操作して、構成のインポート/エクスポート、パーティションとデータ・フィルターの作成、platform_admin ユーザーの復元を行うことができます。Marketing Platform ユーティリティーを使用可能にするすべてのマシン上にこれをインストールしてください。
Marketing Platform Web アプリケーション	この Web アプリケーションは、IBM Unica Marketing 用の一般的なユーザー・インターフェース、セキュリティー、および構成管理を提供します。 Marketing Platform のデプロイ場所となる予定のマシンにこれをインストールしてください。また、Marketing Platform ユーティリティーを使用可能にする追加のマシンを構成する場合にも、(Web アプリケーションに含まれる JAR ファイルがユーティリティーによって使用されるため) Web アプリケーションをインストールする必要があります。このような追加のマシン上にはデプロイしないでください。
Reports for IBM Cognos® BI	IBM Cognos 用のレポート統合コンポーネントです。 Cognos システム上にのみ、このコンポーネントをインストールしてください。

ステップ: 必要な情報の入手

インストーラーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースおよび Web アプリケーション・サーバーについての情報をいくつか入力するよう求めます。インストールを始める前に、この情報を収集してください。

Marketing Platform データベースの接続情報の収集

すべての製品のインストール・ウィザードでは、メニュー項目、セキュリティー情報、および構成プロパティーを登録するために Marketing Platform システム・テーブル・データベースと通信する必要があります。新しい場所でインストーラーを実行するたびに、Marketing Platform システム・テーブル・データベースに関する以下のデータベース接続情報を入力する必要があります。

- データベース・タイプ。
- データベース・ホスト名。
- データベース・ポート。
- データベースの名前またはスキーマ ID。
- データベース・アカウントのユーザー名とパスワード。

データベースまたはスキーマを作成して Marketing Platform データベース情報チェックリストに記入したときに、これらの情報を入手しています。

インストールを実行するとき、マスター・インストーラーはこの接続情報をテストして検証します。

Web アプリケーション・サーバーでのデプロイメントについての情報を入手する

予定されている Marketing Platform デプロイメントについて、以下の情報を入手してください。

- プロトコル: HTTP または HTTPS (Web アプリケーション・サーバーで SSL が実装されている場合)。
- ホスト: Marketing Platform のデプロイ先となるマシンの名前。
- ポート: Web アプリケーション・サーバーが listen するポート。
- ドメイン・ネーム: IBM 製品がインストールされる各マシンの会社のドメイン。例えば `mycompany.com`。すべての IBM 製品は同じ会社のドメインにインストールされる必要があり、ドメイン・ネームをすべて小文字で入力する必要があります。

  ドメイン・ネーム項目で不一致がある場合、Marketing Operations の機能を使用したり、製品間でナビゲートしたりするときに問題が生じる可能性があります。製品のデプロイ後にドメイン・ネームを変更できます。そうするには、ログインして、「**設定**」>「**構成**」ページの製品ナビゲーション・カテゴリーで該当する構成プロパティーの値を変更します。

Marketing Platform ユーティリティーを有効化するために必要な情報の入手

Marketing Platform ユーティリティーの使用を予定している場合、Marketing Platform のインストールを始める前に、以下の JDBC 接続情報を入手してください。

- JRE のパス。デフォルト値は、インストーラーによって IBM Unica インストール・ディレクトリーの下に配置される JRE バージョン 1.6 のパスです。

  このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。別のパスを指定する場合は Sun JRE バージョン 1.6 を指す必要があります。
- JDBC ドライバー・クラス。これは、インストーラーで指定したデータベース・タイプに基づき、インストーラーによって自動的に提供されます。
- JDBC 接続 URL。基本的な構文がインストーラーによって提供されますが、ホスト名、データベース名、ポートを入力する必要があります。
- システム上の JDBC ドライバー・クラスパス。

上記リストの最後の 3 項目については、データベースまたはスキーマを作成して Marketing Platform データベース情報チェックリストに記入したときに、これらの情報を入手しています。

ステップ: IBM Unica インストーラーの実行

IBM Unica マスター・インストーラーを実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認してください。

- インストールする予定のソフトウェア製品を入手して、すべてのインストーラーを同じディレクトリーの中に入れます。
- 20 ページの『ステップ: 必要な情報の入手』で説明されている情報を収集して準備します。

インストール中にインストーラーによって Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる操作が企業のポリシーで許可されない場合は、22 ページの『ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる』を参照してください。

注: WebLogic 9.2 上に Marketing Platform をデプロイする予定の場合、EAR ファイルに Marketing Platform を含めないでください。詳しくは、WebLogic のガイドライン（25 ページの『WebLogic 上に Marketing Platform をデプロイする際のガイドライン』）を参照してください。

インストーラーについての詳細情報や、ウィザードで情報を入力するときのヘルプが必要な場合は、この章の他のトピックを参照してください。

ここで説明されているように IBM Unica マスター・インストーラーを実行して、ウィザードの指示に従います。

- **GUI または X-windows モード**

  `Unica_Installer` ファイルを実行します。 UNIX タイプのシステムでは、`.bin` ファイルを使用してください。

- **Windows のコンソール・モード**

  コマンド・プロンプトを開き、IBM Unica ソフトウェアが入っているディレクトリーから `Unica_Installer` 実行可能ファイルを実行します。その際、`-i console` を指定します。例えば、

  `Unica_Installer_N.N.N.N_OS` `-i console`

- **UNIX タイプのシステムでのコンソール・モード**

  スイッチなしで `Unica_installer.sh` ファイルを実行します。

  Solaris システムの場合のみ、bash シェルからインストーラーを実行する必要があります。

- **不在モード**

  コマンド・プロンプトを開き、IBM Unica ソフトウェアが入っているディレクトリーから `Unica_Installer` 実行可能ファイルを実行します。その際、`-i silent` を指定します。 UNIX タイプのシステムでは、`.bin` ファイルを使用してください。

  例えば、インストーラーと同じディレクトリーに配置された応答ファイルを指定するには、次のようにします。

  `Unica_Installer_N.N.N.N_OS` `-i silent`

  別のディレクトリーにある応答ファイルを指定するには、`-f` *`filepath/filename`* を使用します。絶対パスを使用してください。以下に例を示します。

  `Unica_Installer_N.N.N.N_OS` `-i silent -f` *`filepath/filename`*

  不在モードの詳細情報については、 14 ページの『不在モードを使用した複数回にわたるインストール』を参照してください。

インストールの要約を示すウィンドウを注意深く確認します。エラーが報告されている場合は、インストーラーのログ・ファイルを検査し、必要に応じて IBM Unica 技術サポートに連絡してください。

ステップ: 必要に応じて手動で Marketing Platform システム・テーブルを作成してデータを入れる

インストール中に IBM インストーラーは Marketing Platform システム・テーブルを作成できますが、企業のポリシーでこれが許可されない場合は、手動でテーブルを作成してそれにデータを入れる必要があります。

1. 21 ページの『ステップ: IBM Unica インストーラーの実行』の説明と同じようにして IBM Unica インストーラーを実行します。ただし Marketing Platform インストーラーが起動されるときに以下のように選択する点が異なります。
   - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
   - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
2. インストーラーが完了した後、 126 ページの『システム・テーブルの作成』の説明に従い、データベース・タイプに対応する以下の SQL スクリプトを

Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対して実行することで、手動でシステム・テーブルを作成します。

ここに示す順序でスクリプトを実行してください。

- `ManagerSchema_DBType.sql`

  マルチバイト文字 (例えば中国語、日本語、韓国語) のサポートを計画している場合、データベースが DB2 であれば `ManagerSchema_DB2_unicode.sql` スクリプトを使用します。

- `ManagerSchema__DBType_CeateFKConstraints.sql`
- `active_portlets.sql`
- `quartz__DBType.sql`

3. IBM Unica インストーラーを再び実行し、Marketing Platform インストーラーが起動されたときに以下を選択します。
   - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
   - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択します。

     これにより、システム・テーブルにデフォルト・データが追加されます。

第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ

Marketing Platform を Web アプリケーション・サーバーにデプロイするときには、このセクションで説明されているガイドラインに従う必要があります。

IBM インストーラーを実行したとき、Marketing Platform を EAR ファイルに含めたか、Marketing Platform の WAR ファイル (`unica.war`) のデプロイを選択した可能性があります。他の製品を EAR ファイルの中に含めた場合、EAR ファイルに含まれる個々の製品のインストール・ガイドで詳しく説明されるデプロイメント・ガイドラインにすべて従う必要があります。

ここでは、読者が Web アプリケーション・サーバーの操作方法を知っていることを想定します。管理コンソールのナビゲーションなど、詳細については、Web アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

WebLogic 上に Marketing Platform をデプロイする際のガイドライン

Marketing Platform を WebLogic 上にデプロイする場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

すべてのバージョンの WebLogic

サポートされるいずれかのバージョンの WebLogic に Marketing Platform 製品をデプロイする場合は、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. IBM Unica Marketing 製品は、WebLogic によって使われる JVM をカスタマイズします。 JVM 関連のエラーが発生する場合、IBM Unica Marketing 製品専用の WebLogic インスタンスを作成する必要が生じることがあります。
2. 始動スクリプト (`startWebLogic.cmd`) で `JAVA_VENDOR` 変数を調べることにより、ご使用の WebLogic ドメインに関して選択された SDK が Sun SDK であることを確認します。これが `JAVA_VENDOR=Sun` に設定されている必要があります。 `JAVA_VENDOR=BEA` に設定されている場合は、JRockit が選択されています。JRockit はサポートされません。選択した SDK に変更する方法については、BEA WebLogic の資料を参照してください。
3. Web アプリケーションとして Marketing Platform をデプロイします。
4. **JVM バージョン 1.6 以降を使用するよう WebLogic インスタンスが構成されている場合のみ**、タイム・ゾーン・データベースの問題を回避するために、以下を行います。
   - WebLogic を停止します。
   - 以下の Oracle Web サイトからタイム・ゾーン・アップデーター・ツールをダウンロードします。

     http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/tzupdater-readme-136440.html
   - タイム・ゾーン・アップデーター・ツールで示される手順に従って、JVM 内のタイム・ゾーン・データを更新します。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

5. IIS プラグインを使用するよう WebLogic を構成する場合は、BEA WebLogic の資料を確認してください。

追加のガイドライン (WebLogic 10 および 11 G の場合のみ)

Marketing Platform を WebLogic 10 または 11 G 上にデプロイする場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. **インストール済み環境で非 ASCII 文字をサポートする必要がある場合のみ** (例えばポルトガル語や、マルチバイト文字を必要とするロケール)、WebLogic ドメイン・ディレクトリーの下の `bin` ディレクトリーにある `setDomainEnv` スクリプトを、次のように編集します。
   - 以下を `JAVA_OPTIONS` に追加します。

     ```
     -Dfile.encoding=UTF-8
     ```
2. WebLogic コンソールで、ホーム・ページの「**ドメイン**」リンクをクリックして、Web アプリケーション・タブの「**実際のパスのアーカイブを有効にする (Archived Real Path Enabled)**」ボックスをチェックします。
3. WebLogic を再始動します。
4. EAR ファイルまたは WAR ファイル (`unica.war`) をデプロイして開始します。

すべてのバージョンの WebSphere に Marketing Platform を配置する際のガイドライン

Marketing Platform を IBM WebSphere 上に配置する場合、このセクションのガイドラインに従ってください。

1. WebSphere のバージョンが、*IBM Unica Enterprise の推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件* の資料に説明されている要件 (必要なフィックスパックやアップグレードを含む) を満たしていることを確認してください。
2. 次のようにして、サーバーでカスタム・プロパティーを設定します。
   - 名前: `com.ibm.ws.webcontainer.invokefilterscompatibility`
   - 値: `true`

   WebSphere でのカスタム・プロパティーの設定については、http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21284395 の説明を参照してください。
3. IBM Unica EAR ファイルまたは `unica.war` ファイルを、エンタープライズ・アプリケーションとして配置します。

   下記のガイドラインに従います。以下で特に明記されていない限り、デフォルト設定を受け入れることができます。

   次のように、JSP コンパイラーの JDK ソース・レベルが Java 15 に設定され、JSP ページがプリコンパイルされることを確認します。
   - WAR ファイルをブラウズして選択する形式で、「**すべてのインストール・オプションとパラメーターを表示**」を選択すると、「**インストール・オプションの選択**」ウィザードが実行されます。

- 「**インストール・オプションの選択**」ウィザードのステップ 1 で、「**JavaServer Pages ファイルのプリコンパイル**」を選択します。
- 「**インストール・オプションの選択**」ウィザードのステップ 3 で、「**JDK ソース・レベル**」が 15 に設定されていることを確認します。

以下のコンテキスト・ルートにする必要があります。

- WAR ファイルを配置する場合は、`/unica` (すべて小文字) という名前にします。
- EAR ファイルを配置する場合は、`/unica` (すべて小文字) という名前にします。

4. サーバーの「**Web コンテナー設定**」>「**Web コンテナー**」>「**セッション管理**」セクションで、Cookie を有効にします。
5. 配置するアプリケーションごとに異なるセッション Cookie 名を指定します。その際、次の手順のうち、実行している配置に該当する手順を使用してください。
   - **別個の WAR ファイルを配置した場合**は、WebSphere コンソールで、サーバーの「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」> **[配置するアプリケーション]** >「**セッション管理**」>「**Cookie を使用可能にする**」>「**Cookie 名**」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
   - 「**セッション管理のオーバーライド**」チェック・ボックスを選択します。
   - **EAR ファイルを配置した場合**は、WebSphere コンソールで、サーバーの「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」> **[配置するアプリケーション]** >「**モジュール管理 (Module Management)**」> **[配置するモジュール]** >「**セッション管理**」>「**Cookies を使用可能にする**」>「**Cookie 名**」セクションで、固有のセッション Cookie 名を指定します。
   - 「**セッション管理のオーバーライド**」チェック・ボックスを選択します。
6. **インストール済み環境で非 ASCII 文字をサポートする必要がある場合のみ** (例えばポルトガル語や、マルチバイト文字を必要とするロケール)、サーバー・レベルで以下の項目を 「**汎用 JVM 引数**」 に追加します。

   ```
   -Dfile.encoding=UTF-8

   -Dclient.encoding.override=UTF-8
   ```

   ナビゲーションのヒント: 「**サーバー**」>「**アプリケーション・サーバー**」>「**Java およびプロセス管理**」>「**プロセス定義**」>「**Java 仮想マシン**」>「**汎用 JVM 引数**」を選択します。詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。
7. サーバーの「**アプリケーション**」>「**エンタープライズ・アプリケーション**」セクションで、配置した EAR ファイルまたは WAR ファイルを選択し、「**クラス・ロードおよび更新の検出**」を選択して、以下の一般プロパティーを設定します。
   - WAR ファイルを配置する場合:
     - 「**クラス・ローダーの順序**」では、「**最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)**」を選択します。

– 「**WAR クラス・ローダー・ポリシー**」では、「**アプリケーションの単一クラス・ローダー**」を選択します。

- EAR ファイルを配置する場合:
  – 「**クラス・ローダーの順序**」では、「**最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)**」を選択します。
  – 「**WAR クラス・ローダー・ポリシー**」では、「**アプリケーションの各 War ファイルのクラス・ローダー**」を選択します。

8. 配置を開始します。
9. **JVM バージョン 1.6 以降を使用するよう WebSphere インスタンスが構成されている場合のみ**、タイム・ゾーン・データベースの問題を回避するために、以下を行います。
   - WebSphere を停止します。
   - IBM Time Zone Update Utility for Java (JTZU) を、以下のIBM Web サイトからダウンロードします。

     http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/dst/index.html
   - IBM (JTZU) で示される手順に従って、JVM 内のタイム・ゾーン・データを更新します。
10. WebSphere を再始動します。

ステップ: Marketing Platform のインストールの検証

1. Internet Explorer を使って IBM Unica Marketing の URL にアクセスします。

   インストール時にドメインを入力した場合、URL は次のとおりです。ここで *host* は、Marketing Platform がインストールされているマシン、*domain.com* はホスト・マシンがあるドメイン、*port* は Web アプリケーション・サーバーが listen するポート番号です。

   `http://host.domain.com:port/unica`
2. デフォルトの管理者ログイン `asm_admin`、およびパスワード `password` を使ってログインします。

   パスワードを変更するよう求められます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティーのために新しいパスワードを選択してください。

   デフォルトのホーム・ページはダッシュボードですが、後でこれを構成します。構成されるまでは、「ページが見つからない」というメッセージがダッシュボード・ページに表示されることがあります。
3. 「**設定**」メニューの下で「ユーザー」、「ユーザー・グループ」、「ユーザー権限」の各ページを調べて、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」で説明されている構成済みユーザー、グループ、役割、および権限が存在することを確認します。
4. 新しいユーザーとグループを追加して、そのデータが Marketing Platform システム・テーブル・データベースに入力されたことを確認します。
5. 「**設定**」メニューの下で「構成」ページを調べて、Marketing Platform の構成プロパティーが存在することを確認します。

さらに、追加の構成タスクがあります。ダッシュボードの構成、IBM Unica アプリケーションへのユーザー・アクセスのセットアップ、LDAP または Web アクセス制御システムとの統合 (オプション) などです。「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」の説明を参照してください。

第 5 章 デプロイメント後の IBM Unica Marketing Platform の構成

Marketing Platform の基本インストールでは、以下の条件が当てはまる場合にのみ、追加の構成を実行する必要があります。

- IBM Unica Marketing のレポート機能を使用する場合 (59 ページの『第 8 章 レポートのインストール』を参照)
- 特定のパスワード・ポリシーを考慮している場合 (デフォルト・パスワード設定を変更する必要があるかどうか判別するには、『デフォルト・パスワード設定を変更するには』を参照してください)。

オプションで、構成ページにある追加的な Marketing Platform プロパティーを使用すると、重要な機能を調整することができます。これらの機能について、および設定方法については、プロパティーのコンテキスト・ヘルプまたは「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト・パスワード設定を変更するには

IBM Unica Marketing の構成ページ (「Unica」>「全般」>「パスワード設定」カテゴリー) でパスワード・ポリシーを設定します。

これらのパスワード・オプションは、(IBM Unica Marketing の中で作成された) 内部ユーザーのパスワードにのみ適用されます。外部システム (例えば Windows Active Directory、サポートされる LDAP ディレクトリー・サーバー、または Web アクセス制御サーバー) との同期を介してインポートされたユーザーには適用されません。例外はログイン失敗時に許容される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed) プロパティーで、このプロパティーは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に影響を及ぼします。またこのプロパティーは、外部システムの同様の制約事項を無効にするわけではありません。

デフォルトの設定は次のとおりです。

- 許可されるログイン再試行の最大回数 - 3
- パスワード履歴の数 - 0
- 有効期間（日数）- 30
- 空白のパスワードを許可 - True
- ユーザー名と同じパスワードを許可 - True
- 最小限必要な数字の数 - 0
- 最小限必要な英字の数 - 0
- 最小限必要なパスワードの長さ - 4

これらのプロパティーの説明については、オンライン・ヘルプを参照してください。

© IBM Corporation 1999, 2012

第 6 章 クラスターでの IBM Unica Marketing Platform のインストール

WebLogic 10 またはいずれかのバージョンの WebSphere 上にデプロイするとき、クラスター環境に Marketing Platform をインストールするには、以下の手順に従います。

IBM Unica Marketing スケジューラーはクラスター化をサポートしていません。したがって、以下のいずれかの製品で IBM Unica Marketing スケジューラーを使用する場合、その製品と共に Marketing Platform のクラスター化されたインストール済み環境は使用しないでください。

- Campaign (フローチャートの実行のために IBM Unica Marketing スケジューラーを使用する場合)。
- Interaction History。これは、データ・ロードとレポート生成のセットアップのために IBM Unica Marketing スケジューラーを使用します。

Leads はスケジューラーを使用しないため、Leads のみが含まれる環境では、クラスター化が完全にサポートされます。

注: アップグレードの場合は、35 ページの『第 7 章 IBM Unica Marketing Platform のアップグレード』を参照してください

1. Marketing Platform の 1 つのインスタンスをインストールします。
2. インストール済み環境が機能することを検査します。
3. Web アプリケーション・サーバーの自動デプロイメント機能を使用して、EAR ファイルをクラスターにデプロイします。

   Marketing Platform のデプロイ場所となるクラスター内のすべてのマシンは、Marketing Platform システム・テーブルを格納するデータベースにネットワーク・アクセスできる必要があります。

© IBM Corporation 1999, 2012

第 7 章 IBM Unica Marketing Platform のアップグレード

Marketing Platform をアップグレードする前に必ず 『全 IBM Unica Marketing 製品に関するアップグレード前提条件』と 37 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』をお読みになり、理解を深めてください。

注: IBM Unica の 8.0.0 リリースでは Enterprise 製品の名前が変更されていますが、「構成」ページの一部の構成カテゴリーおよびプロパティーは、継続性を提供するために、アップグレード後も 7.5.x の名前のままになっています。新規インストールのプロパティーおよびカテゴリーは、更新された名前で表示されます。

全 IBM Unica Marketing 製品に関するアップグレード前提条件

IBM Unica Marketing 製品をアップグレードするには、『インストールの準備』の章の 3 ページの『前提条件』の下にリストされている前提条件をすべて満たしている必要があります。

それに加えて、このセクションでリストされる前提要件も満たしている必要があります。

以前のインストールによって生成された応答ファイルの削除

インストーラーを実行して 8.6.0 より前のバージョンからアップグレードする場合、以前のインストールによって生成された応答ファイルをすべて削除する必要があります。

インストーラーの動作と応答ファイルの形式に変更が加えられたため、古い応答ファイルには 8.6.0 以降のインストーラーとの互換性がありません。

古い応答ファイルを削除しないと、インストーラーを実行するときにインストーラー項目に正しくないデータが事前に入力されていたり、一部のファイルがインストーラーによってインストールされなかったり、構成ステップがスキップされたりする可能性があります。

応答ファイルの名前は `installer_product.properties` です。ただし IBM Unica インストーラー自体のファイルは例外で、`installer.properties` という名前です。インストーラーはこれらのファイルを、インストーラーがあるディレクトリーに作成します。

ユーザー・アカウント要件 (UNIX のみ)

UNIX の場合、製品をインストールしたユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでアップグレードを実行する必要があります。

32 ビットから 64 ビットへのバージョンアップ

32 ビットから 64 ビットに IBM Unica Marketing 製品をバージョンアップする場合、以下の条件が満たされていることを確認してください。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

- 製品データ・ソースのデータベース・クライアント・ライブラリーも 64 ビットである
- すべての関連ライブラリー・パス (例えば、開始スクリプトまたは環境スクリプト) がデータベース・ドライバーの 64 ビット・バージョンを正しく参照する

知識要件

この説明は、アップグレード実行担当者が以下を理解していることを前提としています。

- IBM Unica インストーラーの基本機能 (11 ページの『IBM Unica Marketing インストーラーが機能する方法』で説明されている)
- IBM Unica Marketing 製品の一般的な機能とコンポーネント (ファイル・システムの構造を含む)
- ソース製品バージョンおよび新規バージョンのインストールおよび構成プロセス
- ソース・システムおよびターゲット・システムの構成プロパティーの保守
- レポートのインストールおよび構成プロセス (そのレポートを使用する場合)

Oracle または DB2 のみ: 自動コミット要件

Marketing Platform システム・テーブルが Oracle または DB2 にある場合、環境がオープンされる度に自動コミットが行われるように構成する必要があります。Oracle または DB2 の資料の説明を参照してください。

タイム・ゾーン・サポートに関するスケジュールのアップグレード

バージョン 8.5.0 では、Marketing Platform スケジューラーで、タスクに対して世界中の多数のタイム・ゾーンをどれでも選択できます。タスクを 8.5.0 より前のバージョンの Marketing Platform でスケジュールした場合、デフォルトのタイム・ゾーンに設定されます。これは、Marketing Platform がインストールされているサーバーのタイム・ゾーンです。

スケジューラーでタイム・ゾーン・サポートを利用するには、必要に応じてスケジュール済みのタスクを編集し、新規タイム・ゾーンを選択する必要があります。スケジューラーの使用について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

IBM Unica フレーム・セットを再ブランド化した場合

「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」の説明に従って IBM Unica フレーム・セットを再ブランド化した場合、アップグレードを開始する前に、変更したファイルをバックアップし、アップグレード・インストール完了後かつ新規バージョン配置前にリストアする必要があります。

通常、これらのファイルは、`corporatetheme.css` ファイルおよびブランド・イメージです。このファイルおよびイメージは、`css¥theme` ディレクトリーの下の `unica.war` ファイル内にあります。

したがって、以下を行う必要があります。

1. アップグレード手順を開始する前に unica.war ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. unica.war ファイルを解凍し、corporatetheme.css ファイルおよびブランド・イメージのコピーを取り分けます。
3. 本章の説明に従ってアップグレードを開始します。ただし、配置は行いません。
4. 新規 unica.war ファイルを解凍し、既存のイメージおよび corporatetheme.css ファイルをバックアップされているバージョンで上書きします。
5. 新規 unica.war ファイルを再び war で圧縮し、配置します。

再ブランド化の追加の詳細については、「*IBM Unica Marketing Platform管理者ガイド*」を参照してください。

Marketing Platform のアップグレードのシナリオ

Marketing Platform をアップグレードするには、以下のガイドラインに従ってください。

ソース・バージョン	アップグレード・パス
LDAP サーバーに統合されている 8.2.0 より前の Marketing Platform バージョン	1. 「AM グループ・マップの LDAP 参照 (LDAP reference to AM group map)」プロパティーでマップされていない LDAP グループを「AM ユーザー作成用の LDAP 参照 (LDAP references for AM user creation)」プロパティーでマップした場合、アップグレードに進む前に Marketing Platform の現行バージョンで以下を行う必要があります。 • 「**AM グループ・マップの LDAP 参照 (LDAP reference to AM group map)**」プロパティーでマップされていない「**AM ユーザー作成用の LDAP 参照 (LDAP references for AM user creation)**」プロパティー内のグループを識別します。 • 識別した LDAP グループを該当する Marketing Platform グループにマップします。 LDAP 同期を実行した後、これらのユーザーを追加の Marketing Platform グループにマップし、必要に応じてそのアプリケーション・アクセスを制御することができます。詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。 直前のステップを実行することで、希望のユーザーすべてが Marketing Platform で作成されます。 2. この表の残りの部分で示されている、ご使用のバージョンのアップグレード手順に従います。

ソース・バージョン	アップグレード・パス
7.5.0 より前のバージョンの Affinium Manager	このバージョンから直接 Marketing Platform にアップグレードすることはできません。以下のステップを実行します。 1. 7.5.1 Affinium Manager ソフトウェアを入手し、そのバージョンにアップグレードします。 **重要:** 7.5.0 より前のバージョンの Marketing Platform からバージョン 8.0.0 以降にアップグレードするには、まずバージョン 7.5.1 にアップグレードする必要があります。 Manager 7.5.0 および 7.5.1 ソフトウェアに付属しているインストール・ガイドには、誤りが含まれています。これらいずれかのガイドを使用すると、アップグレードで問題が生じる可能性があります。代わりに、訂正版の「*Affinium Manager 7.5.1 Installation Guide*」にある説明に従う必要があります。このガイドは、Customer Central から入手することも、IBM Unica テクニカル・サポートと連絡を取って入手することもできます。 (ソフトウェアは 7.5.x バージョンから 8.1.x への直接アップグレードをサポートしていますが、「*Affinium Manager 7.5.0 Installation Guide*」のアップグレードの説明が訂正されていません。 7.5.0 より前のバージョンの場合は、バージョン 7.5.1 にアップグレードし、訂正された説明に従ってください。) タイトル・ページにある発行日が 2010 年 7 月 6 日以降であれば、それは訂正されたガイドです。 2. 本書の 47 ページの『自動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』または 49 ページの『手動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』の説明に従って、Affinium Manager の 7.5.1 インストールを Marketing Platform にアップグレードします。
Affinium Manager バージョン 7.5.x	1. 本書の 47 ページの『自動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』または 49 ページの『手動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』の説明に従います。
Marketing Platform バージョン 8.x	1. **8.2.0.7 より前のバージョンからアップグレードする場合は**、『自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』または 40 ページの『手動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』の説明に従います。 2. **バージョン 8.2.0.7 以降からアップグレードする場合は**、自動アップグレードはサポートされません。 40 ページの『手動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法』の説明に従ってください。

自動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法

バージョン 8.x からのアップグレードは、インプレース・アップグレードです。現行の Marketing Platform がインストールされているディレクトリーにインストールを行います。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM Unica マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー

ベスト・プラクティスは、以下のとおりです。

- 以前のバージョンの製品のインストーラーを当初置いたのと同じディレクトリーにインストーラーを置きます。

- 以前のバージョンの IBM Unica 製品インストーラーがあればすべてディレクトリーから削除し、マスター・インストーラーが以前のバージョンのインストールを試行しないようにします。

1. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップ・コピーを作成します。

   重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

2. Marketing Platform 配置を配置解除します。

   Web アプリケーション・サーバーによっては、圧縮または解凍した `dashboard.war` ファイルおよび `unica.war` ファイルが配置されている可能性があります。あるいは、Marketing Platform を含む EAR ファイルが配置されている可能性があります。 8.6.0 およびそれ以降のバージョンでは、ダッシュボードが別個の WAR ファイルに入ることはなくなりました。

3. IBM Unica マスター・インストーラーを実行します。

   IBM Unica マスター・インストーラーが開始します。インストーラーの実行について詳しくは、 21 ページの『ステップ: IBM Unica インストーラーの実行』を参照してください。

   - インストール・ディレクトリーの選択を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、ルート IBM Unica インストール・ディレクトリーを選択します。この IBM Unica ディレクトリーの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリーではありません。
   - Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。

   IBM Unica マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

4. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
   - Manager 7.5.x をアップグレードするかどうか Marketing Platform インストーラーに尋ねられたら、「**いいえ**」を選択します。
   - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリー (通常 `Platform` という名前) を選択します。
   - 「**自動データベース・セットアップ**」を選択します。
   - インストール・ウィザードの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。

5. 25 ページの『第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ』のガイドラインに従って、インストールを配置します。

6. インストールの要約を示すウィンドウを注意深く確認します。エラーが報告される場合、インストーラー・ログ・ファイルを調べ、必要に応じて IBM Unica テクニカル・サポートに連絡してください。

手動移行によってバージョン 8.x からアップグレードする方法

Marketing Platform アップグレード・インストーラーはアップグレードに必要なすべてのデータ移行を自動的に実行することができますが、会社でそれが許可されていない場合には、この手順を実行して手動でアップグレードする必要があります。

この手順は Marketing Platform バージョン 8.x からのアップグレードにのみ当てはまります。他のバージョンからのアップグレードについて詳しくは、37 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM Unica マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー
- アップグレードする製品レポート・パッケージのインストーラー

また、Marketing Platform 8.x のインストールがきちんと機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにある 2 つの Marketing Platform ユーティリティーを使用する必要があります。これらのユーティリティーの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 119 ページの『populateDb ユーティリティー』
- 110 ページの『configTool ユーティリティー』

1. Marketing Platform システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

   重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

2. 現行バージョンを配置解除します。

   Web アプリケーション・サーバーによっては、圧縮または解凍した `dashboard.war` ファイルおよび `unica.war` ファイルが配置されている可能性があります。あるいは、Marketing Platform を含む EAR ファイルが配置されている可能性があります。それらのコンポーネントが別々に配置されている場合は、両方とも配置解除します。 8.6.0 およびそれ以降のバージョンでは、ダッシュボードが別個の WAR ファイルに入ることはなくなりました。

3. IBM Unica マスター・インストーラーを実行します。

   IBM Unica マスター・インストーラーが開始します。 IBM Unica マスター・インストーラーで、以下のガイドラインに従います。

   - Marketing Platform データベース接続情報の入力を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform システム・テーブルに関する情報を入力します。
   - インストール・ディレクトリーの選択を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、ルート IBM Unica インストール・ディレクトリーを選択します。この IBM Unica ディレクトリーの下にある Marketing Platform インストール・ディレクトリーではありません。

IBM Unica マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

4. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
   - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが Marketing Platform インストーラーから出されたら、現行の Marketing Platform インストールのディレクトリー (通常 `Platform` という名前) を選択します。
   - Manager 7.5.x をアップグレードするかどうかインストーラーに尋ねられたら、「**いいえ**」を選択します。
   - インストーラーに前のインストールをバックアップさせます。
   - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
   - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
   - Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
5. レポート・パッケージ・インストーラーが起動したら、レポート・スキーマ・コンポーネントをインストールします。
6. すべてのインストーラーが完了した後、`configTool` ユーティリティーを使用して以下の手順を実行することにより、次のステップで実行する SQL スクリプトが正しく実行されることを確認します。
   a. ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティーをエクスポートします。

      例えば、以下のコマンドは、プロパティーを `config_property_export.xml` というファイルにエクスポートします。このファイルは、Marketing Platform インストールの `install` ディレクトリーに作成されます。これは Windows での例です。

      ```
      configTool.bat -x -p "Affinium" -f
      "C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml
      ```

   b. ルート・ノード Affinium から、すべての構成プロパティーを削除します。

      例えば、以下のコマンドはプロパティーを削除します。これは Windows での例です。

      ```
      configTool.bat -d -o -p "Affinium"
      ```

   c. エクスポートした構成プロパティーをインポートします。

      例えば、以下のコマンドは、プロパティーを、Marketing Platform インストールの install ディレクトリーにある `config_property_export.xml` というファイルからインポートします。これは Windows での例です。

      ```
      configTool.bat -i -o -f
      "C:¥Unica¥Platform¥install¥config_property_export.xml
      ```

7. **バージョン 8.2.0.7 以降からアップグレードする場合のみ、**以下のステップを実行します。

   Marketing Platform インストール済み環境の `db\upgrade82to85` ディレクトリーで、SQL スクリプトを次のように編集します。

a. 編集する SQL スクリプトは ManagerSchema_*DB_Type*_85upg.sql です (*DB_Type* はご使用のシステム・テーブル・データベースのデータベース・タイプ)。

b. すべてのデータベース・タイプについて、次のステートメントを削除します。

```
ALTER TABLE USCH_RUN ADD PAYLOAD NVARCHAR(4000);
```

c. ご使用のデータベースが DB2 の場合は、以下のステートメントも削除します。

```
ALTER TABLE qrtz_job_details ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE
blob(4000);

ALTER TABLE qrtz_triggers ALTER COLUMN job_data SET DATA TYPE
blob(4000);
```

8. 以下の中の該当する表を使用して、新しい Marketing Platform インストール済み環境で提供されている SQL スクリプトを探し、ご使用の Marketing Platform システム・テーブル・データベースに対するものを見つけます。示されている順序で SQL スクリプトを実行します。

表 1. バージョン 8.0.x からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_81upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade80to81
ManagerSchema_*DB_Type*_8201upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to8201
ManagerSchema_*DB_Type*_85upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade82to85
ManagerSchema_*DB_Type*_86upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
active_portlets.sql	db

表 2. バージョン 8.1.x または 8.2.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_8201upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to8201
ManagerSchema_*DB_Type*_85upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade82to85

表 2. バージョン 8.1.x または 8.2.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル (続き)

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_86upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
active_portlets.sql	db

表 3. バージョン 8.2.0.1 またはその後のパッチ・バージョンからアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_85upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
insert_new_85_locales.sql	db¥upgrade82to85
ManagerSchema_*DB_Type*_86upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
active_portlets.sql	db

表 4. バージョン 8.5.0.0 からアップグレードする場合に使用するテーブル

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_86upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
active_portlets.sql	db

9. populateDb ユーティリティーを使用して、システム・テーブルにデフォルトの Marketing Platform 構成プロパティー、ユーザーとグループ、およびセキュリティーの役割と権限のデータを設定します。

   このユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにあります。

   例: populateDb -n Manager

   使用法について詳しくは、 119 ページの『populateDb ユーティリティー』を参照してください。

10. configTool ユーティリティーを使用して、Interaction History で必要なスケジューラー構成プロパティーをインポートします。

    configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリーにある、interaction_history_scheduler.xml ファイルを使用します。

例 (Windows): `configTool -i -p "Affinium|suite|scheduler|taskRegistrations" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥upgrade85to86¥interaction_history_scheduler.xml`

11. `configTool` ユーティリティーを使用して、Attribution Modeler で必要なスケジューラー構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の `conf/upgrade85to86` ディレクトリーにある、`attribution_modeler_scheduler.xml` ファイルを使用します。

    例 (Windows): `configTool -i -p "Affinium|suite|scheduler|taskRegistrations" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\attribution_modeler_scheduler.xml`

12. `configTool` ユーティリティーを使用して、IBM Coremetrics® によるシングル・サインオンで必要な構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにある、`coremetrics_configuration.xml` ファイルと `coremetrics_navigation.xml` ファイルを使用します。

    例 (Windows):

    - `configTool -i -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml`
    - `configTool -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu|Analytics" -f C:\Unica\Platform\conf\coremetrics_navigation.xml`

13. `configTool` ユーティリティーを使用して、レポート作成に必要な構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の `conf/upgrade85to86` ディレクトリーにある、`cognos10_integration.xml` ファイルを使用します。

    例 (Windows): `configTool -i -p "Affinium|Report|integrations" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\cognos10_integration.xml`

14. `configTool` ユーティリティーを使用して、不使用になった JMS 構成プロパティーを削除します。

    例 (Windows):

    - `configTool -d -o -p "Affinium|suite|jmsServer"`
    - `configTool -d -o -p "Affinium|suite|jmsPort"`

15. **バージョン 8.2.0 以降からアップグレードする場合に限り**、`configTool` ユーティリティーを使用して新規 LDAP 構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の `conf/upgrade85to86` ディレクトリーにある、`LDAP_Anonymous_bind.xml` ファイルを使用します。

    例 (Windows): `configTool -i -p "Affinium|suite|security|loginModes|LDAPPartitionLogin" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\LDAP_Anonymous_bind.xml`

16. ダッシュボードをアップグレードするには、Marketing Platform インストールの下の tools¥bin ディレクトリーにある upgrade85Dashboard スクリプトを実行します。
17. 以下に従って、「**ヘルプ**」>「**バージョン情報**」ページを更新します。
    a. configTool ユーティリティーを使用して、Affinium | Manager | about カテゴリーをエクスポートします (このカテゴリーは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

       例 (Windows): configTool -x -p "Affinium|Manager|about" –f C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml
    b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

       releaseNumber プロパティーを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の、7.5.1 をご使用の新規バージョンに変更します。

       ```
       <property name="releaseNumber" type="string">

       <displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>

       <value>7.5.1</value>

       </property>
       ```
    c. displayName プロパティーを見つけ、値を製品の新規名に変更します。以下の例の、Affinium Manager を Marketing Platform に変更します。

       ```
       <property id="4" name="displayName" type="string_property"
       width="40">

       <value>Affinium Manager</value>

       </property>
       ```
    d. configTool ユーティリティーを使用して、変更されたファイルをインポートします。 –o オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートする際には親ノードを指定する必要があります。

       例 (Windows): configTool –i –p "Affinium|Manager" –f "about.xml" -o
18. 25 ページの『第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ』の章の説明に従って、インストールを配置して確認します。

    Reports の Web コンポーネントは、別個の配置ではなくなりました。これは現在 Marketing Platform に組み込まれており、Marketing Platform が含まれている EAR ファイルを配置するときに配置されます。

IBM Unica Marketing アプリケーションをアップグレードした後、レポートのアップグレードに必要な追加ステップに関して 89 ページの『第 9 章 レポートのアップグレード』を参照してください。

Affinium Manager 7.5.x からのアップグレードについて

アップグレード対象の Affinium Manager 7.5.x インストール済み環境を検索するよう指定した場合、自動的にアップグレード・モードでインストーラーが実行されます。

アップグレード・モードでは、Marketing Platform インストーラーによって既存のバージョンの Affinium Manager から自動的にデータが移行されます。 47 ページの『自動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』を参照してください。

インストーラーを使って自動的に移行する操作が企業のポリシーによって許可されない場合、Marketing Platform インストール済み環境に含まれるスクリプトを使って手動でこれを実行できます。 49 ページの『手動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法』を参照してください。

自動的な移行によって生成されるファイル

インストーラーは Affinium Manager 7.5x の構成を `Manager_config_upgrade7xto80.xml` という名前の XML ファイルにエクスポートします。このファイルは Marketing Platform インストール済み環境の `install` ディレクトリーにあります。自動的な移行を選択した場合、アップグレード・プロセス中にこのファイルに対して操作を行う必要はありません。手動による移行を選択した場合、データベースの更新後にこれらの設定をインポートしてください。

インストーラーは `upgrade7xto80.log` という名前のアップグレード・ログを生成します。このファイルは Marketing Platform インストール済み環境の `install` ディレクトリーにあります。

データベース・ユーザーに必要な追加の権限

Marketing Platform にアップグレードするためにインストーラーを実行する際には、新規インストールを実行する場合と同じように、Marketing Platform システム・テーブル・データベースに関するデータベース接続情報を入力する必要があります。ただし、ここで使用するデータベース・アカウントは、『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル・データベースまたはスキーマの作成』にリストされている権限に加えて、以下の権限を持つ必要があります。

- DROP TABLES
- DROP SEQUENCES (Oracle のみ)

Affinium Reports について

バージョン 8.x では、レポート作成機能は Marketing Platform のコンポーネントの 1 つです。 Affinium Reports 7.5.x のように別個の Web アプリケーションでレポート作成機能が提供されることはなくなりました。

Affinium Manager 7.5x を Marketing Platform バージョン 8.x にアップグレードするとき、レポート機能もまたインストーラーおよびデータベース・スクリプトによってアップグレードされますが、場合によっては手動でいくつかのステップを行う必要があります。詳しくは、 89 ページの『第 9 章 レポートのアップグレード』を参照してください。

「すべてのユーザー」グループとアップグレードについて

Affinium Manager のインストール済み環境に「**すべてのユーザー**」という名前のユーザー・グループが含まれる場合、このグループは Marketing Platform の新規インストールに移行されます。「**すべてのユーザー**」グループに関連付けられているアプリケーション・アクセス権限の割り当てはすべて保持されます (ただし Marketing Platform では「役割」と呼ばれます)。

Affinium Manager の「**すべてのユーザー**」グループと Marketing Platform に移行後のグループとの間で、機能上の唯一の違いは、Marketing Platform で作成される新規ユーザーが「**すべてのユーザー**」グループに自動的に追加されない ことです。

「**すべてのユーザー**」グループを使用し続けることも、このグループを削除することもできます。ユーザーにアプリケーション・アクセスを提供するためにこのグループにこれまで依存してきた場合、これを削除した後に、アップグレード前と同じ権限をこれらのユーザーに保持させるには、それと同等の役割を Marketing Platform でグループの旧メンバーに与える必要があります。

予想されるデータベースの変更

以下のテーブルはもはや使用されなくなるため、これらはアップグレード後の Marketing Platform には存在しません。

- usm_otype
- usm_object
- usm_group
- usm_grp_obj_map
- usm_user_obj_map

さらに、いくつかのテーブルの名前が新しくなります。現在の Marketing Platform システム・テーブル・データベースの説明については、Marketing Platform システム・テーブルに関する資料を参照してください。

自動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法

この手順は、Affinium Manager バージョン 7.5.x からのアップグレードにのみ当てはまります。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM Unica マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー
- アップグレードする予定の製品レポート・パッケージのインストーラー

また、Affinium Manager 7.5.x のインストールがきちんと機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。

1. `configTool` ユーティリティーを使用して、古い構成設定をすべてエクスポートします。

- ユーティリティーは、Affinium Manager インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。使用法について詳しくは、 110 ページの『configTool ユーティリティー』を参照してください。
- コマンド例を以下に示します。

  ```
  configTool -x -f "path_to_any_directory/config_backup.xml"
  ```

  このコマンドは、コマンドで指定したディレクトリーに `config_backup.xml` ファイルを作成します。ファイルが存在し、すべての設定が含まれていることを確認します。

2. Affinium Manager システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

   重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. Affinium Manager WAR ファイルおよび Reports WAR ファイルを配置解除します。
4. IBM Unica インストーラーを実行します。
   - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、デフォルトを受け入れるか、新規ディレクトリーを作成するか、または既存のディレクトリーを選択することができます。指定するディレクトリーは、製品インストールのルート (親) ディレクトリーになります。この親の下にインストールする製品はそれぞれ、その独自のサブディレクトリーを持ちます。
   - Marketing Platform データベース接続情報を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、Affinium Manager 7.5.x システム・テーブルに関する情報を入力します。

   IBM Unica マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

5. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
   - アップグレードする Manager 7.5.x インストールがあるかどうか Marketing Platform インストーラーによって尋ねられたら、「**はい**」を選択します。
   - アップグレード・ディレクトリーとして Affinium Manager 7.5.x インストール・ディレクトリーを選択します。
   - 「**自動データベース・セットアップ**」を選択します。
6. レポート・パッケージ・ウィザードが起動したら、レポート・スキーマ・コンポーネントをインストールします。
7. 6 ページの『ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する』および 7 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成』の説明に従って、データベース・ドライバーを入手し、Marketing Platform システム・テーブルへの JDBC 接続を作成します。
8. インストールを配置して確認します。

   Reports の Web コンポーネントは、別個の配置ではなくなりました。これは現在 Marketing Platform に組み込まれており、Marketing Platform が含まれている EAR ファイルを配置するときに配置されます。

28 ページの『ステップ: Marketing Platform のインストールの検証』の説明に従って、インストールを確認してください。

IBM Unica Marketing アプリケーションをアップグレードした後、レポートのアップグレードに必要な追加ステップに関して 89 ページの『第 9 章 レポートのアップグレード』を参照してください。

手動移行によって Manager 7.5.x からアップグレードする方法

Marketing Platform アップグレード・インストーラーはアップグレードに必要なすべてのデータ移行を自動的に実行することができますが、会社でそれが許可されていない場合には、この手順を実行して手動でアップグレードする必要があります。

この手順は Affinium Manager バージョン 7.5.x からのアップグレードにのみ当てはまります。他のバージョンからのアップグレードについて詳しくは、 37 ページの『Marketing Platform のアップグレードのシナリオ』を参照してください。

以下のものが 1 つのディレクトリーに置かれていることを確認します。

- IBM Unica マスター・インストーラー
- Marketing Platform インストーラー
- アップグレードする製品レポート・パッケージのインストーラー

また、Affinium Manager 7.5.x のインストールがきちんと機能すること、およびコマンド・ライン・ツールを実行できることも確認してください。この手順では、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにある 2 つの Marketing Platform ユーティリティーを使用する必要があります。これらのユーティリティーの使用に関する詳しい情報 (共通タスクのコマンド例を含む) は、以下から入手できます。

- 119 ページの『populateDb ユーティリティー』
- 110 ページの『configTool ユーティリティー』

1. `configTool` ユーティリティーを使用して、古い構成設定をすべてエクスポートします。

   ユーティリティーは、Affinium Manager インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

   コマンド例を以下に示します。

   ```
   configTool -x -f "path_to_any_directory/config_backup.xml"
   ```

   このコマンドは、コマンドで指定したディレクトリーに `config_backup.xml` ファイルを作成します。

   - ファイルが存在し、すべての設定が含まれていることを確認します。
   - 後のステップでファイル名を変更して移動するので、ファイル名と場所のメモを取っておきます。

   使用法について詳しくは、 110 ページの『configTool ユーティリティー』を参照してください。

2. Affinium Manager システム・テーブル・データベースのバックアップを作成します。

   重要: このステップはスキップしないでください。アップグレードが失敗した場合に、データベースをロールバックすることができず、データが破損します。

3. Affinium Manager WAR ファイルおよび Reports WAR ファイルを配置解除します。
4. IBM Unica マスター・インストーラーを実行します。

   IBM Unica マスター・インストーラーが開始します。

   - Marketing Platform データベース接続情報を求めるプロンプトが IBM Unica マスター・インストーラーから出されたら、Affinium Manager 7.5.x システム・テーブルに関する情報を入力します。場合によっては、インストーラーは、以前の Manager インストールを検出できないことがあります。その場合、続行するかどうかを尋ねる追加の確認ウィンドウが表示されます。「**OK**」をクリックします。

   IBM Unica マスター・インストーラーは Marketing Platform インストーラーを一時停止し、起動します。

5. Marketing Platform インストーラーで、以下のガイドラインに従います。
   - アップグレードする Manager 7.5.x インストールがあるかどうか Marketing Platform インストーラーによって尋ねられたら、「**はい**」を選択します。
   - インストール・ディレクトリーを求めるプロンプトがインストーラーから出されたら、Affinium Manager 7.5.x インストール・ディレクトリーとは異なるディレクトリーを選択または作成します。
   - 「**手動データベース・セットアップ**」を選択します。
   - 「**Platform の構成の実行**」チェック・ボックスを選択解除します。
   - Marketing Platform インストーラーの残りのすべてのステップに従い、要求されるすべての情報を入力します。
6. レポート・パッケージ・インストーラーが起動したら、レポート・スキーマ・コンポーネントをインストールします。
7. すべてのインストーラーが終了した後、Affinium Manager 7.5.x システム・テーブル・データベースに対して、新規 Marketing Platform インストールで提供されている以下の SQL スクリプトを実行します。スクリプトは、次の表に示されている順序で実行します。

スクリプト名	場所
`0_Platform_Upgrade75to80_DropConstraints.sql`	`db¥upgrade75to80`
`1_Platform_Upgrade75to80_`*`DB_Type`*`_backup.sql`。 *`DB_Type`* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	`db¥upgrade75to80`
`2_Platform_Upgrade75to80_BackupData.sql`	`db¥upgrade75to80`
`ManagerSchema80_`*`DB_Type`*`.sql`。*`DB_Type`* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	`db¥upgrade75to80`

スクリプト名	場所
ManagerSchema_*DB_Type*_81upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。 **システム・テーブル・データベースが SQL Server** の場合のみ、以下のいずれかを行う必要があります。 • スクリプトを開き、編集して CREATE TABLE ステートメント "CREATE TABLE USM_DB_RESOURCE_BUNDLE(...);" の前と後ろに GO を追加します。編集を完了した後のスクリプトのこの部分は以下のようになります。 GO CREATE TABLE USM_DB_RESOURCE_BUNDLE (ID BIGINT IDENTITY(1, 1) NOT NULL, NAME VARCHAR(256) NOT NULL, LOCALE VARCHAR(16), APPLICATION INT, BUNDLE_PROPERTIES VARCHAR(MAX), PRIMARY KEY CLUSTERED (ID asc)); GO その後、スクリプトを実行します。 • このスクリプトは一度にすべてを実行するのではなく、一度に 1 行ずつ実行します。	upgrade80to81
quartz_*DB_Type*.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db
• **システム・テーブル・データベースが Oracle または DB2** の場合のみ、3_Platform_Upgrade75to80_CopyDataToNewTables.sql を使用します。 • **システム・テーブル・データベースが SQL Server** の場合のみ、3_Platform_Upgrade75to80_CopyDataToNewTables_SQLServer.sql を使用します。	db¥upgrade75to80
ManagerSchema_*DB_Type*_8201upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to8201
ManagerSchema_*DB_Type*_85upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade82to85
ManagerSchema_*DB_Type*_86upg.sql。*DB_Type* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。	db¥upgrade85to86
active_portlets.sql	db

8. エクスポートした構成設定を含むファイル (前のステップで作成したもの) に対して、以下の処理を行います。これにより、スクリプトによって、次のステップで設定を自動的にインポートできるようになります。
   - 新規 Marketing Platform インストールの下の `install` ディレクトリーに、このファイルを移動またはコピーします。
   - ファイルの名前を `Manager_config_upgrade7xto80.xml` に変更します。
9. `upgrade7xto80` を実行します (拡張子は、Windows の場合は `.bat` で、UNIX の場合は `.sh`)。このスクリプトは、新規 Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

   以下のようなエラーが表示され、かつオペレーティング・システムが AIX® **ではない**場合、 56 ページの『最新の JCE ポリシー・ファイルを入手する方法』で説明されている手順を実行し、その後、スクリプトを実行します。

   エラー com.unica.manager.utils.KeyManager - ファイル [C:¥...¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile] からキーを取得できませんでした。原因: キーのサイズが正しくありません (ERROR com.unica.manager.utils.KeyManager - Cannot retrieve the key from the file [C:¥...¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile], cause: Illegal key size)
10. Affinium Manager 7.5.x システム・テーブル・データベースに対して `4_Platform_Upgrade75to80_Drop7xTables.sql` スクリプトを実行します。
11. 新規 Marketing Platform インストールの下の `db¥upgrade82to85` ディレクトリーにある `insert_new_85_locales.sql` スクリプトを Affinium Manager 7.5.x システム・テーブル・データベースに対して実行します。
12. 以下のステップを実行し、次のステップで SQL を実行する際にエラーの原因になる可能性がある孤立レコードを削除します。
    - Affinium Manager 7.5.x システム・テーブル・データベースに対して以下の SQL を実行します。

      ```
      SELECT * FROM USM_ROLE_ROLE_MAP WHERE PARENT_ROLE_ID NOT IN (SELECT
      ID FROM USM_ROLE)

      SELECT * FROM USM_USER_ROLE_MAP WHERE USER_ID NOT IN (SELECT ID FROM
      USM_USER)
      ```
    - これらのクエリーから返されるレコードが孤立行です。それらを削除します。
13. Affinium Manager 7.5.x システム・テーブル・データベースに対して `ManagerSchema_`*`DB_Type`*`_CreateFKConstraints.sql` スクリプトを実行します。*`DB_Type`* は、システム・テーブル・データベースのデータベース・タイプです。
14. `populateDb` ユーティリティーを使用して、システム・テーブルにデフォルトの Marketing Platform ユーザーとグループ、およびセキュリティーの役割と権限のデータを設定します。以下に示されるステップに従います。

    このユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

- まず、以下のようにして、ユーティリティーを実行するスクリプト・ファイルを編集してメモリーを増やす必要があります。
  - populateDb ファイルをテキスト・エディターで開き、以下のような行を探します。この例は、Windows の場合です。UNIX バージョンの場合は若干異なります。

    ```
    "%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="
    %UNICA_PLATFORM_HOME%" com.unica.manager.tools.PopulateDb %*
    ```
  - -DUNICA_PLATFORM_HOME の直前に -Xmx512m を追加し、その後ろにスペースを追加します。
  - ファイルを保存して閉じます。
- 次に、populateDb ユーティリティーを実行します。

  例: populateDb -n Manager

  使用法について詳しくは、119 ページの『populateDb ユーティリティー』を参照してください。

15. configTool ユーティリティーを使用して、Interaction History で必要なスケジューラー構成プロパティーをインポートします。

    configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにあります。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリーにある、interaction_history_scheduler.xml ファイルを使用します。

    例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|suite|scheduler|taskRegistrations" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\interaction_history_scheduler.xml
16. configTool ユーティリティーを使用して、Attribution Modeler で必要なスケジューラー構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリーにある、attribution_modeler_scheduler.xml ファイルを使用します。

    例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|suite|scheduler|taskRegistrations" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\attribution_modeler_scheduler.xml
17. configTool ユーティリティーを使用して、Marketing Platform のメニュー項目を登録します。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある、config_navigation.xml ファイルを使用します。

    例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|suite" -f C:\Unica\Platform\conf\config_navigation.xml
18. configTool ユーティリティーを使用して、IBM Coremetrics によるシングル・サインオンで必要な構成プロパティーをインポートします。

Marketing Platform インストール済み環境の conf ディレクトリーにある、coremetrics_configuration.xml ファイルと coremetrics_navigation.xml ファイルを使用します。

例 (Windows):

- configTool -i -p "Affinium" -f C:¥Unica¥Platform¥conf¥coremetrics_configuration.xml
- configTool -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu|Analytics" -f C:\Unica\Platform\conf\coremetrics_navigation.xml

19. configTool ユーティリティーを使用して、レポート作成に必要な構成プロパティーをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリーにある、cognos10_integration.xml ファイルを使用します。

    例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|Report|integrations" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\cognos10_integration.xml

20. configTool ユーティリティーを使用して、新規 LDAP 構成プロパティをインポートします。

    Marketing Platform インストール済み環境の conf/upgrade85to86 ディレクトリーにある、LDAP_Anonymous_bind.xml ファイルを使用します。

    例 (Windows): configTool -i -p "Affinium|suite|security|loginModes|LDAPPartitionLogin" -f C:\Unica\Platform\conf\upgrade85to86\LDAP_Anonymous_bind.xml

21. 以下に従って、「**ヘルプ**」>「**バージョン情報**」ページを更新します。
    a. configTool ユーティリティーを使用して、Affinium | Manager | about カテゴリーをエクスポートします (このカテゴリーは非表示としてマークされているため、「構成」ページには表示されません)。

       例 (Windows): configTool -x -p "Affinium|Manager|about" –f C:¥Unica¥Platform¥conf¥about.xml

    b. 以下のように、直前で作成したエクスポート XML ファイル (例の about.xml) を編集して、バージョン番号および表示名を変更します。

       releaseNumber プロパティーを見つけ、値を Marketing Platform の現行バージョンに変更します。以下の例の、7.5.1 をご使用の新規バージョンに変更します。

       ```
       <property name="releaseNumber" type="string">

       <displayNameKey>about.releaseNumber</displayNameKey>

       <value>7.5.1</value>

       </property>
       ```

    c. displayName プロパティーを見つけ、値を製品の新規名に変更します。以下の例の、Affinium Manager を Marketing Platform に変更します。

```
<property id="4" name="displayName" type="string_property"
width="40">

<value>Affinium Manager</value>

</property>
```

d. `configTool` ユーティリティーを使用して、変更されたファイルをインポートします。 `-o` オプションを使用して、ノードを上書きする必要があります。インポートする際には親ノードを指定する必要があります。

例 (Windows): `configTool -i -p "Affinium|Manager" -f "about.xml" -o`

22. 6 ページの『ステップ: JDBC ドライバー用に Web アプリケーション・サーバーを構成する』および7 ページの『ステップ: Web アプリケーション・サーバーでの JDBC 接続の作成』の説明に従って、データベース・ドライバーを入手し、Marketing Platform システム・テーブルへの JDBC 接続を作成します。
23. 25 ページの『第 4 章 IBM Unica Marketing Platform のデプロイ』の説明に従ってインストールを配置します。

    Reports の Web コンポーネントは、別個の配置ではなくなりました。これは現在 Marketing Platform に組み込まれており、Marketing Platform を配置するときに配置されます。
24. IBM Unica Marketing で別のページに移動する前に、以下を行います。
    - ブラウザーで `http://host:port/unica/jsp/configmanager.jsp` を指定します。 *host* と *port* は、インストールに適切な値です。
    - asm_admin ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
    - 「**設定**」>「**構成**」ページに移動します。
    - 以下の構成値を確認し、必要に応じて変更します。
      - 「全般」>「ナビゲーション」>「Unica URL」。これは、完全修飾したホストおよびポートを使用する Marketing Platform の URL であるべきです。例えば、`http://myHost.myCompanyDomain.com:8080/unica` です。
      - 「Affinium Suite」>「ドメイン名」。この値は、Marketing Platform URL で使用されるドメインと、大/小文字の違いも含めて一致しなければなりません。上記の例では、これは、`myCompanyDomain.com` です。
    - ログアウトします。
25. 通常の Marketing Platform URL に移動し、ログインして、28 ページの『ステップ: Marketing Platform のインストールの検証』の説明に従ってインストールを確認します。
26. データ・ソースおよびデータ・ソース・パスワードをいずれかのユーザーに割り当てた場合、データ・ソース・パスワードを確認し、必要に応じて手動で再設定します。オペレーティング・システムが AIX の場合は、これを確実に行う必要があります。

IBM Unica Marketing アプリケーションをアップグレードした後、レポートのアップグレードに必要な追加ステップに関して89 ページの『第 9 章 レポートのアップグレード』を参照してください。

最新の JCE ポリシー・ファイルを入手する方法

upgrade7xto80 スクリプトの実行時に以下のエラーが表示される場合は、この手順を実行します。

エラー com.unica.manager.utils.KeyManager - ファイル [C:¥...¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile] からキーを取得できませんでした。原因: キーのサイズが正しくありません (ERROR com.unica.manager.utils.KeyManager - Cannot retrieve the key from the file [C:¥...¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile], cause: Illegal key size)

この回避策は、Marketing Platform が AIX にインストールされている場合には適用されません。その場合、アップグレードを完了した後、IBM Unica Marketing にログインし、データ・ソースのパスワードを手動で変更する必要があります。

この手順により、最新の Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policy Files 5.0 を入手することができます。

これらのファイルは、http://java.sun.com/javase/downloads/index_jdk5.jsp からダウンロードします。

Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policy Files 5.0 にスクロールし、以下を行います。

1. Manager 7.5.x インストールの JRE に更新済みの JCE Unlimited Strength Jurisdiction ファイルがあることを確認します。ダウンロードの説明に従って、local_policy.jar および US_export_policy.jar を jre/lib/security ディレクトリーにコピーします。
2. encryptPasswords -k を使用して、鍵ストア・パスワードを再び暗号化します。
3. Marketing Platform インストーラーで提供されている JRE を使用しない場合、使用する予定の JRE の JCE Unlimited Strength Jurisdiction ファイルの更新も行います。
4. Marketing Platform インストーラーを実行します。これにより、鍵が 8.x に移行されます。

JCE の更新が行われないか、Marketing Platform システム・テーブル・データベースが AIX であるために回避策を使用できなかった場合、以下のエラーが表示される可能性があります。

ファイル [<INSTALL_DIR>¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile] から鍵を取得できませんでした。原因: 鍵のサイズが正しくありません (Cannot retrieve the key from the file [<INSTALL_DIR>¥Affinium¥Manager¥conf¥kfile], cause: Illegal key size)

javax.crypto.BadPaddingException: 埋め込みブロックが破損しています (javax.crypto.BadPaddingException: pad block corrupted)

このエラーが発生する場合、アップグレードの完了時に、IBM Unica Marketing にログインし、データ・ソースのパスワードを手動で変更します。

クラスター環境でのアップグレード

クラスター環境において、Affinium Manager の複数インスタンスを Marketing Platform にアップグレードする際には、以下のガイドラインを使用します。

- Affinium Manager および Affinium Reports のインスタンスをすべて配置解除します。
- 1 つを除いて、Affinium Manager のすべてのインスタンスをアンインストールします。
- この章の指示に従ってアップグレードします。
- 33 ページの『第 6 章 クラスターでの IBM Unica Marketing Platform のインストール』にあるクラスタリングの指示に従います。

第 8 章 レポートのインストール

レポート作成機能のために、IBM Unica Marketing はサード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos BI と統合します。レポート作成機能は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos BI のインストール済み環境
- IBM Unica システムを IBM Cognos インストール済み環境に統合する IBM Unica Marketing コンポーネントのセット
- Campaign、eMessage、および Interact に関して、アプリケーションのシステム・テーブルでレポート・ビューまたはテーブルを作成するためのレポート・スキーマ
- IBM Cognos Report Authoring で作成された、IBM Unica Marketing アプリケーション用のレポート例

Marketing Platform は、レポート機能統合の IBM Unica 側を提供します。レポート機能をインストールするには、以下を行ってください。

- Marketing Platform がインストールされているマシンでアプリケーション・レポート・パッケージからレポート・スキーマをインストールします。
- レポート・ビューまたはテーブルをセットアップします。
- IBM Cognos システムに IBM 統合コンポーネントとレポート・モデルをインストールします。

この章では、IBM Unica アプリケーション用のレポート作成機能をインストールおよびセットアップする方法について説明します。個別のコンポーネントと、それらが相互作用する方法については、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」の情報を参照してください。

レポート・コンポーネントのインストール

IBM Unica Marketing 製品レポート・パッケージのインストールおよび構成は、複数のステップから成るプロセスです。このセクションのタスクを表示されている順序で実行し、レポートをインストールします。

ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの設定 (必要な場合)

IBM Unica Marketing 「**設定**」>「**構成**」および「**設定**」>「**Reports SQL ジェネレーター**」ページにアクセスできるユーザーを構成し、レポート・プロパティーを構成して、レポート・スキーマの作成に使用する SQL を生成する必要があるときにこのユーザーとしてログインできるようにします。

これを行う最も簡単な方法は、**ReportSystem** 役割を **platform_admin** ユーザーに割り当てることです。この役割は、「ユーザーの役割と権限」ページの「**レポート**」>「**パーティション N (PartitionN)**」の下にあります。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

このタスクの実行に関する一般的な情報については、『ユーザーに役割を割り当てる方法、またはユーザーから役割を削除する方法』を参照してください。

ユーザーに役割を割り当てる方法、またはユーザーから役割を削除する方法

1. 「**設定**」>「**ユーザー**」をクリックします。

   「ユーザー」ページが表示されます。
2. 処理対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。

   ユーザー詳細のページに、ユーザーの属性、役割、グループ、およびデータ・ソースのリストが表示されます。
3. 「**役割の編集**」をクリックします。

   「役割の編集」ページが表示されます。ユーザーに割り当てられていない役割は、左側の「**使用可能な役割**」ボックスに表示されます。現在ユーザーに割り当てられている役割は、右側の「**役割**」ボックスに表示されます。
4. 「使用可能な役割」ボックスで役割名をクリックして選択します。

   選択された役割名が強調表示されます。
5. 「**追加**」または「**削除**」をクリックして、役割名を一方のボックスから他方のボックスに移動します。
6. 「**変更の保存**」をクリックして、変更を保存します。

   ウィンドウに「正常に保存されました」というメッセージが表示されます。
7. 「**OK**」をクリックします。

   右側のペインにユーザー詳細が表示され、変更が「**役割**」リストに表示されます。

ステップ: IBM Unica Marketing システムへのレポート・スキーマのインストール

IBM Unica マスター・インストーラーおよびレポート・パッケージ・インストーラーを使用して、Marketing Platform がインストールされているマシンに希望のレポート・スキーマをインストールします。 IBM Unica インストーラーについて詳しくは、11 ページの『IBM Unica Marketing インストーラーが機能する方法』を参照してください。

レポート・パッケージ・インストーラーを起動する際、以下のガイドラインに従います。

1. 「**ReportsPack*Product* コンポーネント (ReportsPack*Product* Components)**」 ウィンドウで、「**レポート・スキーマ**」を選択します。
2. 「**スキーマ・タイプ選択**」ウィンドウに複数のオプションが表示される場合、それは IBM Unica アプリケーションにカスタム属性がプリパッケージされていることを意味します。以下のいずれかを行います。

a. カスタム属性を含むレポート・スキーマをインストールするには、「**カスタム**」を選択します。 Campaign のサンプル・レポートは、カスタム属性を使用するように構成されています。そのため、Campaign レポート・パッケージをインストールし、サンプル・レポートを正しく機能させる場合、このオプションを選択する必要があります。

b. カスタム属性を含まないレポート・スキーマをインストールするには、「**基本**」を選択します。

インストーラーはレポート・スキーマをファイル・システムに配置し、スキーマを Marketing Platform に登録します。

3. 以下のようにして、レポート・スキーマが Marketing Platform に登録されていることを確認します。

   a. IBM Unica Marketing システムに **platform_admin** ユーザーとしてログインします。

   b. 「**設定**」>「**構成**」を選択します。

   c. 「**レポート**」>「**スキーマ**」>「***ProductName***」を展開します。

   アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが表示される場合、インストールが完了したことを意味します。

   アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが存在しない場合、レポート・パッケージは登録されていないことを意味します。そのため、次のステップの説明に従って、手動で登録する必要があります。

4. **スキーマ構成プロパティーが存在しない場合のみ**、以下のように手動で登録します。

   a. `import_all` スクリプトを以下のように編集します。

      スクリプトは、レポート・パッケージ・インストールの下の `tools` ディレクトリーにあります。

      `MANAGER_TOOLS_BIN_DIR` 変数の値を、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーのパスに設定します。

   b. スクリプトを実行します。

      スクリプトは Marketing Platform`configTool` ユーティリティーを呼び出し、スキーマを登録します。

   c. スキーマ構成プロパティーが存在することを確認します。

ステップ: 構成する認証モードの判別

IBM Unica Authentication Provider はコンポーネントの 1 つであり、 IBM Cognos Business Intelligence システムを IBM Unica Marketing と統合します。このコンポーネントは、IBM Cognos BI アプリケーションがスイート内の別の IBM Unica アプリケーションであるかのように IBM 認証を使用して IBM Unica Marketing システムと通信できるようにします。

認証オプションには、匿名 (anonymous)、認証済み (authenticated)、ユーザーごとに認証 (authenticated per user) の 3 つがあります。

- **匿名 (Anonymous)** は、認証が無効にされることを意味します。このモードを使用して、認証設定の手間をかけることなく、構成をテストします。
- **認証済み (Authenticated)** は、IBM Unica システムと IBM Cognos システムとの間の通信がマシン・レベルで保護されることを意味します。 1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。規則により、このユーザーの名前は「cognos_admin」となります。
- **ユーザーごとに認証 (Authenticated per user)** は、システムが個々のユーザー資格情報を評価することを意味します。

構成する必要がある認証モードを判別します。これらのオプションについて詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」の『レポートおよびセキュリティーについて』を参照してください。

ステップ: JDBC データ・ソースの作成

IBM Unica Marketing Reports SQL ジェネレーター・ツールは、レポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成するために、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースに接続できなければなりません。 SQL ジェネレーターは、ビューまたはマテリアライズ・ビューを作成する SQL スクリプトを、それらのアプリケーション・データベースにアクセスせずに生成することができます。ただし、データ・ソース接続がないと SQL の検証ができません。

Marketing Platform をホストするアプリケーション・サーバーで、レポートを有効にする各 IBM Unica Marketing アプリケーションに対して JDBC データ・ソースを構成します。以下にリストするデフォルトの JNDI 名を使用します。以下の表で説明されているデフォルトの JNDI 名を使用しない場合、SQL ジェネレーター・ツールを実行するときにデータ・ソースの正しい名前を指定できるよう、その名前のメモを取っておきます。

IBM アプリケーション	デフォルトの JNDI 名
Campaign	`campaignPartition1DS` 複数のパーティションが存在する場合、各パーティションに対してデータ・ソースを作成します。
eMessage	`campaignPartition1DS` (システム・テーブル用) `eMessagePartition1TrackingDS` (トラッキング・テーブル用)
Interact	`campaignPartition1DS` (設計時データベース用) `InteractRTDS` (実行時データベース用) `InteractLearningDS` (学習テーブル用)

このタスクに関する追加ヘルプが必要な場合、アプリケーション・サーバーのドキュメントを参照してください。 IBM アプリケーションの「インストール・ガイド」の JDBC データ・ソースの作成に関するセクションも参照してください。

オプションのステップ: 電子メール・サーバー情報の入手

レポート結果を電子メールで送る場合、以下の情報を入手します。

- SMTP サーバーのホスト名または IP アドレス
- そのサーバーのアカウントのユーザー名およびパスワード
- デフォルト送信者電子メールの電子メール・アドレス

レポート・ビューまたはテーブルの設定

Campaign、eMessage、および Interact にレポートを実装するには、レポートがレポート可能データを抽出するレポート・ビューまたはテーブルを作成します。このセクションでは、Reports SQL ジェネレーターを実行する方法について説明します。これは、レポート・スキーマを使用して、ビューまたはテーブル作成スクリプトを生成します。その後、そのスクリプトを IBM Unica アプリケーション・データベースで実行して、ビューまたはテーブルを作成します。

構成チェックリスト: レポート・ビューまたはテーブル

以下のリストは、レポート・スキーマを IBM Unica Reports Package から構成するときに実行するステップの概要を示しています。それぞれの手順は、このセクションの後の部分で詳しく説明されています。

1. 『ステップ: Reports SQL ジェネレーターのテンプレートのロード』
2. 『ステップ: ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成』
3. 65 ページの『ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成』
4. 69 ページの『テーブルおよびマテリアライズ・ビューのみのためのステップ: データ同期の設定』

ステップ: Reports SQL ジェネレーターのテンプレートのロード

レポート・スキーマを持つ IBM Unica Marketing アプリケーションのレポート・パッケージには、テンプレート SQL select ステートメントを `uar_common_sql` テーブルにロードする SQL スクリプトが含まれます。 Reports SQL ジェネレーターは、レポート・ビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際に、これらのテンプレートを使用します。このタスクでは、テンプレートをロードするスクリプトを実行します。

1. レポート・パック・インストールの下の `schema` ディレクトリーに移動し、`templates_sql_load.sql` スクリプトを見つけます。
2. `templates_sql_load.sql` スクリプトを Marketing Platform データベースで実行します。

ステップ: ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成

以下のステップを実行します。

1. IBM Unica Marketing に platform_admin ユーザー (または「Reports SQL ジェネレーター」メニュー項目にアクセスできる別のユーザー) としてログインします。
2. **前のステップで作成した JDBC データ・ソースに対してデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合のみ**、以下を行います。

a. 「**設定**」>「**構成**」>「**レポート**」>「**スキーマ**」> 「***製品名***」を選択します。

b. 前のステップで JDBC 接続に付けた JNDI 名と一致する JNDI プロパティーのデフォルト値を変更します。

3. 「**設定**」>「**Reports SQL ジェネレーター**」を選択します。
4. 「**製品**」項目で、適切な IBM アプリケーションを選択します。
5. 「**スキーマ**」項目で、1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。
6. 「**データベース・タイプ**」を選択します。
7. 「**生成タイプ**」項目で、適切なオプション (ビュー、マテリアライズ・ビュー、またはテーブル) を選択します。

   「**データベース・タイプ**」を MS SQL Server に設定した場合、オプションとしてマテリアライズ・ビューは表示されません。

   JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。
8. 「**Drop 文を生成しますか?**」が「いいえ」に設定されていることを確認します。

   初めてビューまたはテーブル作成スクリプトを実行するときにはドロップするビューまたはテーブルが存在していないので、ドロップ・スクリプトを作成する必要はありません。
9. (オプション) 生成される SQL を調べるには、「**生成**」をクリックします。SQL ジェネレーターはスクリプトを作成し、それをブラウザー・ウィンドウに表示します。
10. 「**ダウンロード**」をクリックします。

    SQL ジェネレーターはスクリプトを作成し、ファイルの保存先を指定することを促すプロンプトを出します。単一のレポート・スキーマを「**スキーマ**」項目から選択した場合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します (例えば `eMessage_Mailing_Performance.sql`)。レポート・スキーマを複数選択した場合、スクリプト名は製品名のみ (例えば、`Campaign.sql`) を使用します。名前の詳細なリストについては、 65 ページの『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。
11. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合、選択したスキーマがはっきりと分かる名前を使用してください。その後、「**保存**」をクリックします。
12. 生成する必要があるスクリプトごとにステップ 5 から 12 を繰り返します。

    注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに SQL スクリプトを個別に生成してください。

    スクリプトの検証を無効化することが必要な場合があります。例えば、おそらく Marketing Platform は IBM アプリケーション・データベースに接続できないものの、とにかくスクリプトは生成する場合などです。検証を無効にするには、データ・ソース名をデータ・ソース項目からクリアしてください (上記の

ステップ 3 を参照)。スクリプトを生成するときに、データ・ソースに接続できないことを示す警告が SQL ジェネレーターによって表示されますが、SQL スクリプトは生成されます。

ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成

ビューまたはマテリアライズ・ビューを作成するために実行するステップは、レポート・テーブルを作成するために実行するステップと異なります。ただし、どちらの場合も、Interact のビューまたはテーブルを生成する際に追加のステップがあります。

インストールに応じて、以下の 1 つ以上を行います。

必要に応じて、『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。

- 66 ページの『Campaign または eMessage 用のビューまたはマテリアライズ・ビューの作成』
- 66 ページの『Interact 用のビューまたはマテリアライズ・ビューの作成』
- 67 ページの『Campaign または eMessage のレポート・テーブルの作成とデータの設定』
- 68 ページの『Interact のレポート・テーブルの作成とデータ設定』

SQL スクリプトの名前および実行場所

この表は、(ビューまたは具体化されたビューの場合に) それぞれの SQL スクリプトの実行場所となるシステム・テーブル・データベースを示しています。これらのスクリプトは、以前のステップで SQL ジェネレーターを使って作成されたものです。

レポート・スキーマ	システム・テーブル	スクリプト名 (デフォルトの名前)
Campaign のすべてのレポート・スキーマ	Campaign システム・テーブル	`Campaign.sql`。ただし、各レポート・スキーマの個別のスクリプトを生成する場合を除きます。作成する場合、個々のスキーマに基づいてそれぞれのスクリプトに名前が付きます。例えば、キャンペーン・パフォーマンス・スキーマ用に生成される SQL ファイルのデフォルト名は **Camapign_CampaignPerformance.sql** です。
eMessage メール配信実績	eMessage トラッキング・テーブル	`eMessage_Mailing_ Performance.sql`
Interact 配置履歴、Interact パフォーマンス、および Interact ビュー	Campaign システム・テーブル	`Interact.sql`
Interact 学習	Interact 学習テーブル	`Interact_Learning.sql`
Interact ランタイム	Interact ランタイム・データベース	`Interact_Runtime.sql`

Campaign または eMessage 用のビューまたはマテリアライズ・ビューの作成

1. 事前に生成し、保存しておいた SQL スクリプトを見つけます。必要に応じて、65 ページの『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。
2. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージの適切なアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

   注: マテリアライズ・ビューを作成するスクリプトを DB2 データベースで実行する際、データベースによってエラー「SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません」が返される場合があります。 ただし、マテリアライズ・ビューは正常に作成されます。
3. **Campaign と DB2 データベースの場合のみ、**DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします (デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です)。以下のコマンドを使用します。

   ```
   db2 update db cfg for databasename using stmtheap 10240
   ```

   databasename は、Campaign データベースの名前です。

   ヒープ・サイズを増やすことで、レポート (収支サマリー・レポートなど) の実行時にユーザーがすべてのキャンペーンを選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

Interact 用のビューまたはマテリアライズ・ビューの作成

1. `lookup_create SQL` スクリプトの実行元のクライアントの言語設定が UTF-8 であることを確認します。

   Oracle および DB2 でこれを行う方法の例については、67 ページの『Oracle および DB2 での言語の設定』を参照してください。
2. 事前に生成し、保存しておいた SQL スクリプトを見つけます。必要に応じて、65 ページの『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージの適切なアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

   注: マテリアライズ・ビューを作成するスクリプトを DB2 データベースで実行する際、データベースによってエラー「SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません」が返される場合があります。 ただし、マテリアライズ・ビューは正常に作成されます。
4. レポート・パッケージ・インストール・ディレクトリーの `tools` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに適切な `lookup_create` スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトは `uari_lookup_create_MSSQL.sql` です。

   Interact 設計時データベースでこのスクリプトを実行します。使用するデータベース・ツールが変更をコミットすることを確認します。例えば、データベースの自動コミット・オプションを `true` に設定する必要が生じる場合があります。

5. Marketing Platform インストール・ディレクトリーの `db/calendar` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに適切な `ReportsCalendarPopulate` スクリプトを探します。このスクリプトにより、`UA_Calendar` と `UA_Time` という 2 つのテーブルがさらに作成されます。
6. Interact 実行時データベース (InteractRTDS) でこのスクリプトを実行します。

   DB2 の場合のみ、以下のいずれかを行います。

   - コマンド `db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql` を使って、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
   - あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合、「**ステートメント終了文字**」項目で終了文字を `@` 文字に変更します。

Oracle および DB2 での言語の設定:
Oracle の例

例えば、Windows と Oracle の場合、以下を行います。

1. 開いている Oracle セッションがあれば、すべて閉じます。
2. レジストリー・エディターを開きます。
3. 「HKEY_LOCAL_MACHINE」>「SOFTWARE」>「ORACLE」と移動し、Oracle ホームのフォルダーを開きます (例えば KEY_OraDb10g_home1)。
4. NLS_LANG 設定を検索します。
5. 指定されている値の最後の部分が UTF8 であることを確認します。例えば、AMERICAN_AMERICA.UTF8 です。

DB2 の例

例えば、DB2 の場合、スクリプトを実行する (かつ DB2 クライアントがインストールされている) マシンから、DB2 コマンド・ウィンドウを実行します。その後、以下のコマンドを実行します。

```
db2set
```

出力で、変数/値のペア `DB2CODEPAGE=1208` を探します。

この変数が設定されていない場合、以下のコマンドを実行します。

```
db2 db2set db2codepage=1208
```

その後、変更を有効にするために、セッション・ウィンドウを閉じます。

Campaign または eMessage のレポート・テーブルの作成とデータの設定

1. 新規レポート・データベースを作成します。
2. 事前に生成し、保存しておいた SQL スクリプトを見つけます。必要に応じて、65 ページの『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、生成スクリプトを新規データベースで実行します。

4. **Campaign および DB2 レポート・データベースの場合のみ、**DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします (デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です)。以下のコマンドを使用します。

   ```
   db2 update db cfg for databasename using stmtheap 10240
   ```

   databasename は、レポート・データベースの名前です。

   ヒープ・サイズを増やすことで、レポート (収支サマリー・レポートなど) の実行時にユーザーがすべてのキャンペーンを選択した場合でも、Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。
5. Marketing Platform インストールの `db/calendar` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに適切な `ReportsCalendarPopulate` スクリプトのバージョンを探します。このスクリプトにより、`UA_Calendar` と `UA_Time` という 2 つのテーブルがさらに作成されます。
6. テーブル作成スクリプトを使って作成した新規データベースで `ReportsCalendarPopulate` スクリプトを実行します。

   DB2 の場合のみ、以下のいずれかを行います。
   - コマンド `db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql` を使って、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
   - あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合、「**ステートメント終了文字**」項目で終了文字を `@` 文字に変更します。
7. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実動システム・データベースからの適切なデータを設定します。

   注: このステップでは、独自のツールを使用する必要があります。この SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

Interact のレポート・テーブルの作成とデータ設定

1. 新規レポート・データベースを作成します。
2. 事前に生成し、保存しておいた SQL スクリプトを見つけます。必要に応じて、65 ページの『SQL スクリプトの名前および実行場所』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、生成スクリプトを新規データベースで実行します。
4. Marketing Platform インストール・ディレクトリーの `db/calendar` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに適切な `lookup_create` スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトは `uari_lookup_create_MSSQL.sql` という名前です。

   Interact 設計時データベースを表すテーブルでこのスクリプトを実行します。使用するデータベース・ツールが変更をコミットすることを確認します。例えば、データベースの自動コミット・オプションを `true` に設定する必要が生じる場合があります。
5. Marketing Platform インストール・ディレクトリーの `db/calendar` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに適切な `ReportsCalendarPopulate` スクリプトを探します。このスクリプトにより、`UA_Calendar` と `UA_Time` という 2 つのテーブルがさらに作成されます。

6. Interact 設計時データベースを表すテーブルと Interact 実行時データベースを表すテーブルの**両方の**セットでこのスクリプトを実行します。

   DB2 の場合のみ、以下のいずれかを行います。

   - コマンド `db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql` を使って、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
   - あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合、「ステートメント終了文字」項目で終了文字を `@` 文字に変更します。
7. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実動システム・データベースからの適切なデータを設定します。

   注: このステップでは、独自のツールを使用する必要があります。この SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

テーブルおよびマテリアライズ・ビューのみのためのステップ: データ同期の設定

マテリアライズ・ビューまたはレポート・テーブルを作成した場合、データベース管理ツールを使用して、必ず IBM Unica Marketing アプリケーションの実動データベースとマテリアライズ・ビューの間のデータ同期を定期的にスケジュールしてください。

レポート・テーブルを作成した場合、スケジュールされた ETL (Extraction, Transformation and Load) または任意のカスタム・メソッドを使用して、必ず IBM Unica Marketing アプリケーションの実動データベースと新規のレポート・テーブルの間のデータ同期を定期的にスケジュールしてください。

IBM Cognos BI のインストールおよびテスト

IBM Unica との使用許諾契約書によって IBM Cognos BI ライセンスが付与されている場合、 IBM Cognos BI インストール・メディアを IBM Unica Customer Central Web サイトからダウンロードすることができます。

IBM Cognos BI、IBM Unica レポート、およびドメイン

開始する前に、IBM Cognos BI のインストール先が IBM Unica Marketing スイートと同じドメインかどうか判別します。ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos と IBM Unica Marketing システムを同じドメインにインストールすることが推奨されています。そうしない場合、SSL を使用するように IBM Cognos と IBM Unica Marketing の両方を構成する必要があります。

注: IBM Cognos BI をインストールした後、 Cognos Configuration を使用して Cognos URL を適切に構成してください。 Windows システムの場合、この URL のデフォルト値はマシン名「localhost」を使用します。「localhost」プレースホルダーを、ドメインを含む完全修飾ホスト名で置き換える必要があります。

IBM Cognos BI アプリケーション

IBM Cognos BI はいくつかのアプリケーション、サーバー、およびサービスから成る集合で、多層アーキテクチャーとして編成されています。 IBM Unica Marketing

スイートと共に IBM Cognos BI を使用する場合、以下に示す Cognos BI アプリケーションから成るサブセットを使用することになります。

- IBM Cognos BI Server。これは、レポートとフォルダー (クエリーとメタデータ・モデルを含む) のストレージ、Content Manager などを提供します。
- IBM Cognos Connection。これは、レポートのインポート、構成、スケジュールに使われる Web アプリケーションです。また、このアプリケーションでは、以下に示す追加のコンポーネントを利用することもできます。
  - Cognos Viewer: レポートの表示に使用します。Cognos Viewer は、IBM Unica Marketing アプリケーションでレポートを表示するモジュールです。
  - Report Authoring: レポートのカスタマイズと新規作成に使用します。IBM Unica から IBM Cognos BI を購入するとき、通常は 1 人のレポート作成者だけのライセンスが付与されます。
  - Cognos Administration: データ・ソースの構成などに使用します。
- IBM Cognos Framework Manager。このメタデータ・モデリング・ツールは、IBM Unica Marketing アプリケーション用の IBM Cognos BI レポートをサポートする Cognos データ・モデルを構成およびカスタマイズするために使われます。
- IBM Cognos Configuration。これは、個々の Cognos BI コンポーネントの構成に使われる構成ツールです。

IBM Cognos BI インストール・オプションおよび Cognos ドキュメント

IBM Cognos BI をインストールする前に、「*IBM Cognos BI アーキテクチャーと実装ガイド*」を使用して、 IBM Cognos によって推奨されている各種のコンポーネント、インストール・オプション、および構成アプローチについて学習してください。

IBM Cognos ドキュメントは、インストールを説明する 2 つの汎用カテゴリーを使用します。分散環境へのインストールと、1 台のコンピューターへの全コンポーネントのインストールの 2 つです。最良の結果を得るために、PoC (概念検証) 用またはデモンストレーション環境でない限り、全コンポーネントを 1 台のコンピューターにインストールすることはしないでください。

IBM Unica レポートが使用する IBM Cognos BI アプリケーションのサブセットのインストールでは、2 つの IBM Cognos インストーラーを使用する必要があります。その 1 つは、IBM Cognos BI サーバー、Content Manager、Cognos Configuration、および Web ベースのユーザー・インターフェースを提供します。もう 1 つのインストーラーは、Framework Manager、メタデータ・モデリング・ツールをインストールするために使用します。これは Windows マシンにインストールする必要があるからです。

全コンポーネントを 1 台のコンピューターにインストールする場合、「*IBM Cognos Quick Start Installation and Configuration Guide*」を使用することができます。分散環境にインストールする場合、フルインストール・ガイド「*IBM Cognos BI インストールおよび設定ガイド*」を使用してください。

IBM Cognos BI Web アプリケーションおよび Web サーバー

IBM Unica は、Cognos Connection および他の IBM Cognos BI Web アプリケーションをホストする Web サーバーを提供していません。 Windows の場合、IBM Cognos ドキュメントでは Microsoft IIS (Internet Information Services) を使用していることを前提とします。ただし、Apache HTTP も使用できます。

Apache HTTP サーバーを使用する場合、Apache `httpd.conf` ファイルの `VirtualHost` 構成ディレクティブで Cognos Web アプリケーションの Web 別名を正しく設定してください。最も固有性の高い別名 (スクリプト別名) を最初に配列し、各別名に対してディレクトリー権限を設定します。

httpd.conf コード・スニペットの例

以下の例は、Windows システムの Apache インストールのものです。 Apache サーバーは、デフォルト・ポート 80 で稼働しています。

```
<VirtualHost *:80>
 ScriptAlias /cognos10/cgi-bin "C:/cognos/cgi-bin"
      <Directory "C:/cognos/cgi-bin">
        Order allow,deny
        Allow from all
      </Directory>
Alias /cognos10 "C:/cognos/webcontent"
      <Directory "C:/cognos/webcontent">
        Order allow,deny
        Allow from all
      </Directory>
</VirtualHost>
```

注: この `httpd.conf` ファイル・スニペットは、単なる例です。ご使用のシステムに応じて Web 別名を構成してください。

IBM Cognos BI およびロケール

IBM Unica Marketing アプリケーション・レポート・パッケージのローカライズ・バージョン (英語以外) をインストールする計画の場合、アプリケーション・レポート・パッケージの言語と一致するように製品ロケールを設定してください。

Cognos Content Manager を実行するシステムでは、 Configuration Manager を開き、「**操作**」>「**グローバル設定を編集**」を選択し、 IBM Cognos BI システムのロケールを構成します。詳しくは、「*IBM Cognos Configuration ユーザー・ガイド*」を参照してください。これは Configuration Manager の「ヘルプ」メニューから入手できます。

IBM Cognos BI インストールのテスト

以下のガイドラインを使用して、IBM Cognos インストールをテストします。

- Cognos BI サーバーを停止してから再始動し、エラーがないかどうか `cogserver.log` ファイルを調べます。このファイルは Cognos インストールの `logs` ディレクトリーにあります。
- データベース・テーブルが Cognos Content Store に存在することを確認します。約 134 個のテーブルが存在します。

分散 Cognos 環境を持ち、コンポーネントがそれぞれ異なるマシンにインストールされている場合 (例えば、Cognos BI サーバーは UNIX システムにあり、Framework Manager は Windows マシンにインストールされている)、以下を行います。

- Gateway がインストールされているマシンから内部ディスパッチャーおよび外部ディスパッチャー、および Content Manager と通信できることを確認します。ユーザー・インターフェースを持たないコンポーネントをテストするには、コンポーネントの URI をブラウザーのアドレス・フィールドに入力します。 Cognos ページがブラウザーに表示されます。
- Framework Manager を開き、プロジェクトの作成を開始します。このテストにより、ログインできることを確認します。エラーがないかどうか再びログ・ファイルを確認してください。

Cognos システムへの IBM Unica Marketing 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール

IBM Unica Marketing スイートを Cognos に統合するには、以下のインストーラーが必要です。

- IBM Unica Marketing マスター・インストーラー。他のインストーラーを起動するには、常にこのインストーラーを実行します。
- Marketing Platform インストーラー。Cognos 統合コンポーネントは、このインストーラーからインストールします。
- レポート・パック・インストーラーまたはレポートを実装する製品のインストーラー。モデルおよびサンプル・レポートを含むレポート・アーカイブは、このインストーラーからインストールします。

インストールを実行した後、このセクションの残りの部分の説明に従って、以下の構成ステップを実行します。

- IBM Unica Marketing および Cognos レポート・プロパティーを Marketing Platform インターフェースで構成します。
- レポートを Cognos Connection にインポートします。
- IBM Unica Marketing 認証を使用するように Cognos を構成します。

インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統合

IBM Unica コンポーネントおよびレポートを IBM Cognos システムにインストールして構成する方法に関する概要が以下のリストに示されています。それぞれの手順は、このセクションの後の部分で詳しく説明されています。

1. 73 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手』
2. 73 ページの『ステップ: IBM Cognos システムでのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール』
3. 74 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成』
4. 75 ページの『オプションのステップ: 電子メール通知の設定』

5. 76 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』
6. 76 ページの『ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート』
7. 77 ページの『ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)』
8. 78 ページの『ステップ: レポートの内部リンクの有効化』
9. 79 ページの『ステップ: データ・ソース名の確認と公開』
10. 79 ページの『ステップ: Marketing Platform 内の Cognos レポート・プロパティーを構成する』
11. 80 ページの『ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト』
12. 81 ページの『IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』
13. 85 ページの『ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト』

ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手

IBM Unica Marketing システムをセットアップしたときに Marketing Platform のシステム・テーブルの JDBC データ・ソースの構成に使用した JDBC ドライバーおよび必要な関連ファイルを入手します。この章で後述するタスクで、IBM Unica Marketing 認証を使用するように Cognos を構成します。 IBM Unica Marketing 認証を使用する際、Cognos は Marketing Platform システム・テーブルからユーザー情報を入手するために JDBC ドライバーを必要とします。

Cognos Content Manager がインストールされているマシンの Cognos インストールの下の `webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥lib` ディレクトリーに JDBC ドライバーをコピーします。

ステップ: IBM Cognos システムでのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール

分散した Cognos インストール済み環境の場合、どのマシンで Cognos Content Manager が実行されているかを判別してください。このマシン上で IBM Unica インストーラーを実行できます。

1. IBM Cognos サービスを停止します。
2. Cognos Content Manager がインストールされているマシンで、以下のすべての IBM Unica インストーラーを単一のディレクトリーに入れます。
   - IBM Unica マスター・インストーラー
   - Marketing Platform
   - レポート作成機能を実装する対象となる製品のレポート・パック・インストーラー
3. IBM Unica マスター・インストーラーを実行して、Marketing Platform およびインストール対象のレポート・パッケージを選択します。
4. プロンプトに従い、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの接続情報を入力します。

5. Marketing Platform インストーラーが起動して「**プラットフォーム・インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)**」ウィンドウが表示されたら、「**Reports for IBM *version* Cognos BI**」オプションを選択して、その他のオプションをクリアします。
6. Marketing Platform インストーラーで JDBC ドライバーのパスを尋ねるプロンプトが出されたら、 73 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手』のタスクで Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの絶対パスを入力します。
7. Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストールの場所を尋ねるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール・ディレクトリーの最上位を入力するか、参照します。このフィールドで提供されるデフォルト値は、IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づくことのない静的な値です。
8. レポート・パック・インストーラーでインストール・オプションが表示された場合、「***Product* 用の IBM Cognos パッケージ**」を選択して、レポート・スキーマに関するオプションをクリアします。

   このオプションは、レポート・アーカイブを Cognos マシンにコピーします。このアーカイブは、後でインポートします。
9. IBM Cognos サーバーを再始動します。

ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成

IBM Cognos アプリケーションには、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースを識別する独自のデータ・ソース、つまりレポート用のデータのソースが必要です。 IBM Unica Marketing レポート・パッケージで提供されている IBM Cognos データ・モデルは、以下のデータ・ソース名を使用するように構成されています。

表 5. Cognos データ・ソース

IBM Unica Marketing アプリケーション	**Cognos データ・ソース名**
Campaign	CampaignDS
eMessage	eMessageTrackDS
Interact	InteractDTDS (設計時データベース用) InteractRTDS (実行時データベース用) InteractLearningDS (学習データベース用)
Marketing Operations	MarketingOperationsDS
Leads	LeadsDS (データマート・テーブル用)

以下のガイドラインを使用して、IBM アプリケーション・データベースの Cognos データ・ソースを作成します。

- Cognos Connection の「管理」セクションを使用します。

- Cognos データ・ソースの表に示されているデフォルトのデータ・ソース名を使用します。これにより、データ・モデルを変更しなくてもよいようにすることができます。
- 選択するデータベース・タイプは、IBM アプリケーション・データベースのタイプと一致する必要があります。 Cognos ドキュメントおよびヘルプ・トピックを使用して、データベース固有の項目に入力する方法を判別します。
- Cognos Content Store ではなく、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースを識別します。
- 「**サインオン**」セクションを構成する際、「**パスワード**」および「**すべてのユーザー・グループで使用できるサインオンを作成**」オプションを選択します。
- 「**サインオン**」セクションで、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース・ユーザーのユーザー資格情報を指定します。
- Cognos データ・ソースの表を参照し、構成するレポートのデータ・モデルに必要なすべてのデータ・ソースを作成します。例えば、Interact のレポート・データは 3 つのデータベースにあるため、それぞれのために別々の Cognos データ・ソースを作成する必要があります。
- Campaign システムに複数のパーティションがある場合、各パーティションに別々のデータ・ソースを作成します。例えば、Campaign が複数パーティションに対して構成されている場合、それぞれのパーティション用に別々の Campaign データ・ソースを作成します。
- 「**テスト接続**」機能を使用して、各データ・ソースが正しく構成されていることを確認します。

Cognos データ・ソースの構成に関して質問がある場合、「*IBM Cognos 管理およびセキュリティー・ガイド*」の『第 6 章: データ・ソースと接続』および Cognos オンライン・ヘルプを参照してください。

オプションのステップ: 電子メール通知の設定

IBM Cognos レポートが IBM Unica Marketing インターフェースに表示される際、ウィンドウの Cognos Viewer ツールバーに、レポートを電子メールの添付ファイルとして送信するオプションが含まれています。 IBM Cognos が IBM Unica Marketing レポートを電子メールの添付ファイルとして送信できるようにするには、Cognos Configuration で通知を構成してください。

以下のガイドラインを使用して、IBM Unica Marketing アプリケーション・レポートの電子メール通知を設定します。

- Cognos Configuration で、「**データ・アクセス**」>「**通知**」を選択します。
- **host:port** または **IPAddress:port** の形式でホスト名または IP アドレスとポートを使用して SMTP メール・サーバーを指定します。例えば、serverX:25 または 192.168.1.101:25 のように指定します (通常、デフォルトの SMTP ポートは 25 です)。
- アカウントのユーザー名とパスワードを設定するには、「**値**」列をクリックし、鉛筆アイコンをクリックして「**値**」ダイアログ・ボックスを開きます。
- パターン `user@company.com` を使用してデフォルトの送信者を指定します。

電子メール通知の構成に関して何か質問がある場合は、Cognos Connection オンライン・ヘルプを参照してください。

注: ユーザーが電子メールオプションを Cognos Viewer ツールバーから選択するときに表示される電子メールのフォームには、レポートにリンクを挿入するオプションが含まれています。 IBM Cognos ライセンスを IBM Unica Marketing から取得する際には、このオプションはサポートされません。ユーザーはレポートを電子メールの添付ファイルとしてのみ送信できます。

ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成

IBM Cognos ファイアウォールを構成するには、IBM Unica Marketing システムを有効なドメインまたはホストとして指定し、検証を無効にします。

1. Cognos Configuration で、「**セキュリティー**」>「**IBM Cognos Application Firewall**」を選択します。
2. 「**CAF 検証を有効化**」を `false` に設定します。
3. 有効なドメインまたはホストのプロパティーに、Marketing Platform を実行しているシステムの完全修飾マシン・ホスト名 (ドメインおよびポートを含む) を入力します。

   重要: 分散 IBM Unica Marketing 環境を持っている場合、Cognos レポートをレンダリングする IBM Unica Marketing 製品がインストールされているすべてのマシンでこれを行う必要があります (例えば、ダッシュボードを持つ Marketing Platform や Campaign、および Marketing Operations)。

   以下に例を示します。

   ```
   serverXYZ.mycompany.com:7001
   ```
4. 構成を保存します。
5. IBM Cognos サービスを再開します。

ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート

IBM Unica Marketing アプリケーション・レポートは、レポート・パッケージ・インストーラーが IBM Cognos マシンにコピーした圧縮 (.zip) ファイルにあります。この手順のガイドラインを使用して、レポートの圧縮ファイルを Cognos Connection にインポートします。

1. IBM Cognos マシンのレポート・パッケージ・インストールの下の `Cognos`*nn* ディレクトリーに移動します。*nn* は、バージョン番号を示します。
2. 圧縮レポート・アーカイブ・ファイル (例えば `IBM Unica Marketing Reports for Campaign.zip`) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。分散 IBM Cognos 環境の場合、これは Content Manager を実行しているシステム上の場所です。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストールの下のデプロイメント・ディレクトリーです。Cognos Content Manager とともにインストールされる Cognos 構成ツールでこの場所が指定されています。例えば、`cognos¥deployment` です。

3. Cognos マシンのレポート・パッケージ・インストールの下の `Cognos`*nn*`¥ProductNameModel` サブディレクトリーを見つけます。
4. Cognos Framework Manager が実行されているシステム上の、Framework Manager がアクセスできる任意の場所にサブディレクトリー全体をコピーします。
5. Cognos Connection を開きます。
6. 「**ようこそ**」ページから、「**Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)**」をクリックします。

   「**ウェルカム**」ページがオフになっている場合、Cognos Connection ユーザー設定で再びオンにします。
7. 「**設定**」タブをクリックします。
8. 「**コンテンツの管理**」を選択します。
9. ツールバーの (「**インポートの新規作成**」) をクリックします。
10. 「**インポートの新規作成ウィザード**」をステップスルーする際に、以下のガイドラインに従います。
    a. 前の手順でコピーしたレポート・アーカイブを選択します。
    b. 共有フォルダーの内容リストで、パッケージそのもの (青のフォルダー) を含む、**すべての**オプションを選択します。
    c. ユーザーがパッケージとそのエントリーにまだアクセスしないようにする場合、「**インポート後に無効化**」を選択します。レポートを IBM Unica Marketing アプリケーション・ユーザーが使用できるようにする前にそのレポートをテストする場合にこの選択を行います。

ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)

74 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成』で、 IBM Unica Marketing システム・テーブルを Cognos データ・ソースとして設定しました。使用したデータ・ソース・ログインが IBM Unica Marketing アプリケーション・システム・テーブルの所有者でない場合、ここで説明するステップを実行します。使用したデータ・ソース・ログインが IBM Unica Marketing アプリケーション・システム・テーブルを**所有している**場合は、このステップをスキップすることができます。

1. レポート・パッケージ・インストールの下の `Model` ディレクトリーを見つけます。この `Model` ディレクトリーのすべてのファイルを、Cognos Framework Manager インストール・ディレクトリーの下の任意の場所にコピーします。これらのファイルは、アプリケーション固有のデータ・モデルを構成します。
2. Framework Manager で、プロジェクト・ファイルを開きます。プロジェクト・ファイルは拡張子が `.cpf` で、ファイル名には IBM Unica Marketingアプリケーション名が含まれます (例えば *ProductName*`Model.cpf`)。
3. アプリケーションのデータ・モデルを開き、以下を行います。

a. プロジェクト・ビューアーで、「**データ・ソース**」を展開します。
b. アプリケーションのデータ・ソースをクリックします。
c. 以下の表の説明に従ってデータ・ソースを更新します。

データベース	項目
SQL Server	• カタログ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの名前を入力します。 • スキーマ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。例えば、`dbo` です。
Oracle	• スキーマ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。
DB2	• スキーマ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。

4. パッケージを保存して再公開します。

   IBM Cognos のパッケージの公開に関する基本的な指示が必要な場合は、「*Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド*」を参照してください。

ステップ: レポートの内部リンクの有効化

IBM Unica Marketing アプリケーション・レポートには、標準リンクがあります。これらのリンクが適切に機能できるようにするには、 76 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』 の説明に従って Cognos ファイアウォールを構成する必要があります。さらに、以下のようにして、IBM Unica Marketing アプリケーション・レポートの Cognos データ・モデル (.cpf ファイル) のリダイレクト URL を構成する必要があります。

1. Cognos Framework Manager から、Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした `<productName>Model` サブディレクトリーを参照し、.cpf ファイルを選択します。例えば、`CampaignModel.cpf` です。
2. 「**パラメーター・マップ**」>「**環境**」を選択します。
3. 「**環境**」を右クリックし、「**定義を編集**」を選択します。
4. 「**リダイレクト URL**」セクションで、「**値**」項目を選択します。サーバー名とポート番号を、IBM Unica Marketing システムに適合するように編集し、それ以外の URL はそのまま残します。規則により、ホスト名にはドメイン名が含まれます。

   例えば、Campaign の場合:

   ```
   http://serverX.ABCompany.com:7001/Campaign/
   redirectToSummary.do?external=true&
   ```

   例えば、Marketing Operations の場合:

   ```
   http://serverX.ABCompany.com:7001/plan/callback.jsp?
   ```

5. モデルを保存し、パッケージを公開します。
   a. ナビゲーション・ツリーから、モデルの「**パッケージ**」ノードを展開します。

b. パッケージ・インスタンスを右クリックし、「**パッケージを発行**」を選択します。

ステップ: データ・ソース名の確認と公開

モデルを Framework Manager から Cognos Content Store に公開する際、モデルでレポートのデータ・ソースとして指定する名前は、Cognos Connection で作成したデータ・ソースの名前と一致する必要があります。 74 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成』の説明に従ってデフォルトのデータ・ソース名を使用した場合、データ・ソース名は一致します。一致しない場合、モデルのデータ・ソースの名前を変更する必要があります。

1. Cognos Connection で、作成したデータ・ソースの名前を判別します。
2. Framework Manager で、「**プロジェクトを開く**」オプションを選択します。
3. Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした `<productName>Model` サブディレクトリーを参照し、.cpf ファイルを選択します。例えば、`CampaignModel.cpf` です。
4. 「**データ・ソース**」エントリーを展開し、データ・ソースの名前を調べます。その名前が、Cognos Connection で指定した名前と一致することを確認します。
   a. 一致する場合、この手順で終了です。
   b. 一致しない場合、データ・ソース・インスタンスを選択し、「**プロパティー**」セクションで名前を編集します。変更内容を保存します。
5. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

ステップ: Marketing Platform 内の Cognos レポート・プロパティーを構成する

IBM Unica Marketing でのレポート作成を構成するいくつかのプロパティー・セットがあります。その中には、Marketing Platform のレポート作成コンポーネントのパラメーター値を指定するものがあります。これらのプロパティーは、 63 ページの『ステップ: ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成』の説明に従って、これまでに既に設定しました。

その他に、IBM Cognos システムの URL やその他のシステム・パラメーターを指定するプロパティーがあります。この手順では、これらの Cognos プロパティーの設定方法を説明します。

1. platform_admin ユーザー、または ReportsSystem の役割を持つ別のユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
2. 「**設定**」>「**構成**」>「**レポート**」>「**統合**」>「**Cognos *version***」を選択します
3. 「**有効**」プロパティーの値を `True` に設定します。
4. 「**ドメイン**」プロパティーの値を、IBM Cognos システムが実行されている企業ドメインの名前に設定します。

   例: `xyzCompany.com`

   会社でサブドメインを使用している場合、企業ドメインおよびサブドメインをこのフィールドの値に含める必要があります。

5. 「**ポータル URL**」プロパティーの値を、Cognos Connection ポータルの URL に設定します。 (「**ドメイン**」プロパティーで指定した) ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。

   例: `http://MyCognosServer.xyzCompany.com/cognos10/cgi-bin/cognos.cgi`

   この URL は Cognos 構成ユーティリティーの「**ローカル構成**」>「**環境**」の下で示されます。
6. 「**ディスパッチ URL**」フィールドで、1 次 Cognos Content Manager ディスパッチャーの URL を指定します。 (「**ドメイン**」プロパティーで指定した) ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。

   例: `http://MyCognosServer.xyzCompany.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

   この URL は Cognos 構成ユーティリティーの「**ローカル構成**」>「**環境**」の下で示されます。
7. 現時点では、「**認証モード**」の設定を `anonymous` のままにします。
8. 設定を保存します。

ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト

レポートがインストールおよび構成された後で、認証を有効にする前に、いくつかのレポートを実行することによって設定をテストします。

1. IBM Unica Marketing が実行されていること、および IBM Cognos BI サービスが実行されていることを確認します。
2. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM Unica Marketing にログインし、いくつかのデータを作成します (そうしないと、レポートに何も表示されません)。
3. Cognos Connection を開きます。
4. インポートしたレポート・フォルダーに移動し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「**共有フォルダー**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン・サマリー**」を選択します。

   レポートが失敗する場合、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース用の Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 74 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。
5. レポートのリンクをクリックします。

   レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 78 ページの『ステップ: レポートの内部リンクの有効化』を参照してください。
6. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM Unica Marketing アプリケーションにログインし、「**分析**」ページに移動します。

   IBM Unica Marketing アプリケーションで URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。以下に例を示します。

`http://serverX.ABCompany.com:7001/unica`

7. Cognos でテストとしたものと同じレポートへのリンクをクリックします。

   レポートを表示できない場合、IBM Cognos ファイアウォールが正しく構成されていない可能性があります。 76 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』を参照してください。

8. レポートのリンクをクリックします。

   レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 78 ページの『ステップ: レポートの内部リンクの有効化』を参照してください。

9. 個々のアイテムを開き、「**分析**」タブをクリックし、レポートが正しいことを確認します。

IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成する

IBM Unica Marketing Authentication Provider は、Cognos アプリケーションがスイート内の別の IBM Unica Marketing アプリケーションであるかのように IBM Unica Marketing 認証を使用して IBM Unica Marketing システムと通信できるようにします。

このセクションの手順を開始する前に、構成する予定の認証モード (「認証済み (authenticated)」または「ユーザーごとに認証 (authenticated per user)」) を知っていることを確認してください。詳しくは、 61 ページの『ステップ: 構成する認証モードの判別』を参照してください。

ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する

注: 認証モードを「authenticatedPerUser」に設定する場合は、この手順をスキップして、 82 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing での Cognos 認証プロパティーの構成』に進んでください。

レポート・システム・ユーザーを作成するときには、ユーザーを作成して、IBM Cognos BI のログイン情報を保持するユーザーにデータ・ソース資格情報を追加します。この方法で、同じユーザーに対して 2 つのログイン・セットを次のように構成します。

- IBM Unica システム用に 1 つ: レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) 用に指定されたユーザー名とパスワード
- IBM Cognos BI 用に 1 つ: レポート・システム・ユーザーのデータ・ソース資格情報として指定されたユーザー名とパスワード

1. platform_admin ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
2. 「**設定**」>「**ユーザー**」を選択します。
3. 以下の属性を持つ IBM Unica ユーザーを作成します。
   a. ユーザー名: `cognos_admin`
   b. パスワード: `admin`
4. 以下の属性を使って、ユーザー用の新規データ・ソースを作成します。

a. データ・ソース: `Cognos`
b. データ・ソース・ログオン: `cognos_admin`

   データ・ソースのユーザー名が、ステップ 3 で作成した IBM Unica ユーザーの名前と正確に一致するようにしてください。

c. データ・ソース・パスワード: `admin`

5. ReportsSystem の役割をユーザーに追加します。
6. IBM Unica Marketing でユーザー・パスワードの有効期限切れが構成されている場合、ログアウトし、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) として再びログインします。この手順により、IBM Unica セキュリティーの「パスワード変更」要求と対話することができ、以降のタスクでこのユーザーとして IBM Cognos にログインする前に、パスワードを再設定できます。

ステップ: IBM Unica Marketing での Cognos 認証プロパティーの構成

1. platform_admin ユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
2. 「**設定**」>「**構成**」を選択します。
3. 「**レポート**」>「**統合**」>「**Cognos *version***」を展開します。
4. 実際のシステムに応じて **authenticated** または **authenticatedPerUser** を適切に選択することにより、「**認証モード**」プロパティーの値を設定します。
5. 「**authenticated**」**の場合のみ。**「**認証ユーザー名**」および「**認証データ・ソース名**」フィールドの値が、以前のタスク (81 ページの『ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する』) で作成したユーザーおよびデータ・ソースに一致することを確認します。
6. 「**フォーム認証を有効にする**」プロパティーの値を設定します。

   この設定値は、Cookie の代わりにフォームに基づく認証を IBM Unica Marketing セキュリティーで使用することを示します。以下のいずれかが当てはまる場合は、このプロパティーを `True` に設定します。

   - IBM Unica Marketing が、Cognos アプリケーションと同じネットワーク・ドメインにインストールされていない場合。
   - Cognos が、完全修飾ホスト名 (IBM Unica Marketing アプリケーションへのアクセスに使用されています) ではなくて、IP アドレス (同じネットワーク・ドメイン内) を使用してアクセスされる場合。これは、IBM Unica Marketing アプリケーションと Cognos インストール済み環境の両方が同じマシン上に存在する場合も該当します。

   ただし、値が `True` の場合、Cognos Connection へのログイン・プロセスでログイン名とパスワードが平文で渡されるため、Cognos と IBM Unica Marketing が SSL 通信を使用するように構成されていないと、安全ではありません。

   SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、Cognos と IBM Unica Marketing は同じネットワーク・ドメインにインストールしてください。

なお、「**フォーム認証を有効にする**」プロパティーを `True` に設定した場合は、「**認証モード**」プロパティーが自動的に、「**authenticated**」に設定されているように動作する点に注意してください。それで、 81 ページの『ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する』に説明されている、このモードに必要なステップを実行する必要があります。

7. 新しい設定を保存します。
8. 「**authenticatedPeruser**」**の場合のみ**。デフォルト asm_admin ユーザーに ReportUser ロールを割り当てます。レポートのテストを可能にするために、このステップを実行します (IBM Unica Marketing アプリケーションとレポート・データの両方にアクセスできるユーザーが必要です)。 platform_admin ユーザーは IBM Unica Marketing アプリケーション機能へのアクセス権限を持っていません。

ステップ: IBM Unica Marketing Authentication Provider を使用するよう IBM Cognos を構成する

このタスクでは、IBM Unica Marketing Authentication Provider を使用するよう IBM Cognos BI アプリケーションを構成するために、Cognos Configuration および Cognos Connection アプリケーションを使用します。

1. Cognos Content Manager を実行しているマシン上で Cognos Configuration を開きます
2. 「**ローカル構成**」>「**セキュリティー**」>「**認証**」を選択します。
3. 「**認証**」を右クリックして、「**リソースの新規作成**」>「**ネームスペース**」を選択します。
4. 以下のようにフィールドを入力して、「OK」をクリックします。
   a. **名前**: `Unica`
   b. **タイプ**: カスタム `Java` プロバイダー
5. 「**リソース・プロパティー (Resource Properties)**」ページで、以下のようにフィールドを入力して変更内容を保存します。
   a. **ネームスペース ID**: `Unica`
   b. **Java クラス名**: `com.unica.report.adapter.UnicaAuthenticationProvider`
6. IBM Cognos BI サービスを停止して再始動します。

   Windows システムでは、サービスが停止していないにもかかわらず、Cognos インターフェースで「停止」と示されることがあります。サービスを確実に停止済みにするには、Windows 管理ツールを使ってサービスを停止してください。
7. 「**ローカル構成**」>「**セキュリティー**」>「**認証**」の下で、「**Unica**」を右クリックして「**テスト**」を選択します。

   Cognos Connection でエラーが表示される場合、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある `cogserver.log` ファイルを調べて、問題を判別してください。
8. IBM Unica Marketing 認証プロバイダーが正しく構成されていることを検査するために、以下のように Cognos Connection にログインします。

- IBM Unica Marketing 構成プロパティーで Cognos 認証モードを「**authenticated**」に設定した場合、cognos_admin (レポート・システム) ユーザーとしてログインします。
- IBM Unica Marketing 構成プロパティーで認証モードを「**authenticatedPerUser**」に設定した場合、asm_admin ユーザーとしてログインします。

「リカバリー不能な例外がサード・パーティー・プロバイダーから戻されました (The 3rd party provider returned an unrecoverable exception)」というエラーが IBM Cognos で表示された場合、エラー・メッセージを展開します。「無効な資格情報 (invalid credentials)」と示されている場合は、ユーザー資格情報の入力が間違っていることを示します。再試行してください。一方、「パスワード期限切れ (password expired)」と示されている場合は、IBM Unica Marketing でパスワードの有効期限が切れています。レポート作成システム・ユーザーとして IBM Unica Marketing アプリケーションにログインし、パスワードを再設定してください。その後、Cognos Connection へのログインを再試行します。

依然として Cognos Connection にログインできない場合は、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある `cogserver.log` ファイルを調べて、問題を判別してください。

9. Cognos Connection に正常にログインできたら、Cognos Configuration を再び開きます。
10. 「**ローカル構成**」>「**セキュリティー**」>「**認証**」>「**Cognos**」を選択します。
11. 「**匿名アクセスを許可しますか? (Allow anonymous access?)**」を `false` に設定して、IBM Cognos BI への匿名アクセスを無効にします。
12. 変更内容を保存します。
13. IBM Cognos サービスを停止して、再始動します。

    認証プロバイダーと正常に通信できない場合、IBM Cognos サービスは始動できません。 IBM Cognos サービスの始動が失敗した場合、この手順のステップを再び調べて、構成を確認してください。
14. **分散システムの場合のみ。** IBM Cognos システムでフェイルオーバー・サポート用にバックアップ Content Manager が構成されている場合、Content Manager がインストールされているすべてのサーバーでこの手順を繰り返します。

この時点で、Cognos システム上のアプリケーションにログインするすべてのユーザーは IBM Unica Marketing によって認証される必要があります。さらに、ログオンおよびセキュリティー管理タスク用の IBM Cognos ユーザー・インターフェースに認証ネームスペース **Unica** が表示されるようになります。

IBM Unica Marketing Platform が LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合される場合に必要な構成

IBM Unica Marketing Platform が LDAP サーバー、Windows Active Directory (Windows 統合ログイン)、または Tivoli® や SiteMinder などの Web アクセス制御システムと統合される場合は、以下に示す追加の構成を実行する必要があります。

1. Cognos Configuration で、Unica 認証ネームスペースについて、フラグ「**認証で選択可能**」を「**false**」に設定します。

   このフラグを「**false**」に設定すると、Cognos Connection と Cognos Administration は、認証の目的で Unica 名前空間にアクセスできません。しかし、IBM Unica Marketing アプリケーションは、引き続き Cognos SDK API を介して Unica 名前空間にアクセスできます (ユーザーが IBM Unica Marketing アプリケーション内から Cognos レポートを表示する場合など)。
2. Cognos URL への認証アクセスが必要な場合は、以下を実行します。
   a. Cognos Configuration で、バンドルされた適切な認証プロバイダーを使用して、ネームスペースを構成します。
   b. 「**認証で選択可能 (Selectable for authentication)**」を「**true**」に設定します。
   c. この新規名前空間を Cognos URL 用に使用します。

ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト

IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成した後、システムを再びテストします。

1. IBM Unica Marketing が実行されていること、および IBM Cognos サービスが実行されていることを確認します。
2. Cognos Connection を開きます。
3. インポートしたレポート・フォルダーに移動し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「**共有フォルダー**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン・サマリー**」を選択します。

   レポートが失敗する場合、IBM Unica Marketing アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 74 ページの『ステップ: IBM Unica Marketing アプリケーション・データベースの IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。
4. レポートのリンクをクリックします。

   レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 78 ページの『ステップ: レポートの内部リンクの有効化』を参照してください。
5. IBM Unica Marketing にログインし、「**分析**」ページに移動します。

   IBM Unica Marketing アプリケーションで URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。以下に例を示します。

   ```
   http://serverX.ABCompany.com:7001/unica
   ```
6. IBM Cognos でテストとしたものと同じレポートへのリンクをクリックします。

   セキュリティーに関するエラー・メッセージが表示される場合、 IBM Unica Marketing Authentication Provider が正しく構成されていない可能性があります。 81 ページの『IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』を参照してください。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、URL のいずれかでドメイン名が欠落している可能性があります。管理権限を持つユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。その後、「**設定**」>「**構成**」を選択し、以下のプロパティーの URL に、ドメイン名、および存在する場合は適切なサブドメイン名が含まれていることを確認します。

- 「**レポート**」>「**統合**」>「**Cognos**」>「**ポータル URL**」および「**ディスパッチ URL**」
- IBM Unica Marketing アプリケーションの URL プロパティー (例えば 「**キャンペーン**」>「**ナビゲーション**」>「**サーバー URL**」)

7. レポートのリンクをクリックします。

   認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、URL のいずれかでドメイン名が欠落している可能性があります。

8. 個々のアイテムを開き、「**分析**」タブをクリックし、レポートが正しいことを確認します。

   セキュリティーに関するエラー・メッセージが表示される場合、 IBM Unica Marketing Authentication Provider が正しく構成されていない可能性があります。

レポートの次のステップ

この時点では、レポートは適切に機能しており、サンプル・レポートはデフォルトの状態にあります。 IBM Unica Marketing アプリケーションの実際のデータ設計 (キャンペーン・コード、カスタム・キャンペーン属性、レスポンス・メトリックなど) の構成が終了したら、レポートまたはレポート・スキーマをカスタマイズする必要があるので、レポートに戻ります。

- Campaign または Interact を使用する場合、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」の『レポートの構成』を参照してください。
- Marketing Operations を使用する場合、「*IBM Unica Marketing Operations 管理者ガイド*」の『レポートの使用』を参照してください。
- eMessage のレポートを設定している場合、レポートの構成は完了です。eMessage レポート・スキーマまたはレポートをカスタマイズすることはできません。
- 「ユーザーごとに認証」モードを使用するようにシステムを構成した場合は、該当する IBM Unica Marketing ユーザーがIBM Unica Marketing アプリケーションからレポートを実行できるようにしてください。これを行う最も簡単な方法は、『レポート・フォルダー権限を構成するには』の説明に従って、デフォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当てることです。

レポート・フォルダー権限を構成するには

「**レポート**」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー) の「**レポート**」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限を、それが物理的に保管される IBM Cognos システム上のフォルダー構造に基づいて構成することができます。

1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。

2. 「**設定**」>「**レポート・フォルダー権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)**」と選択します。

   システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフォルダーの名前を取得します。 (これは、いずれかのパーティションのフォルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構成する必要があることを意味します。)
3. 「**設定**」>「**ユーザー権限**」>「**キャンペーン**」と選択します。
4. 「**キャンペーン**」ノードの下の最初のパーティションを選択します。
5. 「**役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)**」を選択します。
6. 「**保存と権限の編集 (Save and Edit Permissions)**」を選択します。
7. 「**権限**」フォームで、「**レポート**」を展開します。

   「レポート」エントリーは、「**レポート・フォルダー権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)**」オプションの初回実行後に表示されます。
8. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
9. パーティションごとに、ステップ 4 から 8 を繰り返します。

第 9 章 レポートのアップグレード

IBM Unica Marketing バージョン 8.x では、レポートは Marketing Platform が提供するコンポーネントの 1 つです。つまり、IBM Unica Marketing レポートは現在、Affinium Reports 7.5.x の場合のように別個の Web アプリケーションとしては提供されるものではなくなりました。

Marketing Platform バージョン 8.x にアップグレードする際、インストーラーおよびデータベース・スクリプトによってレポート機能のアップグレードも行われます。その際、Campaign および Interact レポート・スキーマの構成設定は保持されます。この章では、その他のレポート・コンポーネントのアップグレードおよび構成方法について説明します。

バージョン 7.5.1 からのアップグレードについて

レポート・パッケージから IBM Cognos レポートのアーカイブをインストールする際、Cognos データ・モデルに対するカスタマイズを保持するアップグレード・スクリプトを実行しますが、7.5.1 レポートを新規レポートで置き換える必要があります。古いレポートの大多数は、アップグレードされた Cognos モデルと互換性がありますが、8.x レポート・パッケージには新規および拡張レポートが含まれています。また、ほとんどのパッケージにはダッシュボード・レポートも含まれています。新規または拡張レポートを取得する唯一の方法は 8.x レポート・アーカイブをインストールすることで、これにより既存のレポートは上書きされます。

それで、レポートのアップグレードは、次の 2 つの方法で行えます。

- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールした後、参照用として古いレポートを使用してカスタマイズを再作成します。
- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールします。新規レポートを古いレポートと比較し、カスタマイズを調べます。カスタマイズされたレポートが新規データ・モデルで適切に機能することが確実な場合、カスタマイズされている古いレポートを、レポート・フォルダーに再びコピーします。

7.5.1 バージョンの「セル別のキャンペーン実績」レポートと「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートは、手操作による介入がなければまったく機能しません。さらに、古いレポートの新規バージョンの多くに、拡張およびマイナー・バグ修正が含まれています。この章には、古い「セル別のキャンペーン実績」レポートおよび「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを手動で修正して新規モデルで機能するようにする方法を説明する手順が含まれています。手動で拡張またはマイナー修正を他の 7.5.1 レポートに適用する方法については、この章で説明しません。それらの変更を入手するには、レポートの新規バージョンを使用する必要があります。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

アップグレード・シナリオ

ソース・バージョン	アップグレード・パス
7.5.1 より前	IBM Unica Marketing アプリケーションを 7.5.1 より前のバージョンからアップグレードする場合、レポートのためのアップグレード・パスは存在しません。代わりに、 59 ページの『第 8 章 レポートのインストール』を参照してください。
7.5.1	IBM Unica Marketing アプリケーションを 7.5.1 バージョンからアップグレードする場合、以下のステップを実行します。 • 『レポート・コンポーネントのアップグレードの準備』 • 91 ページの『バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード』 **注:** eMessage にはバージョン 7.5.x から 8.x へのアップグレード・パスが存在しないため、eMessage レポートのためのアップグレード・パスも存在しません。
8.x	IBM Unica Marketing アプリケーションを 8.x バージョンからアップグレードする場合、以下で説明されているステップを実行します。 • 『レポート・コンポーネントのアップグレードの準備』 • 105 ページの『バージョン 8.x からのレポートのアップグレード』

レポート・コンポーネントのアップグレードの準備

レポートのアップグレードおよび構成を開始する前に、このセクションにある準備タスクを完了しておきます。

ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの存在の確認

バージョン 7.x からアップグレードする場合、レポートを使用して作業するために適切な権限を持つ IBM Unica Marketing ユーザーを構成する必要があります。 8.x からアップグレードする場合、このユーザーはおそらく既に存在しています。

このレポート・ユーザーを構成する必要がある場合は、 59 ページの『ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの設定 (必要な場合)』の説明を参照してください。

レポート・スキーマおよびレポート統合の設定が Marketing Platform でアップグレードされていることの確認

Marketing Platform をアップグレードしたときにまだ行っていない場合は、IBM Unica Marketing マスター・インストーラーをレポート・パック・インストーラーとともに実行し、レポート・スキーマをアップグレードする必要があります。

以下のステップを行い、Marketing Platform のレポート・スキーマおよびレポート統合の構成プロパティーがアップグレードされていることを確認します。

1. IBM Unica Marketing システムに **platform_admin** ユーザーとしてログインします。
2. 「**設定**」>「**構成**」を選択します。
3. 「**レポート**」>「**スキーマ**」>「***ProductName***」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成カテゴリーがアップグレードされていない場合、レポート・パッケージはまだこの IBM Unica Marketing システムにインストールされていないことを意味します。適切なレポート・パッケージ・インストーラーを見つけ、すぐに実行し、「**IBM Unica Marketing *Product* レポート・スキーマ**」インストール・オプションを選択します。

注: Marketing Operations をアップグレードする場合、このステップをスキップしてください (Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません)。

4. 「**レポート**」>「**統合**」を展開します。

   スキーマ構成カテゴリーがアップグレードされている場合、Cognos 10 構成の新規カテゴリーが表示されます。「**Cognos 8**」カテゴリーは無効になっていますが、Cognos 10 の構成プロパティーの設定を支援するために、参照の目的で保持されています。レポートのアップグレードを完全に構成およびテストした後、「**カテゴリーの削除**」リンクを使用して、Cognos 8 構成カテゴリーを削除してください。

Cognos モデルおよびレポート・アーカイブのバックアップ

IBM Cognos BI システムで、以下のタスクを実行します。

- モデル・サブディレクトリーのバックアップ・コピーを作成します。つまり、IBM Unica Marketing レポート・パッケージ・インストーラーによってインストールされたアプリケーション・モデルを見つけ、モデル・サブディレクトリー全体をコピーして、バックアップを作成します。
- Cognos Connection のデプロイメント仕様のエクスポート機能を使用して、アプリケーションのレポート・アーカイブのバックアップを作成します。 Content Store 全体をエクスポートします。

ステップ: 必要に応じて、IBM Cognos BI をアップグレードする

必要な場合、インストールするレポート・パックでサポートされるバージョンに IBM Cognos BI をアップグレードします。

このタスクのヘルプについては、IBM Cognos BI の資料を参照してください。

Cognos をアップグレードした後は、このガイドのインストールの章で説明されている Cognos 構成タスクを実行します。

バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード

バージョン 7.5.1 から IBM Unica Marketing アプリケーションをアップグレードする場合、このセクションのステップに従います。

ステップ: レポート・スキーマおよびレポート・ビューまたはレポート・テーブルのアップグレード

注: Marketing Operations をアップグレードしている場合、このステップはスキップして、73 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手』に進んでください。 (Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません。)

Affinium Manager を Marketing Platform にアップグレードした後 (Marketing Platform インストールでのレポート・パック・インストーラーの実行を含む)、以下のステップを実行します。

1. `Unica¥[product]ReportsPack¥schema` ディレクトリーに移動し、`templates_sql_load.sql` スクリプトを見つけます。
2. Marketing Platform システム・テーブル・データベースでスクリプトを実行します。
3. Marketing Platform が実行中であることを確認します。
4. 管理者特権を持つユーザーとして IBM Unica Marketing にログインします。
5. 「**設定**」>「**ユーザー**」の下で、自分に「**ReportsSystem**」役割を付与します。その後、ログアウトして、再びログインします。
6. Campaign のみ。新規キャンペーン属性を追加するためのデータベース・スキーマは Campaign 8.0.0 で変更されています。そのため、レポート・スキーマのカスタマイズに追加のキャンペーン属性が含まれていた場合、以下を行います。
   a. データベース管理ツールを使用して、`UA_CampAttribute` テーブルの各属性の `AttributeID` 列の値を判別します。
   b. IBM Unica Marketing で、「**設定**」>「**構成**」の順に選択し、「**レポート**」>「**スキーマ**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン・カスタム属性**」>「**カラム**」>「**キャンペーン**」の順に展開します。
   c. このインストールで追加された既存のカスタム・キャンペーン属性を削除します。ただし、標準カスタム・キャンペーン属性は削除しません。 (標準カスタム・キャンペーン属性は、インストーラーによってアップグレードされたものです。)
   d. 削除した属性を再作成します。「**属性 ID**」項目に属性の ID を入力します。
7. 63 ページの『ステップ: ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成』で示されている手順のステップに従って、スクリプトの新規バージョンを生成します。
8. 65 ページの『ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成』のセクションの手順を使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルの新規バージョンを作成します。

レポート・ビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生成

この手順では、既存のレポート・ビューやテーブルの更新済み SQL スクリプトを生成する方法について説明します。初めてビューまたはテーブルを構成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」を参照してください。

更新済み SQL スクリプトを生成するには、以下の手順を実行します。

1. 「**設定**」>「**Reports SQL ジェネレーター**」を選択します。「SQL ジェネレーター」ページが表示されます。
2. 「**製品**」項目で、適切な IBM Unica アプリケーションを選択します。
3. 「**スキーマ**」項目で、1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。 93 ページの『データ・ソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、適切なスキーマを判別して選択します。

4. 「**データベース・タイプ**」を選択します。このオプションは、スクリプトを生成しているデータベースのデータベース・タイプと一致している必要があります。
5. 「**生成タイプ**」項目で、適切なオプション (ビュー、マテリアライズ・ビュー、またはテーブル) を選択します。

   「**データベース・タイプ**」を MS SQL Server に設定した場合、オプションとしてマテリアライズ・ビューは表示されません。

   JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを生成できません。
6. 「**除去ステートメントの生成 (Generate Drop Statement)**」の値を「`Yes`」に設定します。
7. (オプション) SQL を調べるには、「**生成**」をクリックします。SQL ジェネレーターはスクリプトを作成し、それをブラウザー・ウィンドウに表示します。
8. 「**ダウンロード**」をクリックします。

   SQL ジェネレーターはスクリプトを作成し、ファイルの保存先を指定することを促すプロンプトを出します。単一のレポート・スキーマを「**スキーマ**」フィールドから選択すると、スクリプト名はスキーマの名前 (`eMessage_Mailing_Execution.sql` など) と同じになります。レポート・スキーマを複数選択した場合、スクリプト名は製品名のみ (例えば、`Campaign.sql`) を使用します。名前の詳細なリストについては、『データ・ソース別の SQL スクリプト』を参照してください。
9. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合、選択したスキーマがはっきりと分かる名前を使用してください。その後、「**保存**」をクリックします。
10. ステップ 7 から 10 を繰り返します。ただし、今度は「**除去ステートメント (Drop Statement)**」フィールドでは「`No`」を選択してください。
11. 生成する各スクリプトに対して、ステップ 3 から 11 を繰り返します。

    注: スクリプトの妥当性検査を無効にする必要がある場合もあります。例えば、おそらく Marketing Platform は IBM Unica アプリケーション・データベースに接続できないものの、とにかくスクリプトは生成する場合などです。妥当性検査を無効にするには、レポートのデータ・ソース構成プロパティーの値を消去します。スクリプトを生成すると、レポート SQL ジェネレーターは、データ・ソースに接続できないという警告を表示しますが、引き続き SQL スクリプトを生成します。

データ・ソース別の SQL スクリプト: 以下の表では、各データ・ソースについて生成する必要のあるスクリプトと結果スクリプトの名前を示し、ビューまたは実体化ビューを作成する場合にどの IBM Unica アプリケーション・データベースに対してどのスクリプトを実行する必要があるかも示します。次のことに注意してください。

- この表にはデータ・ソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしていますが、これらはお客様が変更している場合があります。

- Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに SQL スクリプトを個別に生成してください。

レポート・スキーマ	データ・ソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルトの名前)
Campaign のすべてのレポート・スキーマ	Campaign システム・テーブル (campaignPartition1DS)	`Campaign.sql` (レポート・スキーマごとに別のスクリプトを生成していない場合)。別のスクリプトを生成している場合、各スクリプトの名前は個々のスキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・テーブルに関する表を追跡します。 (campaignPartition1DS)	`eMessage_Mailing_ Performance.sql`
対話配置履歴、対話実績、および対話ビュー	Interact 設計時間データベース (campaignPartition1DS)	`Interact.sql`
対話ラーニング	Interact 学習テーブル (InteractLearningDS)	`Interact_Learning.sql`
対話ランタイム	Interact ランタイム・データベース (InteractRTDS)	`Interact_Runtime.sql`

ビューまたはレポート・テーブルの更新

この手順では、既存のビューまたはレポート・テーブルの更新について説明しています。初めてビューまたはレポート・テーブルを作成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、ご使用の IBM Unica アプリケーションに関するインストール・ガイドに記載されているレポートの章を参照してください。

ビューまたはテーブルを更新する SQL スクリプトの生成とダウンロードが完了した後、アプリケーション・データベースでそれらを実行します。

1. 生成して保存した SQL スクリプトを見つけます。 93 ページの『データ・ソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、どのスクリプトをどのデータベースに対して実行するかを決定します。
2. データベース管理ツールを使用して、除去スクリプトを実行します。
3. データベース管理ツールを使用して、作成スクリプトを実行します。
4. **レポート・テーブルについては**、データベース管理ツールを使用して、実動システムのデータベースから適切なデータを新規テーブルに設定します。
5. **レポート・テーブルおよび実体化ビューの場合**、データベース管理ツールを使用して、IBM Unica アプリケーションの実動データベースと新規レポート・テーブルまたは実体化ビューとの間のデータの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的に実行します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。レポート SQL ジェネレーターがお客様に代わってこの SQL を生成することはありません。

ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手

IBM Unica Marketing システムをセットアップしたときに Marketing Platform のシステム・テーブルの JDBC データ・ソースの構成に使用した JDBC ドライバーおよび必要な関連ファイルを入手します。この章で後述するタスクで、IBM Unica Marketing 認証を使用するように Cognos を構成します。 IBM Unica Marketing 認証を使用する際、Cognos は Marketing Platform システム・テーブルからユーザー情報を入手するために JDBC ドライバーを必要とします。

Cognos Content Manager がインストールされているマシンの Cognos インストールの下の `webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥lib` ディレクトリーに JDBC ドライバーをコピーします。

ステップ: インストーラーの実行および IBM Unica 統合コンポーネントのアップグレード

ご使用の環境が Cognos の分散インストールの場合、Cognos Content Manager が実行されているマシンを判別してください。

1. IBM Cognos サービスを停止します。
2. Cognos Content Manager を実行する IBM Cognos BI システムで、以下の IBM Unica インストーラーを単一ディレクトリーにダウンロードまたはコピーします。
   - IBM Unica
   - Marketing Platform
   - IBM Unica アプリケーション・レポート・パッケージ
3. IBM Unica インストーラーを実行します。 (Marketing Platform およびレポート・パッケージのサブインストーラーが順番に起動されます。)
4. 最初の「**製品**」ウィンドウで、 Marketing Platform およびレポート・パッケージの両方のオプションが選択されていることを確認します。
5. 「**Platform データベース接続**」ウィンドウで、Marketing Platform システム・テーブルへの接続方法に関する必要な情報を指定します。
6. Affinium Manager をアップグレードするかどうかインストーラーに尋ねられたら、「**いいえ**」を指定します。
7. 「**Platform インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)**」ウィンドウが表示されたら、「**Reports for IBM Cognos**」オプションを選択し、他のオプションをクリアします。
8. Marketing Platform インストーラーで JDBC ドライバーのパスを尋ねるプロンプトが出されたら、 73 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブルの JDBC ドライバーの入手』のタスクで Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの絶対パスを入力します。

9. Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストールの場所を尋ねるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール・ディレクトリーの最上位を入力するか、参照します。この項目に提供されるデフォルト値は、IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づかない静的な値です。
10. レポート・パッケージ・インストーラーによってそのインストール・オプションが引き継がれて表示されたら、「**IBM Unica [製品] 用の IBM Cognos パッケージ**」オプションを選択し、レポート・スキーマのオプションをクリアします。このインストール・オプションにより、レポート・アーカイブが Cognos マシンにコピーされます。このアーカイブは、後ほど手動でインポートします。
11. インストーラーが終了したら、Marketing Platform データベースの JDBC ドライバーを IBM Cognos の `webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥lib` ディレクトリーにコピーします。必ずドライバーの**コピー**を行ってください。ドライバーのカット・アンド・ペーストは**行わないで**ください。
12. IBM Cognos サーバーを再始動します。

ステップ: 7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール

バージョン 8.x レポート・パッケージには、新しいレポート、変更されたレポート、およびダッシュボード・レポートがほとんどの IBM Unica Marketing アプリケーション用に提供されています。モデルのアップグレードは可能ですが、7.5.1 レポートをアップグレードすることはできません。その代わりに、新しい 8.x レポートをインストールした後、7.5.1 バージョンでのレポートのカスタマイズを再作成するか、以前のレポートを元のフォルダーにコピーする必要があります。

1. モデルおよび従来のレポートをバックアップしたことを確認してください。
2. IBM Unica Marketing 製品インストール済み環境の *ProductName*`ReportsPack¥Cognos`*N* ディレクトリーに移動します。

   パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。
3. レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば `IBM Unica Marketing Reports for Campaign.zip`) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

   デフォルトの場所は IBM Unica Marketing Cognos インストール済み環境のデプロイメント・ディレクトリーです。Cognos Content Manager とともにインストールされる Cognos 構成ツールでこの場所が指定されています。

   例: `cognos`*N*`¥deployment`。

   パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

   分散 IBM Cognos 環境の場合、これは Content Manager を実行しているシステム上の場所です。
4. IBM Unica Marketing 製品をデフォルト・ディレクトリー (Windows の場合は `C:¥Unica`) にインストールしなかった場合にのみ、このステップの説明にしたがって、いくつかのアップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

   以下のスクリプトを更新してください。

- `preUpgrade_86_fromanyversion.xml`

  Campaign と Interact の場合のみ必要です。
- `upgrade751to80.xml`
- `upgrade80to81.xml`
- `upgrade81to85.xml`
- `upgrade85to86.xml`

スクリプトはすべて、IBM Unica Marketing 製品インストール済み環境の *ProductName*`ReportsPack¥cognos`*N*`¥`*ProductName*`Model` ディレクトリーに置かれています。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

各スクリプトで、製品のインストールの場所を示すために、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集します。ユーザーが必要とするすべての言語について、この変更を行ってください。以下に例を示します。

install_directory `¥ReportsPackCampaign¥cognos`*N*`¥CampaignModel¥translations¥`*L*`¥translations.txt`

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- zh

5. Cognos Connection を開きます。
6. 「**Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)**」>「**設定**」>「**コンテンツの管理**」の順に選択します。
7. ツールバーの「**インポートの新規作成**」ボタン をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
8. Cognos Framework Manager を開きます。
9. 「**プロジェクト**」>「**スクリプトの実行 (Run Script)**」を選択します。
10. 以下のスクリプトを実行します。
    - `upgrade751to80.xml`
    - `upgrade80to81.xml`
    - `upgrade81to85.xml`

- upgrade85to86.xml

スクリプトはすべて、IBM Unica Marketing 製品インストール済み環境の *ProductName*ReportsPack¥cognos*N*¥*ProductName*Model ディレクトリーに置かれています。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

11. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
12. レポートを実行して、正しく機能することを確認します。
13. 7.5.1 レポートをカスタマイズしていた場合には、それらのカスタマイズを再作成します。

    または、アップグレード後のモデルで以前のレポートが正しく機能することを確認できる場合には、以前のレポートを元の場所にコピーします。

    新しいデータ・モデルで機能するよう古い「セル別のキャンペーン実績」レポートおよび古い「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを修正する方法については、このセクションの残りの手順を進めていくと情報が示されます。
14. 複数パーティション用のレポートがインストールされている場合、複数パーティションの構成方法を説明している章の指示に従って、追加のパーティションのレポート・パッケージを構成します。
15. オプション。新しい認証モード「ユーザーごとの認証」については、81 ページの『IBM Unica Marketing 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』の情報を参照してください。

ステップ: 古い「セル別のキャンペーン実績」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「セル別のキャンペーン実績」レポートは正しく機能しません。新しいレポートの代わりに古い「セル別のキャンペーン実績」レポートを使用したい場合は、これを手動で更新する必要があります。

オブジェクト間の「セル別の実績」レポートの修正方法

この手順を使用して、新規データ・モデルで機能するように古いバージョンの以下のオブジェクト間レポートを修正します。

- セル別のキャンペーン実績サマリー
- セル別のキャンペーン実績サマリー (収益を含む)
- セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン実績サマリー

以下のステップを実行します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. **クエリー・エクスプローラー**を参照し、「**クエリーのレポート (Report Query)**」を開いて、レポート内のすべてのクエリー・アイテムのリストを見ます。

4. 3 つのレポートすべてについて、以下のクエリー・アイテムを再マップします。

クエリー項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions]
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポンダー	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者制御グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポンダー制御グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「**総収益**」アイテムを再マップします。

   [Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Gross Revenue]

6. 「**レスポンダー率制御グループ**」の式を更新し、以下のようにします。

```
IF(([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]
  * 1.00)) is missing)
THEN (0)
ELSE(([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]
  * 1.00)))
```

7. 「**詳細フィルター (Detail Filter)**」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のように編集します。

   [Campaign Performance Summary] . [Campaign] . [Campaign ID] in (?CampaignIds?)

8. 「**詳細フィルター (Detail Filter)**」リストから、2 番目の次のような詳細フィルターを削除します。

   [Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
    a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ (Report Package)」を選択します。
    b. 「IBM Unica Campaign パッケージ」を選択して、「**OK**」をクリックします。
    c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
    d. レポートを検証した後、「検証レスポンス (Validation Response)」ウィンドウで「**閉じる**」をクリックします。
11. レポートを保存して実行します。

オブジェクト固有の「セル別の実績」レポートの修正方法

この手順を使用して、新規データ・モデルで機能するように古いバージョンの以下のオブジェクト固有レポートを修正します。

- セル別のキャンペーン実績サマリー
- セル別のキャンペーン実績サマリー (収益を含む)

以下のステップを実行します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. **クエリー・エクスプローラー**を参照し、「**クエリーのレポート (Report Query)**」を開いて、レポート内のすべてのクエリー・アイテムのリストを見ます。
4. 両方のレポートについて、以下のクエリー・アイテムを再マップします。

クエリー項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポンダー	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者制御グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポンダー制御グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「**総収益**」クエリー・アイテムを再マップします。

   ```
   [Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls
   Summary].[Gross Revenue]
   ```

6. 「レスポンダー率制御グループ」の式を更新し、以下のようにします。

   ```
   IF(([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]
    * 1.00)) is missing)
   THEN (0)
   ELSE(([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]
    * 1.00)))
   ```

7. 「**詳細フィルター (Detail Filter)**」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のように編集します。

   ```
   [Campaign Performance Summary].[Campaign].[Campaign ID] in
   (?CampaignIds?)
   ```

8. 2 番目の、次のような詳細フィルターを削除します。

```
[Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell
Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)
```

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
    a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ (Report Package)」を選択します。
    b. 「IBM Unica Campaign パッケージ」を選択して、「**OK**」をクリックします。
    c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
    d. レポートを検証した後、「検証レスポンス (Validation Response)」ウィンドウで「**閉じる**」をクリックします。
11. レポートを保存して実行します。

ステップ: 古い「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートは正しく機能しません。新しいレポートの代わりに古い「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを使用したい場合は、これを手動で更新する必要があります。

「キャンペーン別のオファー実績サマリー」クロス・オブジェクト・レポートを修正する方法

古いバージョンのクロス・オブジェクト「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを新しいデータ・モデルで機能させるには、この手順を使ってそれを修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. **クエリー・エクスプローラー**を参照し、「**クエリーのレポート (Report Query)**」を開いて、レポート内のすべてのクエリー・アイテムのリストを見ます。
3. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポンダー	なし	自動
未コンタクト・レスポンダー	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者制御グループ	なし	自動
ユニーク・レスポンダー制御グループ	なし	自動

4. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポンダー率	自動	自動
レスポンダー率制御グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇制御グループ	自動	自動

5. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポンダー - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポンダー - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポンダー制御グループ - オファー	なし	自動

6. 「**レスポンス・トランザクション - オファー**」クエリー項目の式を、以下のものに変更します。

```
[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
 [Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])
```

7. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者制御グループ - オファー	合計	自動

8. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポンダー率 - オファー	自動	自動
レスポンダー率制御グループ - オファー	自動	自動
上昇制御グループ - オファー	自動	自動

9. レポート合計レベルのカウントに関して、「**合計レスポンス・トランザクション**」の式を次のものに変更します。

```
total ([Response Transactions-Offer])
```

10. また、「**合計レスポンス・トランザクション**」に関して、「**集計関数**」が「**自動**」に設定され、「**ロールアップ集計関数**」が「**自動**」に設定されていることを確認してください。
11. レポートをロックします。
12. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
    a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ (Report Package)」を選択します
    b. 「IBM Unica Campaign パッケージ」を選択して、「**OK**」をクリックします。
    c. 必要に応じて、レポートに関するプロンプトで入力します。
    d. レポートを検証した後、「検証レスポンス (Validation Response)」ウィンドウで「**閉じる**」をクリックします。
13. レポートを保存して実行します。

単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを修正する方法

古いバージョンの単一オブジェクト「キャンペーン別のオファー実績サマリー」レポートを新しいデータ・モデルで機能させるには、この手順を使ってそれを修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. **クエリー・エクスプローラー**を参照し、「**クエリーのレポート (Report Query)**」を開いて、レポート内のすべてのクエリー・アイテムのリストを見ます。
3. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポンダー	なし	自動
未コンタクト・レスポンダー	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者制御グループ	なし	自動
ユニーク・レスポンダー制御グループ	なし	自動

4. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポンダー率	自動	自動
レスポンダー率制御グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇制御グループ	自動	自動

5. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポンダー - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポンダー - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポンダー制御グループ - オファー	なし	自動

6. 「**レスポンス・トランザクション - オファー**」クエリー項目の式を、以下のものに変更します。

```
[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
 [Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])
```

7. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者制御グループ - オファー	合計	自動

8. 以下の「オファー・レベル・カウント」クエリー項目で、次のように集計を構成します。

クエリー項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポンダー率 - オファー	自動	自動
レスポンダー率制御グループ - オファー	自動	自動
上昇制御グループ - オファー	自動	自動

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
    a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ (Report Package)」を選択します
    b. 「IBM Unica Campaign パッケージ」を選択して、「**OK**」をクリックします。
    c. 必要に応じて、レポートに関するプロンプトで入力します。

d. レポートを検証した後、「検証レスポンス (Validation Response)」ウィンドウで「**閉じる**」をクリックします。

11. レポートを保存して実行します。

バージョン 8.x からのレポートのアップグレード

バージョン 8.x から IBM Unica Marketing アプリケーションをアップグレードする場合、このセクションのステップに従います。

ステップ: 8.x モデルのアップグレードおよび新規レポートのインストール

1. IBM Unica 製品インストール済み環境の *ProductName*ReportsPack¥Cognos*N* ディレクトリーに移動します。

   パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

2. レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば `IBM Unica Marketing Reports for Campaign.zip`) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

   デフォルトの場所は Cognos インストール済み環境のデプロイメント・ディレクトリーです。Cognos Content Manager とともにインストールされる Cognos 構成ツールでこの場所が指定されています。例えば、`cognos¥deployment` です。

   分散 Cognos 環境の場合、これは Content Manager を実行しているシステム上の場所です。

3. IBM Unica 製品をデフォルト・ディレクトリー (Windows の場合は `C:¥Unica`) にインストールしなかった場合にのみ、このステップの説明にしたがって、いくつかのアップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

   以下のスクリプトを更新してください。

   - `preUpgrade_86_fromanyversion.xml`

     Campaign と Interact の場合のみ必要です。
   - `upgrade80to81.xml`
   - `upgrade81to85.xml`
   - `upgrade85to86.xml`

   スクリプトはすべて、IBM Unica 製品インストール済み環境の *ProductName*ReportsPack¥cognos*N*¥*ProductName*Model ディレクトリーに置かれています。

   パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

   各スクリプトで、製品のインストールの場所を示すために、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集します。ユーザーが必要とするすべての言語について、この変更を行ってください。以下に例を示します。

install_directory ¥ReportsPackCampaign¥cognos*N*¥CampaignModel ¥translations¥*L*¥translations.txt

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- zh

4. Cognos Connection を開きます。
5. 「**Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)**」>「**設定**」>「**コンテンツの管理**」の順に選択します。
6. ツールバーの「**インポートの新規作成**」ボタン をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
7. Cognos Framework Manager を開きます。
8. 「**プロジェクト**」>「**スクリプトの実行 (Run Script)**」を選択します。
9. 以下のスクリプトを実行します。
   - upgrade80to81.xml
   - upgrade81to85.xml
   - upgrade85to86.xml

   スクリプトはすべて、IBM Unica 製品インストール済み環境の *ProductName*ReportsPack¥cognos*N*¥*ProductName*Model ディレクトリーに置かれています。

   パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。
10. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
11. オブジェクト間の「セル別の実績」およびオブジェクト固有の「セル別の実績」レポートそれぞれに対して、Cognos Report Authoring で以下を行います。
    a. 「**ファイル**」>「**レポート・パッケージ (Report Package)**」を選択します。
    b. 「IBM Unica Campaign パッケージ」を選択して、「**OK**」をクリックします。
    c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
    d. レポートを検証した後、「検証レスポンス (Validation Response)」ウィンドウで「**閉じる**」をクリックします。

付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて

このセクションでは、Marketing Platform の概要を示します。これには、すべてのユーティリティーに当てはまり、個別のユーティリティーの説明では扱われていない詳細が含まれます。

ユーティリティーの場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを提供します。

- 110 ページの『configTool ユーティリティー』 - 構成設定 (製品の登録を含む) のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 114 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティー』 - データ・フィルターを作成します。
- 116 ページの『encryptPasswords ユーティリティー』 - パスワードを暗号化および保管します。
- 117 ページの『partitionTool ユーティリティー』 - パーティションのデータベース・エントリーを作成します。
- 119 ページの『populateDb ユーティリティー』 - Marketing Platform データベースにデータを設定します。
- 120 ページの『restoreAccess ユーティリティー』 - ユーザーに platformAdminRole 役割をリストアします。
- 122 ページの『scheduler_console_client ユーティリティー』 - トリガーを listen するように構成されている IBM Unica スケジューラー・ジョブをリストまたは開始します。

Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、それらが存在するディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリー) から実行します。
- UNIX では、ベスト・プラクティスは、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでユーティリティーを実行することです。異なるユーザー・アカウントでユーティリティーを実行する場合、`platform.log` ファイルの権限を調整して、そのユーザー・アカウントがこのファイルに書き込めるようにします。権限を調整しないと、ユーティリティーはログ・ファイルに書き込むことができず、ツールは正しく機能しているのにエラー・メッセージが表示される可能性があります。

© IBM Corporation 1999, 2012

接続の問題のトラブルシューティング

Marketing Platform ユーティリティーがタスクを正常に完了できない場合、以下の情報を参考にして問題を解決することができます。

- `encryptPasswords` を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。システム・テーブル・データベースに接続するために、これらのユーティリティーは以下の接続情報を使用します。この情報は、Marketing Platform のインストール時に提供される情報を使ってインストーラーによって設定されます。
  - JDBC ドライバー名
  - JDBC 接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
  - データ・ソース・ログイン
  - データ・ソース・パスワード (暗号化)

  この情報は、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにある `jdbc.properties` ファイルに保管されます。このファイルの値を調べ、それが環境に対して正しい値であることを確認します。
- 加えて、Marketing Platform ユーティリティーは、`JAVA_HOME` 環境変数に依存します。これは Marketing Platform インストールの `tools/bin` ディレクトリーにある `setenv` スクリプトまたはコマンド・ラインで設定されます。

  この変数は Marketing Platform インストーラーによって `setenv` スクリプトで自動的に設定されるはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合は `JAVA_HOME` 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。 JDK は Sun バージョンでなければなりません (例えば WebLogic で入手できる JRockit JDK は不可です)。

  設定するときは常に、`JAVA_HOME` 環境変数は 1.6 バージョンの Sun JRE を指す必要があります。

  正しくない JRE を `JAVA_HOME` 環境変数が指す場合、IBM Unica インストーラーを実行する前に `JAVA_HOME` 変数を設定解除する必要があります。これは、以下のように行えます。
  - Windows: コマンド・ウィンドウで、

    `set JAVA_HOME=` *と入力し、右辺を空のまま* `Return` *キーを押します。*
  - *NIX タイプのシステム: 端末で、

    `export JAVA_HOME=` *と入力し、右辺を空のまま* `Return` *キーを押します。*

  これは、実行する Marketing Platform ユーティリティーを起動する前に行います。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字は、エスケープする必要があります。予約文字のリストおよびそれをエスケープする方法については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーの標準オプション

すべての Marketing Platform ユーティリティーで、以下のオプションを使用できます。

`-l logLevel`

コンソールに表示されるログ情報のレベルを設定します。オプションは、`high`、`medium`、および `low` です。デフォルトは `low` です。

`-L`

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルト・ロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語に依存します。 ISO 639-1 および ISO 3166 に応じて、ICU ロケール ID を使ってロケールを指定します。

`-h`

使用法に関する簡潔なメッセージをコンソールに表示します。

`-m`

このユーティリティーのマニュアル・ページをコンソールに表示します。

`-v`

実行の詳細をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティーの実行

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加の構成を行わずに Marketing Platform ユーティリティーを実行することができます。しかし、ユーティリティーをネットワーク上の別のマシンから実行することもできます。この手順では、それを行うために必要なステップについて説明します。

追加マシンで Marketing Platform ユーティリティーを設定する方法

1. この手順を実行するマシンが以下の前提条件を満たしていることを確認してください。
   - 正しい JDBC ドライバーがマシンに存在しているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。
   - マシンに Marketing Platform システム・テーブルへのネットワーク・アクセスがなければなりません。
   - マシンに Java ランタイム環境がインストールされているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。
2. Marketing Platform システム・テーブルに関する以下の情報を収集します。
   - JDBC ドライバー・ファイルのシステム上の完全修飾パス。
   - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

インストーラーのデフォルト値は、IBM Unica インストール・ディレクトリーの下に置く JRE へのパスです。このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。

- データベース・タイプ
- データベース・ホスト
- データベース・ポート
- データベース名/システム ID
- データベース・ユーザー名
- データベース・パスワード

3. IBM インストーラーを実行して、Marketing Platform をインストールします。

   Marketing Platform システム・テーブルに関して収集したデータベース接続情報を入力します。 IBM インストーラーに精通していない場合は、「Campaign インストール・ガイド」または「Marketing Operations インストール・ガイド」を参照してください。

   Marketing Platform Web アプリケーションは、配置する必要ありません。

参照: Marketing Platform ユーティリティー

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティー、機能の詳細、構文、および例について説明します。

configTool ユーティリティー

「構成」ページのプロパティーと値は、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。 `configTool` ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルとの間で構成設定のインポートおよびエクスポートを行います。

configTool を使用する場合

`configTool` を使用する理由として、以下が考えられます。

- Campaign に付属のパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。このテンプレートは、「構成」ページを使用して変更したり複製したりできます。
- 製品インストーラーがプロパティーをデータベースに自動的に追加できない場合に IBM Unica Marketing 製品を登録する (その構成プロパティーをインポートする)。
- バックアップのため、または IBM Unica Marketing の別のインストールにインポートするために、構成設定の XML バージョンをエクスポートする。
- 「**カテゴリーの削除**」リンクを持たないカテゴリーを削除する。これを行うには、`configTool` を使用して構成をエクスポートし、カテゴリーを作成する XML を手動で削除し、編集した XML を `configTool` を使用してインポートします。

重要: このユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの `usm_configuration` および `usm_configuration_values` テーブルを変更します。これには、構成プロパティーとその値が含まれます。最良の結果を得るために、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、または `configTool`

を使用して既存の構成をエクスポートし、結果として生成されるファイルをバックアップします。このようにして、configTool を使用してインポートを行う際にエラーが発生したときに構成をリストアできるようにしておきます。

有効な製品名

このセクションで後述するように、configTool ユーティリティーは、製品を登録および登録解除するコマンドで製品名をパラメーターとして使用します。 IBM Unica Marketing の 8.0.0 リリースでは、多くの製品名が変更されています。しかし、configTool によって認識される名前は変更されていません。以下に、configTool で使用する有効な製品名、および製品の現行名をリストします。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Optimize	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
NetInsight	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

configTool -d -p "*elementPath*" [-o]

configTool -i -p "*parent ElementPath*" -f *importFile* [-o]

configTool -x -p "*elementPath*" -f *exportFile*

configTool -r *productName* -f *registrationFile* [-o]

configTool -u *productName*

コマンド

-d -p "*elementPath*"

構成プロパティー階層内のパスを指定して、構成プロパティーとその設定を削除します。

要素パスは、カテゴリーおよびプロパティーの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリーまたはプロパティーを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティーの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドでは、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリーとプロパティーだけを削除できます。アプリケーション全体を登録解除するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページで「**カテゴリーの削除**」リンクを持たないカテゴリーを削除するには、-o オプションを使用します。

-i -p "*parentElementPath*" -f *importFile*

指定された XML ファイルから構成プロパティーとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリー・インポート先の上の親要素へのパスを指定します。 configTool ユーティリティーは、パスで指定するカテゴリーの下に プロパティーをインポートします。

カテゴリーは最上位より下のどのレベルにでも追加できますが、最上位カテゴリーと同じレベルに追加することはできません。

親要素パスは、カテゴリーおよびプロパティーの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリーまたはプロパティーを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティーの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

インポート・ファイルの場所は、tools/bin ディレクトリーからの相対パスで指定することも、完全ディレクトリー・パスで指定することもできます。相対パスを指定するかパスを指定しない場合、configTool はまず tools/bin ディレクトリーに相対するファイルを探します。

デフォルトではこのコマンドは既存のカテゴリーを上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。

-x -p "*elementPath*" -f *exportFile*

構成プロパティーとその設定を、指定された名前の XML ファイルにエクスポートします。

構成プロパティーをすべてエクスポートすることも、構成プロパティー階層内のパスを指定することによってエクスポートを特定のカテゴリーに制限することもできます。

要素パスは、カテゴリーおよびプロパティーの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、希望のカテゴリーまたはプロパティーを選択すると、右側のペインで括弧付きで表示されるものを取得できます。構成プロパティーの階層のパスを | 文字を使用して区切り、パスを二重引用符で囲みます。

エクスポート・ファイルの場所は、現行ディレクトリーからの相対パスで指定することも、完全ディレクトリー・パスで指定することもできます。ファイルの指定に区切り文字が含まれていない場合 (UNIX の場合は /、Windows の場合は / または ¥)、configTool は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにファイルを作成します。 xml 拡張子を指定しなくても、configTool はそれを追加します。

-r *productName* -f *registrationFile*

アプリケーションを登録します。登録ファイルの場所は、tools/bin ディレクトリーからの相対パスにすることも、完全パスにすることもできます。デフォルトではこのコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。 *productName* パラメーターは、上にリストしたものの 1 つでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r オプションを使用する場合、登録ファイルの最初のタグは、XML の <application> でなければなりません。

  構成プロパティーを Marketing Platform データベースに挿入するために使用できる他のファイルが製品で提供されている場合があります。それらのファイルでは、-i オプションを使用します。 -r オプションでは、最初のタグが <application> タグのファイルだけを使用することができます。
- Marketing Platform の登録ファイルの名前は Manager_config.xml で、最初のタグは <Suite> です。新規インストールでこのファイルを登録するには、populateDb ユーティリティーを使用するか、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」の説明に従って Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 初期インストールの後、Marketing Platform 以外の製品を再び登録するには、 -r オプションおよび -o とともに configTool を使用して、既存のプロパティーを上書きします。

-u *productName*

productName によって指定されるアプリケーションを登録解除します。製品カテゴリーにパスを組み込む必要はありません。製品名で十分です。 *productName* パラメーターは、上にリストしたものの 1 つでなければなりません。これにより、その製品のすべてのプロパティーおよび構成設定が削除されます。

オプション

-o

-i または -r とともに使用すると、既存のカテゴリーまたは製品の登録 (ノード) を上書きします。

-d とともに使用すると、「構成」ページで「**カテゴリーの削除**」リンクを持たないカテゴリー (ノード) を削除できます。

例

- Marketing Platform インストールの下の conf ディレクトリーにあるファイル Product_config.xml から構成設定をインポートします。

  ```
  configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
  ```
- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートのいずれかをデフォルトの Campaign パーティション partition1 にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレート OracleTemplate.xml が Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーに置かれていることが前提です。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f
OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を D:¥backups ディレクトリーにあるファイル myConfig.xml にエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- 既存の Campaign パーティション (データ・ソース・エントリーを備えている) をエクスポートし、ファイル partitionTemplate.xml に保存し、Marketing Platform インストールの下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f
partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform インストールの下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーにあるファイル app_config.xml を使用してアプリケーション productName を手動で登録し、このアプリケーションの既存の登録の上書きを強制します。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- アプリケーション productName を登録解除します。

```
configTool -u productName
```

datafilteringScriptTool ユーティリティー

datafilteringScriptTool ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブル・データベースのデータ・フィルター・テーブルにデータを設定します。

XML をどのように書くかに応じて、このユーティリティーには使用方法が 2 とおりあります。

- XML 要素の 1 つのセットを使用して、項目値の一意の組み合わせに基づいてデータ・フィルター (一意の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター) を自動生成します。
- XML 要素の若干異なるセットを使用して、ユーティリティーによって作成される各データ・フィルターを指定することができます。

XML の作成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform管理者ガイド*」を参照してください。

datafilteringScriptTool を使用する場合

datafilteringScriptTool は、新規データ・フィルターを作成するときに使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform を配置し、実行しておく必要があります。

SSL との datafilteringScriptTool の使用

片方向 SSL を使用して Marketing Platform を配置している場合、datafilteringScriptTool スクリプトを変更し、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイル名とパス
- トラストストア・パスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (`.bat` または `.sh`) を開き、次のような行を見つけます (例は Windows バージョンの場合)。

```
:callexec

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

この行を次のように編集します (新規テキストが**太字**で示します)。`myTrustStore.jks` および `myPassword` は、ご自分のトラストストア・パスとファイル名およびトラストストア・パスワードに置き換えてください。

```
:callexec

SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"

-Djavax.net.ssl.trustStore="C:¥security¥myTrustStore.jks"

-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
%SSL_OPTIONS%

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

`datafilteringScriptTool -r` *`path`*`file`

コマンド

`-r` *`path`*`_file`

指定された XML ファイルからデータ・フィルターの仕様をインポートします。インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにファイルがない場合、パスを指定し、*`path`*`_file` パラメーターを二重引用符で囲みます。

例

- `C:¥unica¥xml` ディレクトリーにあるファイル `collaborateDataFilters.xml` を使用して、データ・フィルター・システム・テーブルにデータを設定します。

  ```
  datafilteringScriptTool -r "C:¥unica¥xml¥collaborateDataFilters.xml"
  ```

encryptPasswords ユーティリティー

encryptPasswords ユーティリティーは、Marketing Platform が使用する以下の 2 つのパスワードのうちのいずれかを暗号化して保管するために使用します。

- Marketing Platform がシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。このユーティリティーは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform インストールの下の tools¥bin ディレクトリーにある jdbc,properties ファイルに保管されている) を新規パスワードで置き換えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーによって提供されるデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を一緒に使用するように構成されたときに、Marketing Platform によって使用される鍵ストア・パスワード。証明書は、自己署名証明書か認証局からの証明書のいずれかになります。

encryptPasswords を使用する場合

encryptPasswords は、以下の理由で使用します。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベースにアクセスするために使用されるアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成したとき、または認証局から証明書を取得した場合。

前提条件

- encryptPasswords を実行して新規データベース・パスワードを暗号化して保管する前に、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルのバックアップ・コピーを作成しておきます。
- encryptPasswords を実行して鍵ストア・パスワードを暗号化して保管する前に、デジタル証明書を作成または取得し、鍵ストア・パスワードを覚えておく必要があります。

その他の前提条件は、107 ページの『付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

encryptPasswords -d *databasePassword*

encryptPasswords -k *keystorePassword*

コマンド

-d *databasePassword*

データベース・パスワードを暗号化します。

-k *keystorePassword*

鍵ストア・パスワードを暗号化し、ファイル pfile に保管します。

例

- Marketing Platform をインストールした時に、システム・テーブル・データベース・アカウントのログインが myLogin に設定されています。インストール後のあ

る時に、このアカウントのパスワードを newPassword に変更します。encryptPasswords を以下のように実行し、データベース・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```

- SSL を使用するように IBM Unica Marketing アプリケーションを構成し、デジタル証明書を作成または取得しました。 encryptPasswords を以下のように実行し、鍵ストア・パスワードを暗号化および保管します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool ユーティリティー

パーティションは Campaign ポリシーおよび役割と関連付けられます。これらのポリシーおよび役割、およびそのパーティションとの関連付けは Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。 partitionTool ユーティリティーは、パーティションの基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードします。

partitionTool を使用する場合

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードする必要があります。

Campaign での複数パーティションの設定について詳しくは、ご使用のバージョンの Campaign に該当するインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

パーティションの説明、またはユーザー、グループ、あるいはパーティションの名前にスペースが含まれる場合、それらを二重引用符で囲む必要があります。

追加の制限については、 107 ページの『付録 A. Marketing Platform ユーティリティーについて』を参照してください。

構文

partitionTool -c -s *sourcePartition* -n *newPartitionName* [-u *admin_user_name*] [-d *partitionDescription*] [-g *groupName*]

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用できます。

-c

-s オプションを使用して指定する既存のパーティションのポリシーおよび役割を複製 (クローンを作成) し、-n オプションを使用して指定する名前を使用します。これらのオプションはどちらも c で必要です。このコマンドは、以下を行います。

- Campaign で、管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方に管理者の役割を持つ新規 IBM Unica Marketing ユーザーを作成します。指定するパーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。

- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザーをそのグループのメンバーにします。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成します。
- ソース・パーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製し、それらを新規パーティションに関連付けます。
- 複製されるポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複製します。
- 複製される役割ごとに、ソース役割でマップされた方法と同じ方法ですべての機能をマップします。
- 新規 Marketing Platform グループを、役割の複製時に作成される最後のシステム定義の管理役割に割り当てます。デフォルト・パーティション partition1 のクローンを作成する場合、この役割はデフォルトの管理役割 (管理) になります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c と共にのみ使用されます。 -list コマンドからの出力に表示される説明を指定します。 256 文字以下でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。ユーティリティーによって作成される Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、この Marketing Platform のインスタンス内で固有でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの partition_nameAdminGroup になります。

-n *partitionName*

-list ではオプションで、-c では必須です。 32 文字以下でなければなりません。

-list と共に使用する場合、情報をリストするパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定するパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、(「構成」ページでパーティション・テンプレートを使用して) パーティションを構成したときに付けた名前と一致する必要があります。

-s *sourcePartition*

必須。-c とのみ使用されます。複製されるソース・パーティションの名前。

-u *adminUserName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。複製されるパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、この Marketing Platform のインスタンス内で固有でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの *partitionName*AdminUser になります。

パーティション名は、このユーザーのパスワードとして自動的に設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
  - partition1 からクローン作成
  - パーティション名は `myPartition`
  - デフォルト名 (`myPartitionAdminUser`) およびパスワード (`myPartition`) を使用
  - デフォルト・グループ名 (`myPartitionAdminGroup`) を使用
  - 説明は「ClonedFromPartition1」

  ```
  partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
  ```
- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
  - partition1 からクローン作成
  - パーティション名は `partition2`
  - ユーザー名 `customerA` を指定し、自動的に割り当てられるパスワード `partition2` を使用
  - グループ名 `customerAGroup` を指定
  - 説明は「PartitionForCustomerAGroup」

  ```
  partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g
  customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
  ```

populateDb ユーティリティー

`populateDb` ユーティリティーは、デフォルト (シード) データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。

IBM インストーラーは、Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに設定することができます。しかし、会社の方針でインストーラーによるデータベースの変更が許可されていない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合、このユーティリティーを使用して Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト・データを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティー役割および権限が含まれます。 Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティー役割および権限と、デフォルトのユーザーおよびグループが含まれます。

構文

`populateDb -n` *`productName`*

コマンド

`-n` *`productName`*

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は `Manager` (Marketing Platform の場合) および `Campaign` (Campaign の場合) です。

例

- Marketing Platform デフォルト・データを手動で挿入します。

  ```
  populateDb -n Manager
  ```

- Campaign デフォルト・データを手動で挿入します。

  ```
  populateDb -n Campaign
  ```

restoreAccess ユーティリティー

`restoreAccess` ユーティリティーは、間違えて PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーをロックアウトしてしまった場合や、Marketing Platform にログインすることができなくなった場合に、Marketing Platform へのアクセスをリストアするために使用できます。

restoreAccess を使用する場合

`restoreAccess` は、このセクションで説明されている 2 つの状況下で使用できます。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になっている

Marketing Platform の PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーがシステムで無効になる可能性があります。以下に、platform_admin ユーザー・アカウントがどのように無効になるかを示す例を示します。 PlatformAdminRole 権限を持つユーザーが 1 人 (platform_admin ユーザー) だけであるとします。「構成」ページの「**全般 | パスワード設定**」カテゴリーの「**許可されるログイン再試行の最大回数**」プロパティーが 3 に設定されており、platform_admin としてログインを試みているユーザーが間違ったパスワードを連続 3 回入力するとします。このログイン試行の失敗が原因で、platform_admin アカウントはシステム内で無効になります。

この場合、`restoreAccess` を使用すると、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを Marketing Platform システム・テーブルに追加することができます。

このように `restoreAccess` を実行すると、このユーティリティーは、指定したログイン名とパスワードおよび PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。

指定したユーザー・ログイン名が内部ユーザーとして Marketing Platform に存在する場合、そのユーザーのパスワードが変更されます。

ログイン名 PlatformAdmin および PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけが、例外なくすべてのダッシュボードを管理することができます。そのため、

platform_admin ユーザーが無効になっていて、restoreAccess によってユーザーを作成する場合、ログインとして platform_admin を持つユーザーを作成する必要があります。

Active Directory 統合の構成が不適切である

構成が不適切な Windows Active Directory 統合を実装してログインできなくなった場合、restoreAccess を使用して、ログインを行えるようにします。

このように restoreAccess を実行すると、このユーティリティーは、「Platform」|「セキュリティー」|「ログイン方法」プロパティーの値を「Windows 統合ログイン」から「Marketing Platform」に変更します。この変更により、ロックアウトされる前に存在していたユーザー・アカウントを使ってログインできるようになります。オプションで、新規ログイン名およびパスワードを指定することもできます。このように restoreAccess ユーティリティーを使用する場合、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用する際は、パスワードに関する以下の点に注意してください。

- restoreAccess ユーティリティーでは空のパスワードがサポートされておらず、パスワード規則は適用されません。
- 使用中のユーザー名を指定すると、そのユーザーのパスワードはユーティリティーによってリセットされます。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用すると、「Unica | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値が「Marketing Platform」にリセットされます。有効にするには Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u *loginName* オプションとともに使用すると、PlatformAdminRole ユーザーが作成されます。

オプション

-u *loginNname*

PlatformAdminRole 権限を持ち、指定されたログイン名のユーザーを作成します。-p オプションとともに使用する必要があります。

-p *password*

作成するユーザーのパスワードを指定します。 -u で必要です。

例

- PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

  ```
  restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
  ```

- ログイン方法の値を「Unica Marketing Platform」に変更し、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

  ```
  restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
  ```

scheduler_console_client ユーティリティー

IBM Unica Marketing スケジューラーで構成されるジョブがトリガーを listen するように設定されている場合、このユーティリティーによってジョブをリストし、開始することができます。

SSL が有効な場合の処置

SSL を使用するように Marketing Platform Web アプリケーションが構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書と同じ SSL 証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには、以下のステップを実行します。

- scheduler_console_client によって使用される JRE の場所を判別します。
  - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合、それが指す JRE が、scheduler_console_client ユーティリティーによって使用される JRE です。
  - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトかコマンド・ラインのいずれかで設定される JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

  Sun JDK には、証明書のインポートに使用できる keytool というプログラムが含まれています。このプログラムについて詳しくは、Java の資料を参照してください。あるいは、プログラムを実行するときに -help を入力してヘルプにアクセスしてください。

証明書が一致しない場合、Marketing Platform ログ・ファイルに以下のようなエラーが入ります。

```
原因: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: 要求されているターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by:
sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find
```

valid certification path to requested target)

前提条件

Marketing Platform がインストール、配置、および実行されている必要があります。

構文

scheduler_console_client -v -t *trigger_name user_name*

scheduler_console_client -s -t *trigger_name user_name*

コマンド

-v

指定されたトリガーを listen するように構成されているスケジューラー・ジョブをリストします。

-t オプションとともに使用する必要があります。

-s

指定されたトリガーを listen するように構成されているスケジューラー・ジョブを実行します。

-t オプションとともに使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーで構成されるトリガーの名前。

例

- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブをリストします。

  scheduler_console_client -v -t trigger1
- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブを実行します。

  scheduler_console_client -s -t trigger1

Marketing Platform SQL スクリプトについて

このセクションでは、Marketing Platform システム・テーブルに関係する各種タスクを実行するための Marketing Platform で提供されている SQL スクリプトについて説明します。それらのスクリプトは、Marketing Platform システム・テーブルに対して実行されるように設計されています。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform インストールの下の db ディレクトリーにあります。

データベース・クライアントを使用して SQL を Marketing Platform システム・テーブルに対して実行する必要があります。

参照: Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform SQL スクリプトについて説明します。

すべてのデータの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)

`Manager_Schema_DeleteAll.sql` スクリプトは、テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべてのデータを削除します。このスクリプトは、すべてのユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、データ・フィルター、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する場合

破損データによって Marketing Platform のインスタンスが使用できない場合に、`ManagerSchema_DeleteAll.sql` を使用することもできます。

追加要件

`ManagerSchema_DeleteAll.sql` の実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- 119 ページの『populateDb ユーティリティー』の説明に従って、`populateDB` ユーティリティーを実行します。 `populateDB` ユーティリティーは、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループをリストアしますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループはリストアしません。
- 110 ページの『configTool ユーティリティー』の説明に従って、`config_navigation.xml` ファイルとともに configTool ユーティリティーを使用してメニュー項目をインポートします。
- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス・コントロール・プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。
- 既存のデータ・フィルターをリストアする場合、最初に作成された XML を使用してデータ・フィルターを指定し、`datafilteringScriptTool` ユーティリティーを実行します。

データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)

`ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql` スクリプトは、データ・フィルター・テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべてのデータ・フィルター・データを削除します。このスクリプトは、すべてのデータ・フィルター、データ・フィルター構成、オーディエンス、およびデータ・フィルターの割り当てを Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する場合

Marketing Platform システム・テーブルから他のデータは削除せずにすべてのデータ・フィルターを削除する場合に、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用することもできます。

重要: 「デフォルトのテーブル名」および「デフォルトのオーディエンス名」 という 2 つのデータ・フィルター・プロパティーの値は ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトによって再設定されません。使用するデータ・フィルターでこれらの値が無効になった場合、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要があります。

システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)

ManagerSchema_DropAll.sql スクリプトは、すべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブル、ユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: 以前のバージョンの Marketing Platform システム・テーブルが含まれているデータベースに対してこのスクリプトを実行する場合、制約が存在しないことを示すエラー・メッセージをデータベース・クライアントで受け取る可能性があります。これらのメッセージは無視してかまいません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する場合

引き続き使用するテーブルが他に含まれているデータベースにシステム・テーブルがある Marketing Platform のインスタンスをアンインストールした場合に、ManagerSchema_DropAll.sql を使用することができます。

追加要件

このスクリプトの実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- 126 ページの『システム・テーブルの作成』の説明に従って、適切な SQL スクリプトを実行し、システム・テーブルを再作成します。
- 119 ページの『populateDb ユーティリティー』の説明に従って、populateDB ユーティリティーを実行します。 populateDB ユーティリティーを実行すると、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループがリストアされますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループはリストアされません。
- 110 ページの『configTool ユーティリティー』の説明に従って、config_navigation.xml ファイルとともに configTool ユーティリティーを使用してメニュー項目をインポートします。
- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス・コントロール・プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。

システム・テーブルの作成

会社の方針でインストーラーを使用して Marketing Platform システム・テーブルを自動で作成することが許可されていない場合、以下の表で説明されているスクリプトを使用して手動で作成します。スクリプトは、示されている順序で実行する必要があります。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	• ManagerSchema_DB2.sql マルチバイト文字 (例えば、中国語、日本語、または韓国語) をサポートする予定の場合、ManagerSchema_DB2_unicode.sql スクリプトを使用します。 • ManagerSchema__DB2_CeateFKConstraints.sql • active_portlets.sql
Microsoft SQL Server	• ManagerSchema_SqlServer.sql • ManagerSchema__SqlServer_CeateFKConstraints.sql • active_portlets.sql
Oracle	• ManagerSchema_Oracle.sql • ManagerSchema__Oracle_CeateFKConstraints.sql • active_portlets.sql

スケジューラー機能 (事前に定義された間隔でフローチャートを実行するように構成することができる) を使用する予定の場合、この機能をサポートするテーブルを作成する必要もあります。スケジューラー・テーブルを作成するには、以下の表の説明に従って、該当するスクリプトを実行します。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	quartz_db2.sql
Microsoft SQL Server	quartz_sqlServer.sql
Oracle	quartz_oracle.sql

システム・テーブル作成スクリプトを使用する場合

インストーラーによるシステム・テーブルの自動作成を可能にしていない場合、または ManagerSchema_DropAll.sql を使用してすべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除した場合、Marketing Platform をインストールまたはアップグレードするときに、これらのスクリプトを使用する必要があります。

付録 B. IBM Unica 製品のアンインストール

以下のような場合に、IBM Unica 製品のアンインストール操作が必要になることがあります。

- システムの使用を辞める。
- システムから IBM Unica 製品を除去する。
- システムの空きスペースを増やす。

IBM Unica Marketing 製品のインストール時に、アンインストーラーが `Uninstall_Product` ディレクトリーに含まれます (`Product` は IBM Unica 製品の名前)。また、Windows ではコントロール・パネルの「**プログラムの追加と削除**」リストに項目が追加されます。

IBM Unica アンインストーラーを実行すると、すべての構成ファイル、インストーラー・レジストリー情報、およびユーザー・データがシステムから確実に除去されます。アンインストーラーを実行する代わりに手動でインストール・ディレクトリーのファイルを除去した場合、将来、同じ場所に IBM Unica 製品を再インストールしたときに不完全なインストールになる可能性があります。製品をアンインストールしても、製品のデータベースは削除されません。アンインストーラーは、インストール中に作成されたデフォルト・ファイルだけを削除します。インストール後に作成もしくは生成されたどんなファイルも削除しません。

IBM Unica 製品をアンインストールするには

IBM Unica 製品をシステムから正しく除去するには、以下の説明に従ってください。

注: UNIX では、IBM Unica Marketing をインストールしたのと同じユーザー・アカウントでアンインストーラーを実行する必要があります。

1. IBM Unica Marketing 製品の Web アプリケーションを WebSphere または WebLogic からアンデプロイします。
2. WebSphere または WebLogic をシャットダウンします。
3. アンインストール対象の製品に関連した実行中のプロセスをすべて停止します。例えば Campaign または Optimize 製品をアンインストールする前に、これらの製品のリスナー・サービスを停止します。
4. IBM Unica Marketing アンインストーラーを実行して、ウィザードの指示に従います。

   アンインストーラーは `Uninstall_Product` ディレクトリーにあります (`Product` は IBM Unica Marketing 製品の名前)。

   不在モードを使ってインストールされた製品をアンインストールする場合、不在モードでアンインストールが実行されます (ユーザー対話を求めるダイアログは提示されません)。

© IBM Corporation 1999, 2012

IBM Unica 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM Unica 技術サポートに電話することができます。 このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM Unica 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM Unica 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM Unica 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM Unica のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「**ヘルプ**」>「**バージョン情報**」を選択することにより表示できます。 「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM Unica アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM Unica 技術サポートのコンタクト情報

IBM Unica 技術サポートとの連絡を取る方法については、 IBM Unica 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2012

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。 日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。 本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。 これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。 本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。 実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。 本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。 それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

© IBM Corporation 1999, 2012

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。 そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。 さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。 実際の結果は、異なる可能性があります。 お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。 IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。 IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。 卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。 より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。 これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。 お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。 このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。 従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。 他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。 現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。 Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件 (例えば、プライバシー・ポリシー) への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用について詳しくは、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。

Printed in Japan

日本アイ･ビー･エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21